

保 育 子 育 て 研 究 所 年 報

2011年度

— 第9号 —

桜花学園名古屋キャンパス保育子育て研究所



目 次

はじめに	【豊田和子】	2
2011 年度 第 9 回夏季保育研究セミナーの報告	【岡林恭子】	3
2011 年度 講演会報告		
「子どもたちのあそびを豊かに ―あそびの意味と指導のあり方―」 (演題 「遊びのちから」 ―ドキドキわくわくの世界を子どもとどう創っていくか)	【河崎道夫】	8
あそびのちから～河崎道夫氏の講演を聴いて	【嶋守さやか】	20
「遊びのちから」 ―ドキドキわくわくの世界を子どもとどう創っていくか―を聴いて	【小川絢子】	22
研究報告		
「養護」という言葉をめぐって	【小嶋玲子】	24
石巻市震災ボランティアの活動報告	【野津 牧・岡林恭子】	34
実践記録		
幸せに生きる大人像を思い描いた、3 歳未満児保育 【近藤直樹 (園長)・若林則子 (主任)・渡邊道子 (2 歳児クラス担任) 石塚真以 (1 歳児クラス担任)・伊藤 茜 (1 歳児クラス担任)・ 川島 恵 (0 歳児クラス担任)】		55
東日本大震災への学生ボランティア体験報告		
(1) 大船渡市七夕まつりボランティアに参加して	【越橋美波】	73
(2) 岩手県大船渡市の七夕祭りボランティア	【山田英実】	74
資料		
2011 年度 事業報告		
第 9 回夏季保育研究セミナーのアンケートから	【辻岡和代】	76
講演会のアンケートから	【野津 牧】	79
子育て交流会の経過・参加人数・内容		80
奥付け (執筆者)・編集後記		

はじめに

2011年は、東日本大震災、原発事故、台風12号による被害等により日本は苦難の年となりました。「3・11」以来、私たち日本中の誰しものが、恐怖・不安・心配・孤独などあらゆるマイナスの感情を実感すると同時に、応援・頑張り・支え合い・絆など人間社会に欠かせないプラスの行動も生まれました。戦後長く続いた平和と繁栄の陰に、原発事故がもたらす危険と恐怖が潜んでいたことに私たちは、余りにも鈍感になっていたのかもしれませんが。私事で恐縮ですが、私は広島県の生まれです。母は20歳の時、1945年8月6日に被爆した兄の最期を看取るために原爆投下の翌日から10日間ほど地獄と化した広島で、あの忌まわしい空気を吸いながら青春を体験しました。その後1年間は瀕死の病の床に就き、翌年に結婚して私たち3人の子供が生まれました。私の家では幼い頃から毎年8月6日が近づくと嫌というほど原爆の話が聞かされ、高校生の時には郷土出身の作家井伏鱒二の『黒い雨』を読みました。それでも実感はわかかなかったように記憶しています。その後、広島の大学に行つて、長田新先生の『原爆の子』を読み、大学正門向かいの原爆病院へも再々慰問に行きました。しかし、私はまだ子供であり、普通の高校生、平凡な大学生に過ぎませんでした。当時の原爆体験者であり子供たちの将来を心配していた大人の不安や恐怖心など知る由もなく、普通の子供から無知な成人になったように思います。

やがて、保育の勉強をするようになって、広島保育者たちと一緒に「青いそらは、青いままで、こどもらに伝えたい〜♪♪」という歌を口ずさむようになって、ようやく、平和は与えられるものではなく、守っていくもの・築いていくものだという社会責任のようなものを少しずつ自覚するようになりました。

今、多くの大人が子供たちの将来を案じ、子供たちが健康で安心して成長できる社会環境や自然を守ろう、そして、そのためには、人と人がつながること、力を合わせて何かを為すことが、小さくてもその一歩になることを感じているのだと思います。本学の「保育・子育て研究所」もこの使命を貫かねばという思いです。地域の人たちとつながること、研究者がお互いの専門知を生かしながら平和を願ってつながること、保育者をめざす若者が子供たちとつながること、そういったさまざまな「つながり」の中から、お互いの命を大切に、その命をまた、次の命につなげていくという連鎖が守られるのだと信じます。

そのためには、本研究所は、地域社会における実践的貢献のパイプを更に太くすること、保育の専門的シンクタンクを活用した情報発信や研究を充実させること、子供の成長を支える専門職をめざす学生たちの活動の場を広げていくこと等が、具体的な課題であると認識しています。社会からの信頼に応える研究所をめざして研究員の力を結集しましょう。あわせて、卒業生・本学関係者・地域の方々からの力強い応援を宜しくお願い申し上げます。

2012年3月

名古屋キャンパス保育子育て研究所

所長 豊田 和子

2011年度 第9回夏季保育研究セミナーの報告

本学卒業生を中心とした若手保育者対象のセミナーを、下記のプログラムにそって開催いたしました。今回は特に「ホームカミング・ディ」と位置づけて、卒業生が我が家に戻ったような気持ちになり、元気を取り戻せるようなセミナーになることを願って楽しい企画にしました。

記

日 時 2011年7月24日（日）

場 所 名古屋短期大学 桜花学園大学

主 催 名古屋短期大学 桜花学園大学 保育子育て研究所

対象者 保育者（学生の参加も可）

参加者 143名

（名古屋短期大学 55名 桜花学園大学 75名 学生 4名 その他 9名）

<午前のプログラム>

10:00～

開会式

○あいさつ 豊田和子（研究所長）
高田吉朗（保育科学科長）
左口真朗（教務部長）

諸連絡

10:15～

講演会 「笑顔いっぱい！ あそびいっぱい！」

イラストレーター♪あそび作家

浦中 こういち さん

12:20～13:10 昼食・休憩

<午後のプログラム>

13:10～14:40 1限 分科会（場所） <担当者>

A 実践屋台村+手遊び村（食堂） <高田・田端・中川・水谷>

B 乳児保育	(721 教室)	<高柳・辻岡・寺島>
C 幼児保育①	(722 教室)	<牧・鏡>
D 幼児保育②	(723 教室)	<基村・石山・嶋守>
E 特別支援保育	(724 教室)	<河内・今野・小川絢>
14:50～16:20 2限 分科会 (場所) <担当者>		
F 実践屋台村+手遊び村	(食堂)	<高田・田中・田端・中川・水谷>
G 乳児保育	(721 教室)	<村松・平野・近藤茂>
H 幼児保育①	(722 教室)	<左口・豊田・古畑>
I 幼児保育②	(723 教室)	<岡林・原田>
E 保護者支援	(724 教室)	<小嶋・橋本・榊原>

講演会の記録

本年度は、講師にイラストレーター♪あそび作家の浦中こういちさんをお招きし、「笑顔いっぱい！あそびいっぱい！」と題して講演会を行いました。浦中こういちさんは、イラストレーター♪あそび作家としてオリジナルなあそび歌を数多く作り、全国各地の保育園・幼稚園・子育て支援の場などで、あそび歌やふれあいあそび・パネルシアターなどを通して活躍してみえます。当日は若さあふれる浦中さんの歌声や曲にのせられて、参加者は思いっきり体を動かしたり歌ったり笑ったりの楽しい時間を過ごすことができました。また、曲の合い間には、浦中さんご自身の9年間の保育士としての経験や失敗談や各地の子どもたちの様子も語られ、あっという間の2時間となりました。

オープニングは「とんとんとんかち」からでしたが、トントントン・ツンツンツンとしているうちに、今まで知らなかった隣の人ともいつの間にか打ち解けてすぐに仲良しになってしまった気分でした。また、「はじめまして」では、握手をし



てバイバイバイをする簡単な曲でしたが、握手をただけで友達になれちゃったようなうれしい気持ちになりました。最初は緊張気味だった参加者も、いつの間にか浦中さんの楽しい雰囲気巻き込まれていくような感じでした。

二人が向き合って「ピッタンコ」する曲では、特に大好きなお母さんにピッタンコしてくっついたら、どんなにか幸せな気持ちになることかと思ひながら・・・遊びました。お母さんに伝えたい曲でした。

また、子どもたちにとって身近に感じる「たこやき」の曲や「ケチャップ ケチャップ」の曲なども教えていただきました。どれもこれも明日からの保育にすぐに取り入れたいという思いでいっぱいになる曲でした。

休憩をはさんで、タオルを使った楽しい遊びを紹介していただきました。「エンヤートット、エンヤートット」と舟をこぐ掛け声と動きがマッチしていて楽しい曲でした。



パネルシアター「どのみちのみち」では、かわいい登場人物やくだものなどがいっぱいです。パネルシアターって難しそう、めんどくさそうと思っていた人も、もう一度挑戦しようという気持ちがわいてきたのではないのでしょうか。演じ方の参考にもなりました。



新聞紙の遊びでは、ひとしきり遊んだ後、一学期の間にたまったストレスを一気に投げ投げとばすかのように、思いっきりやぶいて天井に投げつけました。みんなスカッとして気持ちよさそうでした。



最後のメッセージからの、一部分です。

まちがってない
まわりと比べてしまわないこと
あなたの花もきれいだから

あなたのまわりをそっとみてごらん
ゆっくりゆっくり歩こうよ

「周りに人がいっぱいいて相談にのってくれるよ。自分の中に溜め込まないで」という浦中さんの言葉を最後に、楽しいひとときは終了しました。浦中さんから元気と温かさをいただくことができました。

午後のプログラム 分科会の報告（担当者報告書より抜粋）

○実践屋台村+手遊び村

参加者は52名でした。実践屋台村では、どろだんごやアンパンマンのペープサート・いやし棒などを作って楽しみました。また、手遊び村では新しい手遊びの紹介があり、明日からの保育に役立てようと真剣に取り組む姿が見られました。



○乳児保育

参加者は37名でした。かみつきや暴力的な行為をする子への対処や、被害を受けた子の保護者への対応などについて、ディスカッションが行われました。これらの問題については、職場の他の教職員に対して自ら問題提起を行う必要があるとの助言がありました。また、ベテランの教職員との関係における悩みについても話し合うことができ有意義な交流ができました。



○幼児保育

参加者は32名でした。1年目で先が見えない不安や、日週案の「ねらい」をたてることの難しさや、自分のクラスの子どもの成長への不安などについて話し合いました。また、職場の人間関係における戸惑いや、ベテランの先生と自分とを比較してしまい落ち込んでしまうことや、報告や連絡を怠って失敗した話などが語られました。自分だけの悩みではないことの確認ができたり、助言をいただくことができたりして、ほっとした感じが感じられました。

○特別支援保育

参加者は2名でした。「少人数であったために一人ひとりの話をじっくりと聞いていただくことができた」との感想をいただきました。

○保護者支援

参加者は7名でした。長時間保育を利用されている保護者とのコミュニケーションのとり方や、保護者への電話対応の難しさなどについて話し合いがなされました。先生方の助言とともに、保育者になって2年目の方が自分の経験を生かして、1年目の方にアドバイスをしている姿もありました。3名の学生も参加していましたが、そうした話を聞きながら保育に対して前向きな気持ちになることができたように思いました。



「子どもたちのあそびを豊かに —あそびの意味と指導のあり方—」

三重大学 河崎道夫

本稿は、子育て研究所の河崎道夫先生の講演会を踏まえて、河崎先生ご自身に新たに書き下ろしていただきました。

1. 「発達」と「あそび」の意義について

(1) 無我夢中の世界の中でかけがえのない我に出会う

あそびの意義を考える時に、あそびの中で友だちができる・社会性が育つ・手先が器用になる・創造力が発達する等の身体的・精神的機能が発達しますというのは、間違っていないのですが、それを目的として子どもは遊ぶわけではありません。あそびの中じゃなくてもいいのです。

あそびの本当の意味を、深くつかまなければなりません。子どもはあそびの中でものすごく楽しんでいて、わくわくしていて、ドキドキしています。あるいは、探検に行くと、いろんな姿を子どもが見せます。洞穴の前に立って、中に入るのか入らないのか、誰がいくのか後ずさりするのか。前進か撤退か、それはもう子どものその時の全存在をかけた選択が行われるのです。それがおもしろいわけです。

ドキドキわくわく、決断したり決断できずに逡巡したりしている。無我夢中の世界、一生懸命の世界に子どもが入っているわけですね。そういう経験、そういう感情体験、夢中になっている体験がどういう意味を持っているのでしょうか。そこにあそびの意味を持ちたいと思います。無我夢中になっている、夢の中にいるような一生懸命で必死な世界の中で、彼らは我をなくしてやるからこそ、その我が我がの捉えを出来るのですね。逆説ですね。

自分が一生懸命になって無我夢中になって、顧みずやるからこそ、その時に自分の全部が発揮されるのです。その時こうだったという自分を捉えることが出来るのですね。無我夢中体験、おもしろいという体験の中にそのかけがえのない我というものが形成されていくのです。たくさんの楽しいあそびをする中で、その子らしいかけがえのない我に出会うのです。その時にあそびが本当に大事なんだということが言えるのではないのでしょうか。

(2) 子どもたちのあそびは歴史的に豊かに蓄積されてきた

ひとつには、そこには一人ひとりが大事にされるようになってきた長い歴史があります。これについては「あそびのちから」などを参照してください。

あそびの世界の最初は自然とやりとりするあそびでした。はっぱを拾ったり、魚をとったり、小動物をいじめてみたりね。カエルなんていじめの対象としてひどいよね。でも子どもがいじめようが、

それに勝る繁殖でね。そういう自然を相手にしていたやり取りでした。

それから道具を作るようになり、道具の素材も変わってきました。そして更に集団的なゲーム、鬼ごっこなどが出てきました。そして戦後は集団あそびになっていきます。

そういう中で自然を相手にしたあそびがずっと続いていくわけですね。そして道具を作っていくあそびもずっと続いていきます。どんどん新しいあそびが積み重なって行って、今私たちの前には人類が蓄積してきた豊かな世界が広がっているのです。

(3) 二つの歴史が交差するところ

人類が作り出してきた多様でおもしろい、わくわくドキドキするような豊かなあそび世界が、私たちの前、子どもたちの前に開かれています。そういう時代になってきたのです。その時にもう一つの「一人ひとりが大事にされ、一人ひとりが人生のかけがえのない主体になる」という姿勢もやってきました。それらがまさに交差しているのです。両方とも花開くはずの時期にきているのですけれども、それがそうはなっていないというのが現実にあるのです。でも、私たちはそれを二つの歴史を結びつけて花開かせようという事が、今どうしても必要になってきていると思います。

2. 歴史的達成が花開きかけているのに

(1) 「自分らしさ」にしかけられたワナ

せっかくいい歴史が進行してきたのに、軽視されている、あるいは衰退させられているということがあります。歴史的達成が花開きかけているのに、「一人ひとりを大事にする」ことを罫にかけるような心理学のいろいろな思想が取り巻いています。タイプ分けの思想や、もっと悪いのは順序分けの思想です。一つの尺度で子どもを順序付ける、そのような自我の捉え方をせざるを得なくなっているのです。そういう自分らしさにしかけられた罫をぜひ批判的に問い直して見て頂きたいと思います。

あの血液型占いもそうなんですけれども、それよりもう少しましというかあそびで考えたらおもしろいのは星占いです。ほとんどの人が自分の星座を知っているけれど、その星座を見たことはない人が多い。だいたい星が見えないですね。星なんていつでも見えるものだったのに、それが見えない。でも星が見える空にするのは、何十年かかっても取り戻すべきだと思います。私は魚座なので、魚座を見ました。見えにくい星でした。でも見ました。

簡単に言いますと、これは一つの思想的罫ですね。あなたの星座はこうですよ。それで今日の運勢はこうですよ、とね。自分自身の生き方とか行動とかそういうものを、何座だからこう、何型タイプだからこうですってね。簡単なイエス・ノーテストなどをやって、あなたはこういうタイプですから、この商品をどうぞなんてね。そういうタイプ分けの思想の罫をかけられているのです。これは絶対に一人ひとりを大事にするというのではないですね。

かけがえのない私というのは、私がどういう両親から生まれて、どういう周りの人々と出会い、どういう周りの環境・自然世界と出会い、そこでどのような事に感動したりくじけたり痛い目にあったりしながら、かけがえのない自分自身を作っていくのか。それがみんなと響き合って、また自分自身が出来ていく。それがかけがえのない自分です。タイプに分けられたものですかされるものではない

わけですね。一人ひとりを大事にする、かけがえのない自分を大事にするという考え方がせっかくここまでできてきたのに、そういう形で思想をなくしていく畏があります。

(2) あそびは進化するけれど残る

1つの例を出します。これはムチゴマと言います。ムチでたたいて遊ぶコマです。これは人類史の中で残ってきました。コマの中で一番古いものです。そしてつい最近までいろいろな世界で生き延びてきたコマです。どれくらい古いかというと、今から4000年前、紀元前2000年頃のエジプト王朝の資料に確実に残っています。

ムチゴマはどうするかというと、こうやってくるくと巻いて、回っているのをムチで叩くのです。楽しいですよ。叩きながらずっと回し続けていくムチ使いがコツです。

ムチを使ってたたいたことはありますか。この楽しい経験をしたことがないんですね。せっかく今まで歴史が続いていたのに、ムチを使う経験をしたことがないんです。楽しむことができれば、無我夢中になってムチを使っている自分がいればそれはもう自分の一部なんですね。自分自身にあつて。ひょっとしたらそんな自分が出てくるかもしれない。心の底から体の底からムチから離れられないということになるかもしれない。皆さんはそういう経験を失っているんです。だから今みなさんもやってみたら、突然目覚めるかもしれない。新しい自分を発見できるかもしれません(笑)。話したいことはこういうことじゃないんですけどね。

ムチゴマの次が木ゴマです。ずっと新しいものです。このように精巧に作るというのは、作る道具も必要ですし技術も必要なのです。これはこれでおもしろいです。ものすごく良く回ります。これは材質によっては割れます。割れるのが面白い。それで割れゴマと言います。ぶつけて割るのです。神奈川では大山コマと言いまして、すごい迫力のあるコマでぶつけ合って遊びます。それで江戸の後期には鉄の輪コマとか、あるいは鉄芯のコマになります。

明治になったら、カンゴマができます。カンゴマは何がおもしろいかというと技です。これはまたすごい可能性を持ったコマです。技を持つことができるコマなのです。このコマは簡単なんです。だれでも出来ます。手のせをすとか、皿のせをすとか世界一周とか女またかけ、男またかけとかだんだん怪しげな技があります。

うちの奥さんが学童の指導員をやっていて、コマがすごく上手なんです。コマを手のにのせて、そこからぐっと指まで持っていき、指に乗せてまわすのです。どんなに頼んでも教えてくれません。教室の端から端までひもを引いて、コマをぴゅーと渡したりしてね。全部で200段くらいの技があつて、手のせはせいぜい10段くらいですよ。

それからベーゴマですね。ベーゴマは明治の時代です。ぶつけ合って遊ぶのですが、これはまたこれですごくおもしろいのです。新しいコマができ、ベーゴマが出てきても、他のコマがすたれないわけです。全部遊ぶわけではないかもしれないですけども、可能性は子どもの世界に全部開かれていてずっと残っているのです。

このようなあそびの歴史の蓄積ということが、他のことにも言えます。自然のあそびもずっと蓄積されているのです。道具のあそびもコマだけに限らずずっと残ってきました。集団あそびも残ってき

ました。新しいあそびができて、違うおもしろさを持っている以前のあそびは残るとというのが子どものあそびの歴史でした。

(3) 子どもにあそびの土台が揺るいできた

それが1960年代以降、音を立てて衰退していくという残念なことが起こります。1960年代の基底的変動、1970年代の加速変動です。子どものあそび世界が失われ、変質していく大きな変動です。

二つの変動を通して、豊かに蓄積されてきた子どものあそびが取り去られていくというのが次なる歴史です。花開きかけてきたのに豊かになってきたのに、子どもの目の前からかき消されて、その代わりにこれで遊びなさいという商品が氾濫してきました。これが人工ファンタジー商品です。人工ファンタジー商品はディズニーランドとかそういうあそびです。このディズニーランドが1983年に生まれました。その一方で自然体験が激減していきます。

もう一枚の資料は、H10年とH17年に調べたものです。一番左上は「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫を捕まえたこと」が「ほとんどない」が7年間で19%から35%に増えています。人類の歴史が始まって以来、自然とやり取りするあそびがものすごく豊かな形ですと残ってきたのに、1970年代後半の人工ファンタジー商品の氾濫と共に、自然体験が激減していくのです。

表の左の上から3番目「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」ですが、太陽は毎日昇って毎日沈んでいるんですよ。雨が降る日は見えないけれども、365日太陽は昇って沈んでいるんですよ。これは小学校4年生と6年生と中学2年生を合わせたデータですけれども、「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」が「ほとんどない」が43%なんです。毎日起こっている自然現象にも目がいかないのですね。そういう状況が起こっているのです。夜空をゆっくり見たこともないのですね。皆さんもないのではないのでしょうか。

三重県はまだ星空が見える所があります。それで学生に「夏の大三角形を見たことがある人？」と聞くと半分くらいが手を上げます。半分いればいいのかという感じですがけれども、これから学校の先生になろうとする人ですよ。それから「おりひめ・ひこぼしを見たことある人」と聞くと、またその半分くらいしかいません。天の川にいたっては見たことがある人がいないのです。仕方がないですよ。これは目を使って見られない。子どもに責任はないし、私たちもどうしようもないのですけれども、そういう空にしてしまったという大人の責任ですね。

(4) 子どもが人生の主体となっていくための土台をつくるために

人類始まって以降の蓄積されてきたあそび世界は、いろいろな楽しさを持っています。木に登ることとドングリを拾うことにはちょっと違う楽しさがあります。ムチゴマとカンゴマは違うおもしろさを持っています。いろいろなおもしろさを持っているものがたくさんあります。それを全部やれとは言わないけれど、どれでも楽しんでいいんだよとしていかないといけないのではないかと思います。

そして、これこそが自分の楽しいと思えることだなあと自分の中にため込んで、それが自分らしい人生を送る土台になるだろうと思うのです。今ほど子ども時代であそびが大事な時代はないのです。子どもが人生の主体として育っていくための土台を作るために、その豊かなあそびを子どもたちの前に開いておくこと。そういうことをぜひやって頂きたいと思います。

3. あそびの援助論・指導論を深めることは歴史的な仕事

(1) 異年齢の子ども集団によって伝わってきた

この豊かになってきたあそび、例えばコマ1つをとっても色々な種類のコマを楽しめるようになったことが、どうやって伝わって来たかという、大人が子どもに教えてきたわけではありません。異年齢の子どもの集団によって伝わってきたのです。大きい子どもがおもしろがって遊んでいると、その周りに小さな子どもがちょろちょろしながら「ああやればいいのか、ああやりたいなあ」と思いながら参加していきます。教えてもらいながら、あるいは失敗してもおおめに見てもらいながら、経験していく中で、小さい子どもに伝わってきたのです。そして、その子どもが大きくなったらまた小さい子どもに教えていく。そういう自然な異年齢の伝播・伝承で、これだけあそび世界が豊かになってきたのです。

ところが1960年代以降、子どもの数が少なくなってきたり、あるいは横割り感覚で子どもたちが繋がるようになってきたりして、異年齢の子ども集団が崩壊したのです。そうしたらその豊かになった子どものあそびは誰が伝えるのでしょうか。誰が子どもたちと一緒に楽しんだりするのでしょうか。大人しかいないのです。大人の中でも保育者です。学童保育の先生たちや幼稚園や保育園の先生たちです。それだけではありませんけれども、中心はそこですよ。

(2) 保育の中での援助・指導

大人が、豊かになったあそび世界、たくさん蓄積されてきたあそび世界に自らが挑戦し、自らが子どもたちに伝えていくのです。60年代の終わりから70年代の終わりに、子どものあそびが衰退してきたと言われた時に、子どものあそびを伝えなくてはいけないと、地域の子どものを集めてやりました。それは歴史的に初めてのことでした。だから、最初は少し乱暴だったかもしれません。大人が子どもにあそびを伝えるというと、何か教育で上から教えるみたいなのところがあって、それは自然な子ども集団の中での伝播・伝承と違うわけですよ。

それでは大人はどうしたらそれができるのかというと、これが保育の中での援助・指導なのです。子どもの楽しいあそびというのを、大人と子どもが作り出し、生み出していく。そういう事を可能にしていくのが援助論・指導論です。

これは歴史上初めての経験なわけですから、誰も知らないけれども、皆さんが毎日実践をする中で、こうじゃないか、ああじゃないかと援助論・指導論を作っていかななくてはいけないのです。もう見守るだけが重要だなんていってられません。新しい指導が必要なのです。あそびの技術の中には、そういう指導論を深めていくきっかけとなるような、大人と子どもの関わり方があります。失敗も含めて深めて作って行ってください。

(3) 子どもの憧れをつなぐ大人の役割、発達を見る目を豊かに

異年齢の子ども集団が伝播・伝承していくときに、小さい子がやりたいと思うのは、好奇心と共に大きな子どもが遊んでいるその姿に憧れるからです。その憧れが起爆剤、原動力になって、上手くいかないかもしれないけれどもやってみようという気持ちが起こります。

しかし、異年齢の集団がなくなってきた中で、どうやって保育園・幼稚園でその憧れを子どもたち

に作り出していくのかということです。これが1つのポイントですね。だから保育者がコマ回しをやってみせるといことは大事だと思います。いろいろなあそびに保育者自身も挑戦し、その姿を子どもたちに見せることが大事です。カンゴマの手のせを見せる。そうすると子どもたちはおおっ！と歓声をあげます。それでやってみようとなるのです。ところができる人がいないと、憧れの的になる人がいないのです。

それはだれでもいいのです。皆さん自身が挑戦するのもいいです。でも、ありとあらゆるあそびの憧れの対象になることは難しいですよ。

虫取りでもね、蝉はこう捕まえるんだと見せると、こどもは「スゲー！」となります。でも虫の嫌いな先生はできないですよ。だけど、嫌いならそれでいいのです。虫の嫌いな先生は「きゃー」と逃げる姿がまた良いのです。そうすると女の子は、ああやって「きゃー」って言いながら逃げるとかわいいんだと思うわけです。それって大事なんです。虫の嫌いな保育者も虫が嫌いな所を輝かせるという発想は大切です。すべてにおいて憧れを作っていきます。

(4) 地域の人を総動員させて憧れをつなぐ

だからお父さん、お母さん、地域の人たち、ありとあらゆる人を総動員するのです。お茶の先生が幼稚園に来て、お茶の飲み方、座り方を教えてくれたことがありましたが、子どもたちは一生懸命でした。保育園で魚をさばく魚屋さんを見ましたけれども、よかったですよ。保育園でチャンチャン焼きを作るんです。保育園に雄と雌の鮭を送ってもらってそれを魚屋さんにさばいてもらうのです。そうすると雌のお腹からぴゅーっとイクラが出てきてね。次に雄をさばくと白子が出てくる。魚のさばき方も見事だしね。さばきながらいろいろなことを教えてくれる魚屋さんはすごいな、と思うわけです。今の社会の中で、子どもが憧れるという対象が消えてきているということが大問題だと思います。

あそびの世界は残っているのです。でも遊ぶ姿がない。あるいは日常生活の中で、見て憧れを感じられるという対象がない。クラスの女の子に、鉛筆を削るのがものすごく上手な子がいましたね。そういう憧れが生活の中で山ほどあった。あるいは自然のあそびの中で山ほどあった。木登りとかね。鉛筆削りも、ずっと入れていく手つきが美しいなあってね。だからその1つひとつに憧れました。そういうプロセスがあったのです。今はなくなってしまいました。日常生活も含めて、憧れの対象というのが目の前からなくなってきたのが大きな問題なのですから、ぜひとも憧れの対象となる大人の役割を果たしていただきたいと思います。

(5) 「カエルのおじさん」も憧れをつなぐ

静岡に行ったときです。子どもが森でアワアワを見つけたというのです。「それカエルですよ」という話になって、森アオガエルがそんな所にいるのか、そんな所に卵があるなら、ぜひ地域の博物館でもなんでもいいから「森アオガエルの卵を見つけた」と連絡して確認してねと話しました。そして写真を送ってくれたら僕にも分かるからと言うと、写真が送られてきました。するとまさにアオガエルでした。このカエルで遊びたいということになって、静岡に行くことになりました。

すると行く直前に「カエルの事が分かるおじさんが来ると言っちゃいましたから」という連絡がありました。まあいいや、と新幹線に乗って行きました。するとすごくいいアイデアが浮んじったん

ですね。

森に行くと「カエルのおじさんが来た」となりました。「おじさん、カエルとお話できるの？」と聞かれたので、「できるよ」と答えました。するとみんなが食い入るように聞いてくれるのです。

僕はすごく難しい話をしました。人生の話をしました。「カエルと話ができるというのは楽しいことがあるんだよ。でも一方では失うこともあるんだよ。悲しいこともあるんだよ」と人生の大哲学を4歳児に話しました。「カエルと話をするたびにヒゲが白くなっていくんだよ」というと、「へえ」と言っていました。どれだけカエルと話をしたんだろうと考えているんでしょうね。「でも君たちはヒゲがないでしょう。おヒゲ生えていないから、カエルとお話してもいいかもしれない。だから頑張ってカエルさんのお話聞いて、分かるようになってね」というと、うんと返事していました。

それにまたのっちゃって「だけど気をつけなくちゃいけない。おヒゲが生えてくるかもしれないからね。生えてきたら、カエルとお話したら白くなるよ。生えないように祈ってね。そうだ、この中に“オレ”って言う子いない？（3人いました）オレって言うとおヒゲ生えるよ」というと、もうびっくりしていましたね。3匹のやぎのガラガラドンの本を出してきて「一番小さいやぎは“ぼくです”って言うでしょ。やっぱりヒゲないよなー」「中くらいのやぎもヒゲないなあ」3番目のやぎが出てきて何を言うかという「オレだー」ですからね。もうすごい迫力ですよ。「やっぱりオレって言うからヒゲあるわ。気をつけなきゃ」というとみんな納得していました。そんな話もして、カエルとお話ができるおじさんの話は終わりましたね。

三重県にいる白？カエルはとてもきれいな青いカエルで、田んぼのわきに卵を産みます。5月頃にカエルと卵を見つけて子どもが触っていました。

森アオガエルはもっと大きくてきめ細かくてすごいです。そしてその森アオガエルの卵を持って帰ろうということになりました。そこで「あれ？森から声が聞こえる」と言って森の方に耳を向けて「うんうん」とやって「そのカエルを大事に育てるんだぞ。それで大きくなったら森の上…」（A面終わり）

「これはカエルの卵です。とらないで下さい。」そして川に置いてきました。それで僕は帰ることにしました。カエルとお話ができるおじさん。我ながら楽しみました。

（6）指導や働きかけは多様にある

こんなふうにおもしろそうなことがあれば、新幹線に乗ってでも行きます。そういうことでも良いわけですね。いろいろな形で憧れる大人をいっぱいひっぱり出すのです。僕もまんまとひっぱり出されたわけですね。

多様さということが援助論・指導論のひとつです。変なおじさんと呼んでくる。それでそのおじさんがカエルと話が出来ると言うのでその話を聞く。魚をさばくのも「へえー」となりますけれども、カエルと話が出来ると言うのも「へえー」となります。それはもうアイデア次第ですね。

指導や働きかけが多様にあるというのは、大人は黙って背中を見せる、仕掛ける、見守る、いろいろな形であります。ぜひ子どもの憧れを作り出すことをやってみてください。

4. 「子育てと保育」という新しい場と形態であそびを豊かにする

私たちが子どもたちに豊かなあそびの世界を開いて伝えていくのは保育の場です。クラスというものがあ、保育者というものがあ、そしてクラスの保護者たちと管理する園全体の人たちがいます。園のトップの人たちもある種管理された集団です。その管理は決して悪い管理ではありません。子どもをそこで豊かに育てる場として管理するのです。子どもを豊かに育てる場として保育をするのだから、異年齢の集団など、子ども集団のやり方でやるわけじゃないんですね。だから保育としていろいろ考えていいよということです。それも含めてお話をしたいと思います。

(1) 技を極めるあそび

ここで、いろいろなあそびを紹介します。まずコマですが、コマは代表的なあそびです。お勧めはカンゴマです。カンゴマはいろんな技が出来ますので、いろいろ挑戦してやってみてください。ベーゴマでもムチゴマでもいいんですけども、ムチゴマは、ムチを作る作業が必要ですし、それなりに自分も練習をしてやらないとできません。コマは自分も練習して、子どもと一緒に技を作っていくことができます。カンゴマでは特に出来ますので、ぜひやってみて頂きたいと思います。

かもがわ出版から四方則行さんという学童保育の先生が「こまワールドであそぼう」という本を出しております。これが非常におもしろい本で、技を子どもたちと一緒に作り出していきます。しかも保育の中での取り組みですから、できればみんなが挑戦してやれるようになってほしいという思いがあるのです。だから、子どもを集めて「今日はコマをやります」ではないのです。楽しさをクラス全体に広げて、できればみんなが挑戦して欲しいという願いを持っているのです。その時にやっぱりいろいろなアイデアを考える必要があるということです。

(2) 目指せコマ名人

幼稚園の園長をやっていたことがあったのですが、その時にクラスで「目指せコマ名人」ということで段を作りました。手に持った皿に3回続けて乗せることができると付属幼稚園コマ名人になれたのです。それで子どもたちはものすごく一生懸命に練習しました。

12月の修了式の時に、コマの皿のせとか手のせとか見せてあげて、そしてみんなにコマをあげます。正月に練習して来いということです。正月明けたら挑戦を受けてやるというと、何人かは練習して挑戦してきますね。

そしてやりますけれども、だいたい退けるわけですよ。それで練習に練習を重ねて、手に持った皿に3回続けてコマを乗せる事ができると、その年の付属幼稚園のそのクラスでは名人としました。

床の上の皿乗せが出来る人。どじょうすくい出来る人。1級は椅子の上から回せる人としました。椅子の上から回せるって、なんじゃそりゃと思うのですが、子どもは子どもなりに椅子の上から回すことが難しいというのがあるのでしょう。2級は1分以上回せる。3級は3回続けて回せる人。4級は30秒以上回せる人。この4級の30秒以上回せるというのは結構いるんです。それで1人ひとりが30秒以上回すのを挑戦する時はものすごく盛り上がります。みんなで「3・2・1！やったー！」「…ちゃんできた！」とすごく盛り上がるんですね。

5級は自分でひもをまき回せる。1回でも自分で回ったら5級なんです。その前に6級があります。

6級は、人にひもを巻いてもらったら回せる。その前にまだあります。なんだと思いますか？ 7級はコマをまわしたいと思う人。「コマを回したい」といったらもう7級はクリアです。そりゃあみんな回したいと思いますよね。「わたし7級」なんて喜んでいる子がいます。できればみんなにこれは経験して欲しいという、保育の場でやるからこそそのアイデアですよね。そういうアイデアが更にありますので、ぜひともみなさん出来ればみんなで楽しめたらすごいですね。

時間差があってもいいのです。ずっとコマをやらない子が、みんながすたれた頃にコマを持ちだしきてやり始めてもいいのです。そういうことを含めながら、クラスみんな誰もが挑戦できてそのおもしろさを堪能できたらいいなと思います。それを保育の場でやっていくということをいろいろ考えていくわけです。そんなアイデアがあったら非常におもしろいですね。



コマをすてきにまわす (1)



引き込まれて見入る (1)



コマをすてきにまわす (2)



引き込まれて見入る (2) (メモをとる)

(3) 生き物とのかかわり

最近ひとなる書房から「園庭大改造」という本が出ました。これが本当に感激しました。先程言いましたように、星も見えない状況になってきています。都会だったら、なかなか自然と親しむ事もできません。でもアイデア1つで園庭を自然とやりとりする場にできるんだよ、というアイデアが満載です。できることとできないことがありますけれども、ぜひ参考にさせて頂きたいと思います。

僕もこの本が出る前に園庭をいろいろ工夫しなくてはいけないと思っていて、実のなる木を1つでも入れるといいとずっと言い続けていました。園庭に実のなる木を1つ入れるだけで、一年の取り組みが違ってくるのです。柿でもビワでもいいです。できれば柿もビワもさくらんぼもね。12カ月で実のなる木を植えて、それで誕生会の時にはその実を取って食べたら素敵だろうなと思います。

たぶんどこでも出来るのは、ブラックベリーや木イチゴですね。ブルーベリーは難しいかもしれませんが、ブラックベリーなら端っこのフェンスにはわせるように植えたら、山ほどなります。欲しいと言えばだいたいだれでもくれます。ブラックベリーや木イチゴなんてすごく出てくるんですから。

僕はクリや無花果などいろいろ植えました。スペースがない所では木イチゴなどもいいです。ものすごく強いです。グミがまたおもしろいです。グミがなるといったら、お菓子のグミがなると思っているんですものね。

ぜひこれは考えて植えてみて下さい。苗は安いんですよ。500円から1000円の間位で買えます。スペースがなければ1本でも良いです。これは植えればどういうことが起きるか。どういう実践が生まれるかという、ものすごく豊かになります。

以前ブドウを植えた実践を紹介しました。ブドウがなり始めてから、自分だけブドウに紙袋を巻いて「えんちょう」と書きました。すると子どもたちが「園長先生だけずるい」「だってぼくは働いたんだから」ってね。ぶどうは紙袋をかけないとみんな虫に食われてしまうので、その作業が絶対必要なのです。それで「おいしいね」と顔を見合わせる共感というのは、いろんな可能性が広がるわけです。

この本で、著者の小泉さんはおもしろいことを言っています。卒園で木を植えても面白くないでしょう。0歳で入園してきた時に植えたら卒園で6年経ってすごい木になっている。なるほどなあと思いました。入園の記念ですね。

公立の保育園や幼稚園はなかなか植えないですね。どうしてかなあと思ったら、転勤があるからなんです。実がなっても自分が食べられない。真の連帯はなによ。また自分が転勤した所に実のなる木があるじゃない。そういう話をして、1つでも植えましょうとすすめています。

(4) イモリ博士の話

イモリもおもしろくていろんな話があります。大学での授業ではほとんど外で遊びませんでしたけれども、イモリは大好きでした。飼っていて餌もやっていました。それでその時も「イモリ博士になって」と言われ幼稚園に呼ばれました。

その時は何を勘違いしたか、白衣を着て餌のやり方とか図を描いて持って行きました。それでイモリに付いて講演しちゃったんですね。その時も子どもたちはすごく集中して聞いていました。それで一番子どもたちが興味を示したのは、イモリを手の上に載せて、そのイモリの口の前に赤虫をピンセットで持っていくと、パクッと食べるという話でした。

虫とか魚とか何でもそうですけれども、共感する部分というのは、食べることですね。何かを食べたというところに、子どもはすごく喜びます。もう1つは、ウンチしたとか、おしっこしたとかいうのも、すごく共感します。また、食べてウンチしておもしろいしぐさをするというのは、人間の子どももそうですね。共感を得る一番の所なんです。だから単にかわいいという話ではないのです。

(5) 大小様々な集団でする対立を楽しむあそび

対立を楽しむあそびでは、「ルールを守るからたのしい」という発想を捨てましょう。それはあそびを変えると楽しいという中でルールが生き物のように動いていくからです。できては破られ、できては破られていけばいいわけです。「～あそびはこういうルールで遊ぶのよ」とやっても何もおもしろくありません。そしてルールを守らないと「ちゃんとして」などと言われてしまう。「ちゃんとして」と言われておもしろいあそびなんてないですよ。ちゃんとしないからあそびなんです。

互いに楽しいと思えるルールあそびは「互いに対立すること」を「ともに楽しむ」という発想です。

対立の「対」はいろいろあります。オオカミでもいいし、ライオンでもいいし、何でもいいのです。

*命がけおにごっこ

おにごっこには楽しい話がたくさんあります。「命がけおにごっこ」という怖いあそびがありました。これはクラスみんなでやりたいと思わないし、ぜひ全国の保育園で取り組んで欲しいとも思いません。思わないのだけれども、だからこそかけがえのない世界があるのです。

この鬼ごっこは、鼻くそをつける鬼ごっこなんです。イヤですね。付けられたらいやだから必死で逃げますよね。本当に怖いです。でもこの鬼ごっこの真の怖さがどこにあるかということ、ジャンケンポンで始まって「やるぞ」となってから、一日中やるということです。すべての時間やるわけです。集まりの時間だろうが給食の時間だろうが、お昼寝の時間だろうが続くのです。この鬼ごっこをやるときは、給食なんかおちおち食べていられないですね。お昼寝の時間は絶対寝ないですね。もうすごいです。あまりの恐ろしさに僕も入れなくて、すごいなあとおもうわけです。女の子は、それをやっている男の子をすごいなあと思うわけですね。この土台の楽しみ方を小さい頃からやっておくことです。

*オオカミオトコオニ

僕は保育園に行くと、オオカミ男と言われていました。満月の夜に変身すると言っていました。それで満月の次の日にたまたま保育園に行くと、真剣に子どもたちが聞いてきたりします。

いろんなおもしろい話があります。子どもがいきなり丸いゴミ箱を持ってきて「まんげつー」と言うのです。しょうがないなあと思って、「あ、満月だ！がががっ」とやったら子どもがダ〜っと逃げました。僕は全部捕まえます。助けに来た子も捕まえます。最初は4・5人捕まえて動けないようにして「まいった〜」と言わせます。

それを何回かやっていると、今度は外でやります。もうその時は満月はなしです。「オオカミオトコオニ」という鬼ごっこが始まります。これは本当におもしろいです。オオカミ男から逃げるんです。これはどろけいですよ。でもどろけいじゃないんです。最初は満月が出てオオカミ男になって、そこから逃げるはずだったのに、それがもう鬼ごっこになっているのです。

あそぶ場所もいろいろです。最初は室内だったけど、おもしろかったので園庭でやろうとなり、おもしろかった。そして遠足に行ってもやろう、散歩に行ったところでもやろうとなりました。いろんな所でやるわけです。おもしろいからどこでもやるのです。

ある日、冬の日、田んぼのあぜを使ってやりました。田んぼでやったことがないからやってみようか、ということになったのですが、全く予想もしないことが起こりました。それは、ふだん要領の良くない小さい子に狙われた時です。足が遅いし怖くもなんともないんですよ。だから僕は「逃げろ〜」なんて言いながらちょっと逃げて、するとその子とどこか来るわけですよ。あぜ道ですから歩みにくいんですよ。こっちはそれなりに走れるから、近くまで寄せてからまたびゅーと逃げます。これは捕まらないなと思っていたら違ったんです。何にも考えずに、ただひたすらしつこく追いかけてくる。本当にしつこく追いかけてくるのです。これがずっと続くわけですよ。こっちは息が切れてきてね。これは怖いんです。

そんなふうに場面が変わる、状況が変わると、それまで鬼ごっこで活躍できなかった子が光輝くわけです。だからあそびというのはああやってみよう、こうやってみようといろいろやってみて、その中で思いもよらない輝きを見せることができるわけです。鬼ごっこで走るのが苦手な子だって、田んぼのあぜ道では輝くんです。そこに場面や状況が変わると、あそびが変化することのおもしろさがあります。

(6) 探検あそびは五感と想像を使って

たとえば、部屋を真っ暗闇にする。このような所では普段と違う人間関係ができます。本当におもしろいです。人工の光をなくす「くらやみ」を1回経験させてやります。そこで子どもたちはどういう姿を示すのか。おもしろいです。自分たち自身も楽しめます。

幼稚園探検で、暗闇に入る子をこっち、入らない子をこっちと分けます。入るって言った子はうるさいくらいに興奮していて、「行かない」と言った子の方に行って盛り上がっています。そして「行かない」と言った子の中から友だちを見つけて「お前行かないのか?」「体調が悪い」なんてね。それ自体がおもしろいのです。だからいろいろな場面を作ってあげるのです。その中の1つに探検あそびというのもあります。

探検隊とか、夏に使ったプール用のイルカを隠して、「イルカを探せ大作戦」とかね。子どもって、プールのイルカがいなくなったって心配するんですよね。探検あそびって本当にいろいろあります。

5. やがて花開くかけがえのないその子の「自分」のために

歴史的に蓄積されてきた多様なあそびを、憧れを原動力にして、皆さんの保育園・幼稚園で様々なあそびにチャレンジをして子どもと一緒に楽しんで頂く。そしてそのあそびを子どもと共に作り出していく中で、1人ひとりの子どもが輝く瞬間をつくります。このあそびでは、いつも威張っていたのが光をにぶらせるというのも形を変えた光ですね。

子どもたちがその子らしさをいろんな形で光輝かせるのだから、そのあそびの場面をぜひとも皆さん楽しみながら作って頂きたいと思います。以上です。

あそびのちから～河崎道夫氏の講演を聴いて

桜花学園大学保育学部 嶋守 さやか

冒頭から私ごとで恐縮だが、筆者が保育学部に異動になり今年で3年が経過した。その前は、本校の人文学部人間関係学科社会福祉コースで教鞭をとっていた。改めて「教鞭」と表記してみて驚く。教師は、鞭で教えるんだ…では、何を？

なぜ、2011年度保育子育て研究所主催の講演録を著すにあたり、教「鞭」なのかと言え。それは「あそびのちからードキドキわくわくの世界を子どもとどう創っていくか」という題目のもと、「鞭」を手にとり教壇を叩いて教えはじめた講師が河崎道夫氏だったからだ。切り口が丸い山桜の生木をご自身で削って造られたというコマを、河崎氏は細い二本の革ヒモを使った自作の鞭で叩く。ぴしゃりぴしゃりと鞭で叩いたコマがくるくるとまわるさまを見つめて口元をゆるめた河崎氏は、「…鞭を使ったことがありますか？」と怪しく聴衆にたずねた。満員となった聴講者席で筆者の後ろに座った初老の女性は、そんな河崎氏にうっとりとして答えるようにつぶやいた。「はじめて見た、鞭ゴマなんて…♡」

あんなふう遊びたい。遊びをあそぶ姿が何しろステキなのだから、どうしたってあこがれる。河崎氏の問いかけに初老の女性がふいに口にした「はじめて♡」という言葉には、そうした「あこがれ」の甘い響きが確かに満ち満ちていた。「あこがれ」それが、河崎氏がこの講演で何度もくりかえして聴衆に伝えた「あそびのちから」だ。河崎氏によれば、「あそび」の黄金時代は1950年代だった。子どもたちは自然を相手にあそびをつくり、あそびの世界に生きた。すべての子どもが自分の得意なあそびに我を忘れ、好きなあそびを夢中で極めては達成の喜びにうちふるえた。そして、子どもたちはそれぞれの「自分らしさ」を確立していった。そこには、異年齢の子どもたちがあそびを教え合う姿があった。

しかし、今ではそうした異年齢集団は崩壊し、ついぞ見かけなくなった。そのかわりに、あそびには指導が必要だという議論が生じてきた。筆者が生まれた1970年代に、子どものあそびをどう伝えていくべきかという議論が社会問題となった萌芽があるという。あそびの援助論・指導論を深めることが、歴史的な仕事になったのだ。その歴史的な仕事を担うのが、保育者という現代のおとなの使命なのだ。

河崎氏の講演には、ご自身が園長先生としてあそびを指導しながらというよりも、指導すらあそびに変えながら、いっしょに遊んできたたくさん子どもたちが現れた。ある年の暮れに河崎氏に缶ゴマを教えられていっしょに卒園の時期が来るまで本気で戦ったが打ち負かすことができなかった年長の子どもたちの姿をみて、その次の年度の梅雨や真夏をまたぎ、しつこく執念深く園長先生を待ち伏せしては勝負を挑みつづけた年中さんが、ついに園長先生の河崎氏を缶ゴマで打ち負かした。喜びに狂喜乱舞したその子どもたちに、河崎氏はベエゴマを教えた。その後、子どもたちから何度も送られてくるベエゴマでの果し合いの「ちょうせん」を河崎氏は受け続けていく。しかし、絶対に子どもたちには負けない河崎園長先生のしたり顔。勝負に負けて本気でくやしがり、無我夢中であそび続ける

子どもたちの姿が講演のなかにくっきりと色鮮やかに見えた。何より素晴らしいのは、河崎氏が聴衆に伝えた「あそびのちから」だけではない。河崎氏自身が子どもと「あそぶちから」のパワーがケタ違いなのだ。講演が終わる頃にはすでに、河崎園長先生に筆者はあこがれ、ご講演のすべての言葉に陶酔しきって満足した甘いため息がとまらなくなってしまっていた。

講演を聴講させていただけた河崎氏への感謝の気持ちがおさまらず、その後も「あそびのちから」とは何だろう？ どうしたら学生に伝えられるのだろうか？ と考えていた先日のクリスマスイブ。保育士や幼稚園・小学校教諭として、来春卒業する「地域福祉」の受講生3人を連れ、ある障がい者自立生活センターの自立生活プログラムに参加した。その時のできごとを、最後にここに書いておきたい。わが校の愛してやまない学生たちの、ある「あそびのちから」の記録としてだ。

その日の自立生活プログラムは、「恋愛講座」の最終日に開かれたカラオケ大会だった。集まっていたのはいわゆる重度の脳性マヒ者で、トーキングエイドという機械をつかって会話をする電動車いすユーザーの若者たちだった。講座を主催していた会長が、学生たちに声をかけた。「みんなで楽しめるゲームをしてください」と。自由に身体も動かせず、発声すらままならない初対面の相手に、学生たちは瞬時に、嬉々として「なりきりゲーム」をすると高らかに宣言した。出題者は頭のなかで何かの動物になりきる。その出題者に5つまで質問をして、そのなりきった動物をあてるというのが、そのゲームのルールだった。色、たべるもの、足の数がたずねられ、答えがあてられるたびに、その講座に集まっていた障がい者たちは大きな声をあげて喜び、ゲームはとても盛り上がった。その姿を見た未来のあそびの達人である学生たちの笑顔は輝いていた。

その場で突然言いつけられた「みんなが楽しめるゲームをしてください」という難関を瞬時にクリアできた学生たちの「あそびのちから」にも驚かされたが、それ以上に驚いたのはそこで展開された遊びが持つ「あそびのちから」だったし、それに気づけたのも河崎氏の講演を聴講させていただけたからだと思う。学生たちに「障害理解」と教えていても、あそびで遊ぶのに必要な身体能力や言語能力の有無で、その場に集まった障がいのある若者たちが遊べるはずがないと、ほぼ反射的に筆者は決めつけてしまったせいで、あそびがまったく考えられないという思考停止に陥った。と同時に、「あそびのちから」を伝えてくださった河崎園長先生の顔が思い浮かんだ。

まずは相手といっしょに遊ぼうと思うことが、あそびのはじまり。遊びたいと思うことから、あそびがはじまる。あそびのちからはみな平等、つまりバリアフリー。障がいがあってもなくても、老いも若きもいっしょにあそべるのだから。

「あそびのちから」をもっと知り、いっしょに学び、あそぶ時間を、この保育学部でこれからもどんどん学生たちとつみかさねていこう。またいつか、河崎園長先生のご講演を聴講させていただける日を心待ちにしながら。

(執筆 2011年12月28日)

「遊びのちから」一ドキドキわくわくの世界を

子どもとどう創っていくか—を聴いて

名古屋短期大学 小川絢子

現代は、子どもの遊びが失われてきた時代であるといわれている。お受験の過熱化による遊び時間の減少や経済効率優先社会における自然の破壊、地域社会の崩壊により、子どもたちの「時間」「空間」「仲間」が削られ、これまで蓄積されてきた技を磨くような遊びは消えて行きつつある。子どもが楽しむ場所は、一つは部屋の中のテレビ画面、一つは遠く離れたレジャーランドであり、二つの極の間に横たわる現実世界は楽しいところではなくつらいだけの世界となっている（河崎, 1997）。このような現状において、子どもにとっての遊びは、つらい現実から一時離れられる逃避の場であり、日常生活とは疎遠の特別なものになっているといえるのかもしれない。

河崎氏の講演では、そういった子どもの遊びに対する現代の問題を指摘した上で、こんな時代に、いかに子どもたちが夢中になって遊べる世界を、我々大人が創っていくのかという重要な課題についてお話しいただいた。お話しでは、子どもがいきいきと遊ぶ姿が目浮かぶような保育実践や、びゅんびゅんゴマなど玩具を例に挙げながら、お話しや実演をしていただき、聞き手である大人の私たちまでドキドキわくわくするような魅力いっぱい講演であった。

特に、河崎氏の講演における、「子どもが我を忘れ、無我夢中になって遊び、様々な感情を体験する中で、自分の中身を豊かにし、自分らしさを発見していく」というお話しから、私は、子どもの自我発達に関する新しい観点を教えていただいたように思う。「夢中になって遊ぶ」ということについて、河崎氏は、ご自身の子ども時代のビー玉遊びを例に挙げてお話しされた。河崎氏は子ども時代に、ビー玉の「天狗二段打ち」の名手として、仲間から恐れられていたそうである。「天狗二段打ち」は、ビー玉を転がして相手のビー玉にあてるのではなく、上に高くはじいて直接相手のビー玉にあてる技である。あたる確率は悪いが、あたるとその技の美しさに打ち震えるほどの喜びを感じ、損得考えずにその技を磨くことで、河崎氏は「これこそが自分の技である」と思うことができたという。このように、一見逆説的ではあるが、自我の発達とは、遊びに夢中になり、これと信じた技を磨いていきながら、後からその時間を振り返る中で「自分らしさ」を発見することである。また、仲間と共に遊ぶ中で、「天狗二段打ち」のような技で仲間から恐れられたり、憧れられたり、認められたりすることで、仲間一人ひとりの「○○ちゃんらしさ」を知り、仲間に対する理解をより深いものにしていくことができる。このように、子どもが遊びの中で育んでいく自我や仲間関係の発達を理解するためには、年齢にそった子どもの遊び方の変化や様々な遊びが持つ意義を知るだけでは不十分であり、遊びの場における一瞬一瞬の、子どもの心の動きを捉えていく必要があることを感じた。

それでは、子どもが遊びを通して何かに夢中になり、衝突や協力を通して様々な感情を経験したり、仲間同士で自分の技を見せ合い、憧れたり憧れられたりしていく中で、「これこそが自分である」「友だちの○○ちゃんらしさである」という実感を積み重ねていけるような機会は、現代の保育において保障されているのだろうか。核家族化が進み、子どもの数が減った現代社会では、子どもに遊びの技を伝え、遊びの先輩として他の子どもから憧れられたりするような、地域の異年齢集団が消失している。子どもは保育園や幼稚園、小学校へ

通り、そこで出会う人々と遊びを創っていくことになる。この大人が作り出した保育園や幼稚園、小学校といった集団生活の場の中で、遊びをどう創っていくかということは、今後の保育や教育における新しい課題であるといえる。遊びを伝承し、子どもが我を忘れて遊ぶことができるための原動力として河崎氏は、「憧れ」を挙げているが、その憧れの存在が現代社会においてはその内容も数も非常に限定されたものになっているといえる。というのは、子どもにとっての憧れの存在が、身近な他者ではなくテレビの中のスポーツ選手や芸能人になり、お受験や早期教育といった、生活を離れた抽象度の高い知識の上で幼児期から評価されることは、憧れる他者の存在を、限定的な人間像として呈示することになっているからである。また、子どもが遊びの喜びに打ち震えるような、援助、指導が必要であるものの、保育者があらゆることで憧れの存在になることは不可能であるといえる。これらの問題について、河崎氏は、保育者だけではなく、地域の大人の役割の重要性を指摘した。保護者はもちろん、魚屋さんなど、町や地域の様々な人と出会い、子どもがその関わりの中で「面白かった」「楽しかった」という経験をすることが、子どもにとって自分を創りあげることの土台となるという。このように考えると、保育の場において、子どもにいかにか豊かな人との出会いを保障していくかということは、非常に重要な課題であるといえる。

河崎氏の主張を聴き、私は子どもの発達における保育環境の重要性を改めて実感するとともに、子どもの自我が発達するということに対する自分の一方向的な考え方を変えることができたように思う。これまで、「〇歳児になったら、子どもは〇〇という自分の捉え方をし、それに伴い子どもの行動や思いも変化していく」というように、年齢を基準として、子どもの内面的な変化が自然に起こると考えることを基本としてきた。例えば、5歳児は、神田（2004）によって「思いをめぐらせる5歳児」といわれている。判断基準に対する理解が不十分なために、自分に対して「できている-できていない」といった両極的な評価を行い、気持ちの揺れを見せる4歳児とは異なり、5歳児は、複数の判断を組み合わせ、「〇〇ができない。でも今自分は始めたばかりだから、すぐにはできなくて当たり前」といった柔軟さを持つようになる。また、創造的な遊び方を子どもたちだけでも創り出していくことができるようになる。今回の講演を聴いて、このような5歳児の姿は、自然発生的に起こってくるわけではなく、遊びに夢中になり、様々な技に失敗しながらも挑戦し続ける中で、だんだんできるようになっている自分という感覚を得ることができるからこそその姿であるということを実感することができた。また、仲間と共に遊びこむことができる遊びがあるからこそ、自分ばかりではなく友だちの「らしさ」を知り、より遊びを楽しめるものにするための工夫をし、遊びにおいて創造性を発揮することができる。また、大人が様々な憧れのモデルを示すことで、「〇〇な人もいれば、□□な人もいる」「〇〇さんは、これはできないけど、こっちはすごく上手」といった柔軟な理解が可能になるのであろう。

保育の場において、子どもが夢中になって遊ぶことができる人的、物的環境を保障することでこそ、その年齢特有の子どもの自分の捉え方や、仲間との関係が現れてくるということ、保育者となる学生に今後伝えていきたいと思う。御講演をいただいた河崎氏に感謝を申し上げる。

引用文献

- 河崎道夫．（1997）発達を見る目を豊かに一憧れとささえをはぐむ保育，ひとなる書房．
神田英雄．（2004）3歳から6歳—保育・子育てと発達研究を結ぶ，ちいさななま社．

「養護」という言葉をめぐって

桜花学園大学 小嶋 玲子

1. 筆者の学校臨床経験から

筆者は、学校・幼稚園・保育所において困り感をもって過ごしている子どもとその保護者・教員（保育者）の支援を研究課題としています。教員・保育者養成という仕事をしながら、教育・保育の場で困り感をもった子どもの支援に携わっていると、子どもの「命を守ること（生命の保持）」と「情緒の安定」がその仕事の大きな部分を占めているという実感があります。

「消えてしまいたい」「死んでしまいたい」と訴える子どもたち、摂食障害や自傷行為によって自分の命を護ることを軽んじる結果になっている子どもたちはもちろんのこと、偏った食生活や変則的な生活リズムなどによって健康を害している子どもたちは、生命の保持や健康の保持ができていません。育ちの中で細やかな情緒を表す言葉を学習されずにきて、快・不快でしか自分の心の動きを表現できない子どもたち、他者（親・教師・友人）の評価に過敏になって、他者の評価で自分の価値を決めて精神的に不安定になっている子どもたち、自尊感情が低く、満たされない思いを抱えて攻撃的になっている子どもたち、反対に自分の気持ちを抑えすぎて学校に来れなくなってしまっている子どもたちなど、情緒の安定がなければ、学校での教科学習や集団活動での困難さが目立ってきます。筆者は、学校内でこういう子どもたちの支援にかかわってきて、学校教育の中での「生命の保持」と「情緒の安定」のための教育的働きかけの必要性を感じています。そして、学校教員も教科外の指導の場ではもちろんのこと、教科指導の中でも、子どもたちの「生命の保持」と「情緒の安定」を意識した教育的な働きかけを行っている姿を目にしてきました。

筆者は、上記のような学校臨床経験から、「生命の保持」と「情緒の安定」が、保育所保育指針において「養護」の目標とされ、その「養護」が「教育」と切り離されて議論されていること、加えて、幼稚園教育要領にはこの「養護」の記載がないことにある種の違和感をもっています。ある概念を表す言葉は象徴性が高いので、その言葉からイメージする内容については、使用される場や使用する人によって一律ではありません。今「養護」という言葉を目にしている読者もそれぞれにイメージしている内容は異なるであろうと推測します。そのことは、現在議論されている保育所と幼稚園の一体化運営をめぐっての議論の中での「養護」の言葉の使われ方（後述）にも表れているように感じます。筆者は未だ『「養護」とは何か』といった自身の論を展開するまでには至っていませんが、本論では、さまざまな場での「養護」の言葉の使用を検討することを通して、読者のみなさんに「養護」という言葉について考えていただく機会にしたいと思います。

2. 保育現場における「養護」と「教育」

この章では、鯨岡峻（2010）¹⁾の主張を基に、保育現場での「養護」と「教育」の関係について述べます。保育関係者にとっては周知のことですが、保育所保育指針²⁾における「養護」と「教育」の言葉について確認した後、鯨岡（2010）の論を紹介します。加えて、子ども・子育て新システム検討会議で検討中の「こども指針（仮称）」³⁾における「養護」と「教育」について触れます。

2-1. 保育所保育指針における「養護」と「教育」

「保育所保育指針第1章総則の2保育所の役割（2）」には次のように述べられています。

保育所保育指針 第1章総則 2保育所の役割

（2）「保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている」（注：下線筆者）

保育所保育指針の解説書では、この部分の解説として次のように述べられています。「養護と教育が一体的に展開されるという意味は、保育士等が子どもを一個の主体として尊重し、その命を守り、情緒の安定を図りつつ、乳幼児期に必要な経験が積み重ねられていくように援助することです。」

さらに、「第1章総則3保育の原理」の項の解説では、「保育には、子どもの現在をありのままに受け止め、その心の安定を図りながらきめ細かく対応していく養護的側面と、保育士等としての願いや保育の意図を伝えながら子どもの成長・発達を促し、導いていく教育的側面とがあり、この両義性を一体的に展開しながら子どもと共に生きるのが保育の場であるといえます」（注：下線筆者）と書かれています。

「保育所保育指針第3章保育の内容」では、「養護」と「教育」のねらいと内容について述べられているのでそれも掲載します。

保育所保育指針 第3章 保育の内容

保育の内容は、「ねらい」及び「内容」で構成される。- 後略 -。

保育士等が、「ねらい」及び「内容」を具体的に把握するための視点として、「養護に関わるねらい及び内容」と「教育に関わるねらい及び内容」との両面から示しているが、実際の保育においては、養護と教育が一体となって展開されることに留意することが必要である。

ここにいう「養護」とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わりである。また、「教育」とは、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助であり、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」及び「表現」の5領域から構成される。この5領域並びに「生命の保持」及び「情緒の安定」に関わる保育の内容は、子どもの生活や遊びを通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開されるものである。（注：下線筆者）

2-2. 鯨岡峻（2010）『保育・主体として育てる営み』の中での主張

鯨岡（2010）¹⁾は、幼稚園教育要領にこの「養護」の記述がないことの疑義も含めて、「養護と教育という概念を再考」しています（pp64-74）。鯨岡は、保育という営みを「子どもの『ある』を保育者が受け止め・認め・支えることと、子どもの『なる』に向けて保育者が導き・促し・教えることの両義性」として語っています（p65）。そして、前者が養護的側面、後者が教育的側面として述べられている、前述した指針の「第1章総則3保育の原理」の解説を根拠に、次の主張を行っています。「養護という概念は、生命の保持、情緒の安定という保育者の守備範囲を示す領域概念としてではなく、子どもが両義的な主体であることに対応して、保育者の子どもへの働きに含まれる子どもを主体として受け止める、存在を認めるという（これが情緒の安定に繋がるわけですが）働き全体を指す機能概念として理解すべきだ」（p69）。したがって、「養護の働きは小学校の子どもにも必要」（p69）であると述べています。

加えて、鯨岡は、保育所保育指針と幼稚園教育要領で「教育」とされている5領域のねらいが可能になるには、「保育者が子どもの思いを受け止めるという「養護」の姿勢をしっかりとって子どもの『なる』に向けて働きかける（『教育』の側面がある）から」（p71）であり、「養護の領域に括られている『情緒の安定』や『生命の保持』の内容にしても、保育者が『ここは危ないからやめようね』と伝えたり、『痛いからやめてね』と伝えたりする働きは、十分教育的働きである」とし、したがって「養護と教育を一体的に扱うのが保育」と述べています（p71）。

つまり、鯨岡（2010）の主張では、「子どもの『ある』を保育者が受け止め・認め・支えること」が「養護」であり、「子どもの『なる』に向けて保育者が導き・促し・教えること」が「教育」と捉え、「生命の保持」と「情緒の安定」においても、5領域においても、「養護」と「教育」が一体的となって展開されるということです。

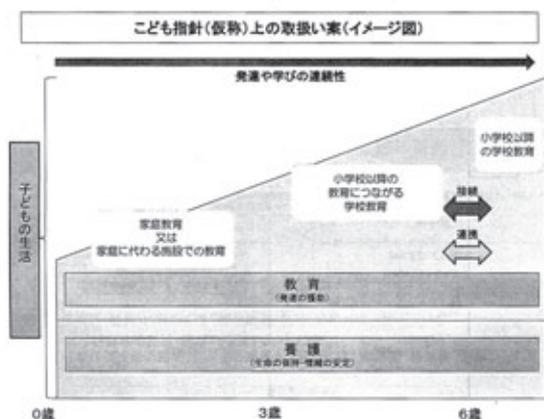
さらに鯨岡（2010）は、「保育の目標から保育内容『人間関係』を捉え直す」（p254）として、「人間関係を育てる」のではなく、「人間関係において育てられ育つ」のであり、教育の「5領域の1領域として保育内容『人間関係』を考えることはできない」としています（pp257-259）。また、「家庭が混乱している下で、情緒不安定になっているAくんがクラスでしばしば友達に対して乱暴な振る舞いに及ぶ」（p32）例を出して「『情緒の安定』という養護の領域と『人間関係』という教育の領域を分けて論じることができるのでしょうか」（p31）とも述べています。

現在の保育所保育指針では、「生命の保持」と「情緒の安定」が「養護」の目標になっていますが、鯨岡（2010）の論では、「養護」とは働きかけの姿勢のことであり、「生命の保持」と「情緒の安定」は、教育的働きかけと養護的働きかけの両立をもって達成されるものであるという主張です。また、教育の5領域に示されている内容（特に人間関係や健康）においても教育的働きかけと養護的働きかけの両方からのアプローチが必要であると読み取れます。筆者の学校臨床経験からも学校現場で子どもたちに必要とされる「生命の保持」と「情緒の安定」においては、鯨岡の言うように、子どもの存在をそのまま認め支持する養護的側面と子どもに教え導く教育的側面があることを感じています。

2-3. こども指針（仮称）上の取扱い案から考える「教育」と「養護」

子ども・子育て新システム検討会議作業グループ「幼・保一体化ワーキングチーム」第9回（平成23年5月25日）の資料2-2「参考資料（案）」〔幼保一体化について（案）関係〕（ここでは資料Aとする）³⁾には、こども指針（仮称）上の取扱い案（イメージ図）というものが掲載されています（p10）。次にそれを示しました。

この図においては、0歳から6歳を超えてすべての年齢のところに「養護（生命の保持・情緒の安定）」



と「教育（発達の援助）」という文言があり、その上に3歳までは「家庭教育又は家庭に代わる施設での教育」、3歳から6歳までは「小学校以降の教育につながる学校教育」、6歳からは「小学校以降の学校教育」と記載されています。現行の「幼稚園教育要領」には「養護」の文言はありませんが、図のこども指針では0歳から6歳を越えた小学校以降の学校教育の年齢になってもすべての子どもに「養護」が必要とされている

と取れる書き方がされています。ここで書かれている「子どもの生活」は保育所や幼稚園・学校だけを示すものではなく、家庭や地域社会での生活も含めてという前提であったとしても、養護（生命の保持・情緒の安定）と教育（発達の援助）は、どの年齢にも必要であるという認識が読み取れます。ただし、理由は解りませんが、平成23年7月の「子ども・子育て新システムに関する中間とりまとめの概要」⁴⁾（資料Bとする）にはこの図は掲載されていません。6歳以降の「養護」の記述をめぐっての議論があったからではないかと、筆者は推測しています。

総合施設（仮称）の創設については、資料A・B共に説明として次のように書かれています。

○学校教育・保育及び家庭における養育支援を一体的に提供する総合施設（仮称）を創設する
 ＊ここで言う「学校教育」とは学校教育法に位置づけられている小学校就学前の子どもを対象とする教育（幼児期の学校教育）を言い、「保育」とは児童福祉法に位置づけられる乳幼児を対象とした保育を言う。以下同じ。

ア 満3歳以上児の受入れを義務付け、標準的な教育時間の学校教育をすべての子どもに保障。また、学校教育の保障に加え、保護者の就労時間等に応じて保育を必要とする子どもには保育を保障。

イ 満3歳未満児については、保護者の就労時間等に応じて保育を必要とする子どもには保育を保障。

—後略

この説明から総合施設では、3歳以上の子どもすべてに幼稚園教育要領に書かれている教育（学校教育）を保障し、さらに、保育が必要な子どもには、保育所保育指針で示されている保育（養護と教育）の保障をすると理解できます。

しかし、現行の保育所保育指針と幼稚園教育要領の教育の目標や内容については、ほとんど同じ文

言が使用されています。また、学校教育法⁵⁾第3章幼稚園のところでは、第22条に「幼稚園は義務教育及び、その後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。」とあり、第27条の7には、「(幼稚園：筆者注)教諭は、幼児の保育をつかさどる。」とあります(注：下線筆者)。このように学校教育法の中に保育の言葉が使用されています。以上のことと、資料A・Bの中にある*印の文言を合わせて考えると、幼稚園で「幼児を保育する」という言葉と保育所で「幼児を保育する」という言葉の意味することは異なってくることになります。つまり、学校教育法で使用されている「保育」は幼児期の学校教育であり、児童福祉法で使用されている「保育」とは異なるため、それが議論を混乱させているように感じます。前述の鯨岡(2010)は、「このままだと(筆者注：養護と教育の概念を再考しないと)、5領域は幼稚園と重なる部分、養護は保育園側にのみ対応する部分というように、従来どおりの認識を追認するだけで、相変わらず、『保育園には養護があるけれども幼稚園にはない、だから保育園は保育、幼稚園は幼児教育なのだ』という議論が温存されかねません」(p71)と述べています。このように、保育園と幼稚園の一体化運営にあたっては、さまざまな場で使用されている養護、保育、教育、学校教育といった言葉の意味するところを私たちは整理して理解する必要があるようです。

3. 広辞苑における「養護」

上記では、保育の分野で議論されている「教育」と「養護」の言葉の使用について述べてきました。ここで、広辞苑においては、「養護」がどのように説明されているか見てみましょう。広辞苑〔第六版〕(2008)⁶⁾では次のように説明されています。

- ①危険がないように保護し育てること。
- ②学校教育で、児童・生徒の健康の保持・増進に努めること。
- ③心身障害または社会的理由で特に手当を必要とする者を保護し、助けること。
- 一・がっこう【養護学校】心身障害者に適切な教育を施すために設けられた学校。1979年、都道府県に設置義務が課せられた。(筆者注：2007年特別支援学校に名称変更。後述する。)
- 一・きょうゆ【養護教諭】小学校・中学校・高等学校において、児童・生徒の養護をつかさどる教員。教育職員免許法による免許状を必要とする。
- 一・しせつ【養護施設】児童養護施設の旧称。
- 一・ろうじんホーム【養護老人一】老人福祉施設の一つ。心身および環境上・経済上の理由から居宅での生活は困難であるが常時介護の必要としない、原則として六五歳以上の者が入所できる。→特別養護老人ホーム。

ただし、広辞苑〔第四版〕(1991)⁷⁾〔第五版〕(1998)⁸⁾では、上記②③は「②〔教〕児童の体質や心身の発達状態に応じて、適当な保護と鍛錬とを加え、その成長・発展を助けること。」とされ、③の項はありません。また、養護施設は「児童福祉法に基づく児童福祉施設の一つ。保護者のない児童、虐待されている児童などを入所させて養護するもの。」であり、〔第五版〕で「1998年児童養護

施設に名称変更。」が加えられています。〔第四版〕には養護老人ホームの項はありません。

〔第四版〕〔第五版〕〔第六版〕での①の説明は、「危険がないように保護し、育てること」です。〔第六版〕において、②学校教育では、「健康の保持・増進」に限定し、福祉分野では、③「手当を必要とするものを保護し、助けること」と分けて説明しています。幼稚園は「学校教育」ですから、②が充てはまり、保育所とは異なる意味で「養護」という言葉が使用されることとなります。しかも、新システムでは保育所在籍の3歳以上児には幼稚園と同じ「学校教育」を行うわけですから、学校教育として必要な「養護」と保育所で必要な「養護」があり、話はますますややこしくなります。言葉遊びのようになってしまい、論じている筆者自身も混乱してきてしまいますが、2. 保育現場における「養護」と「教育」でも述べたように、幼稚園と保育所の一体化運営に当たっては、教育分野と福祉分野での「養護」の使用についてお互いによく理解し合う必要があると感じています。

4. 特別支援学校学習指導要領

4-1. 自立活動

筆者は、特別支援教育を専門にしているわけではありませんが、保育所・幼稚園・学校で子どもたちを支援する場合は、当然、特別に支援の必要な子どもたちもその範疇に入ってきます。現在特別支援学校と呼ばれる学校は、2007年度以前は、盲学校、聾学校及び養護学校とされており、ここでも養護の名称が使用されていました。

2009年3月に特別支援学校幼稚部教育要領・小学部・中学部学習指導要領及び特別支援学校高等部学習指導要領が公示され、幼稚部については2009年度から、小学部については2011年度から、中学部においては2012年度から全面実施することとし、高等部については2013年度から学年進行により段階的に実施されることとなっています⁹⁾。特別支援学校の学習指導要領には、通常学級の学習指導要領にはない自立活動の章があります。この自立活動は、1996年の学習指導要領の改訂以前には養護・訓練（1971年の改訂から）という名称であって、ここにも養護という言葉が入っていました。

通常の小中学校に設置されている特別支援学級や通級による指導においては、「特に必要がある場合には特別の教育課程によることができる（学校教育法施行規則（抄）138条・140条）」¹⁰⁾ので、この自立活動の時間を設けている特別支援学級や通級もあります。

なお、後の養護教諭のところで触れる大谷（2001）¹¹⁾は、2001年当時の養護学校について、「一般の学校と比べて教育課程では『自立活動』（旧来の『養護・訓練』）」が加わっているが、その場で『教育』をつかさどる養護学校教諭の働きと『養護』をつかさどる養護教諭の働きの差異は、法律の規定では見えにくくなっている」（p103）と述べています。この点、養護学校教諭が特別支援学校教諭となり、養護教諭と名称の上では区別がしやすくなりましたが、働きの差異は見えにくいままです。

4-2. 自立活動の目標と内容

特別支援学校の学習指導要領に自立活動がおかれているのは、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及

び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基礎を培うため」¹²⁾です。

2002年(平成14年)から施行されていた学習指導要領では、「健康の保持」「心理的安定」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の5つの区分の下に22項目が示されていたのですが、今回の改訂で「他者とのかかわりの基礎に関すること」をはじめ5項目が追加され、追加した項目に人間関係に関する内容が多いことから「人間関係の形成」という新たな区分を設け、従来の項目も整理した結果、6区分26項目となっています。その自立活動の改訂について、特別支援学校学習指導要領解説自立活動編¹³⁾を参考に表1に示しました。表1の項目が保育所保育指針に述べられている保育(教育と養護)の目標に近い言葉が並んでいると感じるのは筆者だけでしょうか。

追加された「人間関係の形成」に関する指導は、以前は「心理的な安定」(「コミュニケーション」)に関する内容として、今までも取り組まれてきています。先ほどの鯨岡(2010)の指摘にもあるように、心理的な安定があるから人間関係がスムーズに行くという面と人間関係が

うまくいくから心理的な安定が得られるという面もあるわけです。現在、通常の学校現場においても、子どもたちの人間関係形成力が弱くなっていることを感じ取っている教員たちは、さまざまな教育的取り組みを行っています¹⁴⁾。また、心理臨床場面でも人間関係形成力の低下は問題視されています¹⁵⁾。

4-3. 自立活動中の「健康の保持」と「心理的安定」

ここでは、表1にあげた自立活動の「内容」の中で「1健康の保持」と、「2心理的な安定」という項目に注目したいと思います。特別支援学校学習指導要領解説自立活動編¹³⁾においては次のように書かれています。「『1健康の保持』では生命を維持し、日常生活を行うために必要な身体の健康状

表1 自立活動の目標と内容

特別支援学校 新学習指導要領2009年公示	
第1 目標	個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基礎を培う。
第2 内容	
1 健康の保持	(1) 生活リズムや生活習慣の形成に関すること。 (2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること。 (3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること。 (4) 健康状態の維持・改善に関すること。
2 心理的安定	(1) 情緒的安定に関すること。 (2) 状況の理解と変化への対応に関すること。 (3) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。
3 人間関係の形成	(1) 他者とのかかわりの基礎に関すること。 (2) 他者の意図や感情の理解に関すること。 (3) 自己の理解と行動の調整に関すること。 (4) 集団への参加の基礎に関すること。
4 環境の把握	(1) 保有する感覚の活用に関すること。 (2) 感覚や認知の特性への対応に関すること。 (3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること。 (4) 感覚を統合的に活用した周囲の状況の把握に関すること。 (5) 認知や行動の手掛りとなる概念の形成に関すること。
5 身体の動き	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること。 (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段及び活用に関すること。 (3) 日常生活に必要な基本動作に関すること。 (4) 身体の移動能力に関すること。 (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること。
6 コミュニケーション	(1) コミュニケーションの基本的能力に関すること。 (2) 言語の受容と表出に関すること。 (3) 言語の形成と活用に関すること。 (4) コミュニケーションの手段の選択と活用に関すること。 (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること。

態の維持・改善を図る観点から内容を示している。」(p35)「『2 心理的安定』では、自分の気持ちや情緒をコントロールして変化する状況に適切に対応するとともに、生涯による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲の向上を図る観点から内容を示している。」(p42)

特別な支援を必要とする子どもたちは、さまざまな理由によって「健康の保持」や「心理的安定」が難しい場合がありますから、この項目がまず挙げられているのは納得のいくところですが、そして、「健康の保持」では「生命の維持」について触れられ、下位項目では「養護」の言葉も出ています。「心理的安定」には下位項目で「情緒の安定」の記載があることも確認しておきたいです。

特別支援教育が始まって、通常の学校教育場面においても、それぞれの教員が一人ひとりの子どもたちの教育的ニーズを考えるきざしが見えてきたように感じていますが、一人ひとりの教育的ニーズでまず考えなければならないのが、「生命の保持」と「情緒の安定」だと筆者は感じています。

5. 養護教諭の「養護」

通常の小中高の学校の中で、「養護」という言葉が使用されるのは、養護教諭という言葉においてです。学校教育法⁵⁾第37条第11項では、「教諭は児童の教育をつかさどる」、第12項で「養護教諭は、児童の養護をつかさどる」とあります。ただし、法律上「養護」の定義はありません。日本養護教諭教育学会のホームページ¹⁶⁾で示されている「養護」の定義は、「養護とは、養護教諭の職務として学校教育法第37条第12項において「養護教諭は、児童の養護をつかさどる」と規定されている言葉であり、子どもの心身の健康の保持（健康管理）と増進（健康教育）によって発育・発達の支援を行うすべての教育活動を意味している。」とされています。児童・生徒の健康の保持・増進に努めるのは、養護教諭のみの仕事ではないと思いますが、ここでは「養護」の意味に教育活動が含まれていることを確認しておきたいです。同ホームページ¹⁶⁾では、養護教諭の英訳を「『養護』という英語が存在しないことから、敢えて日本に固有の養護教諭がもつ優れた独自性を世界に発信するという意図で『Yogo teacher』と表記することを2001年の総会で決議した」とも書かれています。スクールカウンセラーなどの職種が学校で一番連携を取るのは養護教諭であり、学校において心の健康教育が重視されるようになった現在において、学校教育における養護教諭の役割の重要性は大きいと思います。

しかしながら、養護教諭の養成において、看護師資格をもつ看護系大学と看護師資格をもたない教育系大学の2本柱で行われていることが、養護教諭の専門性や養護の意味するところについての議論となっているようです^{17) 18)}。加えて、1997年の日本学校保健学会で初めて「養護学」という言葉が用いられ、養護教諭の活動の根拠となる学問体系（養護学）と養成教育内容を充実させるための養護学の必要性が指摘されましたが、体系化は未だ至っていないようです¹⁶⁾。因みに、保育学の体系化も今後の課題であり、養護学同様に「養護」という概念の曖昧さがその背景にあるような気がします。話は逸れますが、学問的成熟があって初めて大学の学部名として成り立つということで、それまでなかった保育学部が学部名称として認められたのは、10年前、我が桜花学園大学保育学部が日本で初めてのことです。保育学部の教員として、「保育学」についての議論を重ねる必要性を感じています。

前述の大谷（2001）は、養護教諭の「養護」の意味にこだわり、「わが国における『養護』という

言葉の使われ方について」¹¹⁾ という論文で、①法令中の「養護教諭」と類似職種の規定、②法令中の「養護」にかかわる施設・施策についての規定、③各種辞典にみられる『養護』の解説内容について、④教育学の中での「養護」についてと4つの視点から「養護」という言葉を検討しています。そして、「特に『教育』について言えば、語源そのものの中に『養護』という概念が中核にあり、『養護』が『教育』にとって不可欠な機能であることが分かった。」(p108)と述べています。しかし、この論文では、保育分野における「養護」については全く触れられていません。

6. 福祉の分野での「養護」

広辞苑の説明にもあった児童養護施設、養護老人ホーム、特別養護老人ホームについて述べます。

「児童養護施設は、保護者のない児童、虐待されている児童その他健康上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談そのほかの自立のための援助を行うことを目的とする施設」¹⁹⁾ (児童福祉法第41条)

「養護老人ホームは、第11条第1項の措置に係る者を入所させ、養護するとともに、その者が自立した日常生活を営み、社会的活動に参加するために必要な指導及び、訓練その他の援助を行うことを目的とする施設とする。」²⁰⁾ (老人福祉法第20条の4)

「特別養護老人ホームは、第11条第1項第2号の措置に係るもの又は介護保険法の規定による地域密着型介護老人福祉施設入所者生活介護に係る地域密着型介護サービス費若しくは介護福祉施設サービスに係る施設介護サービス費の支給に係るものその他の政令で定める者を入所させ、養護することを目的とする施設とする。」²⁰⁾ (老人福祉法第20条の5)

「養護」という言葉は「養い護る」と書くわけですから、基本的には「生命の保持」のための営みです。福祉分野での「養護」は、「養い護る」のは家庭が行うことであり、それが出来ない場合に限り家庭以外で「養護」を行うという意味で使用されているように感じます。したがって、家庭「養護」が前提での「養護」という言葉の使用のように感じられます。そして、「養護するとともに」という言葉に加えて、「自立のための援助(児童養護施設)」、「指導及び、訓練その他の援助(養護老人ホーム)」という言葉が別にかかれていています。保育所は福祉施設であるので、保育所保育指針においてのみ、「養護」と「教育」という言葉が使用されているという論になりそうです。しかし、保育所と幼稚園の一体化運営においては、保育所に学校教育機能を付すのですから、福祉分野と学校教育分野での「養護」の意味する内容が異なることは混乱のもとになるのではないかと危惧します。

7. まとめ

筆者は、保育所・幼稚園・学校での子どもへの支援を通して「生命の保持」と「情緒の安定」の重要性を感じてきました。その問題意識から「養護」という言葉の使用についていくつか検討してきました。そしてそれぞれの立場では、「養護」からイメージする内容は異なっていることをみてきました。幼稚園と保育所の一体化運営が始まろうとしている今だからこそ、私たちは、自分たちが使用している「養護」という言葉も含めて、「保育」「教育」などの言葉を整理する必要があると思います。

引用文献

- 1) 鯨岡峻 (2010) 『保育・主体として育てる営み』 ミネルヴァ書房
- 2) 厚生労働省 (2008) 『保育所保育指針解説書』 フレーベル館
- 3) 第9回幼保一体化ワーキングチーム資料2-2 (本文中資料A) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局課長 (今里讓) 2011年5月28日「保育行政の動向と課題」平成23年度社団法人全国保育士養成協議会総会 講演資料 19-31
- 4) 子ども・子育て新システムに関する中間とりまとめの概要 2011年7月 (本文中資料B) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局課長 (鈴木義弘) 2011年9月7日「保育行政の動向と課題」平成23年度全国保育士養成セミナー、全国保育士養成協議会第50回研究大会 講演 [行政説明] 資料
- 5) 学校教育法 最終改正平成23年6月3日法律第61号
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S22/S22HO026.html> 最終閲覧日 2011/12/30
- 6) 新村出編 (2008) 『広辞苑』 第六版 岩波書店 2885
- 7) 新村出編 (1991) 『広辞苑』 第四版 岩波書店 2631
- 8) 新村出編 (1998) 『広辞苑』 第五版 岩波書店 2738
- 9) 文部科学省 (2009) 特別支援学校学習指導要領解説総則等編 (幼稚部・小学部・中学部) まえがき
- 10) 文部科学省 (2009) 『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編 (幼稚部・小学部・中学部・高等部)』 6
- 11) 大谷尚子 (2001) 「わが国における『養護』という言葉の使われ方について」日本養護教諭教育学会誌 Vol.4 No.1 100-109
- 12) 文部科学省 (2009) 『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編 (幼稚部・小学部・中学部・高等部)』 32 (幼稚園) 33 (小学部)
- 13) 文部科学省 (2009) 『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編 (幼稚部・小学部・中学部・高等部)』
- 14) 月刊学校教育相談 (ほんの森出版) には、学校での教員が取り組んでいる子どもたちへの支援の方法が紹介されている。人間関係形成力が弱くなっている子どもへの支援としては、例えば、2012年1月号「特集2学級での話し合いが活性化こんな方法」2011年2月号「特集1一人で給食を食べるなど孤立しがちな子」などがある。
- 15) 鍋田恭孝 (2007) 『変わりゆく思春期の心理と病理—物語れない・生き方が分からない若者たち』日本評論社
- 16) 日本養護教諭教育学会ホームページ <http://www.yogokyoyu-kyoiku-gakkai.jp/>
最終閲覧日 2011/12/30
- 17) 岡田加奈子 (1998) 「養護・養護教育と看護—養護教育に関連して—」千葉大学教育学部紀要 I 教育科学編 46 181-192
- 18) 鎌田尚子 (2011) 「養護教諭の教育と研究の現状と課題」保健の科学 Vol.53 No.5 292-296
- 19) 児童福祉法 最終改正平成23年8月30日法律第105号
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S22/S22HO164.html> 最終閲覧日 2011/12/30
- 20) 老人福祉法 最終改正平成23年6月24日法律第74号
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S38/S38HO133.html> 最終閲覧日 2011/12/30

石巻市震災ボランティアの活動報告

保育科 野津 牧
岡林 恭子

みんなに笑顔をとどけ隊の結成

2011年3月11日の震災は、名古屋短期大学の学生たちにも大きな衝撃として残りました。

5月、野津は、福島県、宮城県の被災地を回りましたが、現地の被災状況を大学に戻って報告をすると、多くの学生から、「ぜひボランティアとして現地に行きたい」という声が寄せられました。当時は、がれきの撤去のボランティアが中心で保育までニーズが回っていませんでしたが、ボランティア派遣をするときは、学生たちが日ごろ学んでいる保育をキーワードにしようと決めました。しかし、どのような形で避難所に入ればよいのか、宿泊先の確保や移動手段はどうするのか、一つ一つ乗り越えていかなければいけない課題がありました。

ボランティア先の調整は、にじいろクレヨンという石巻市の団体が受け入れてくれることになり、また、宿泊先は石巻市のなかよし保育園の大橋園長が快諾してくれました。残るは、移動手段の確保です。幸いにも大学の理解を得ることができ、大学のマイクロバスを出していただくことになり、夏休みに保育ボランティアとして学生を派遣することが決定しました。

バスに乗ることができる学生の座席は19名分しかありません。保育科の1年生は最も希望者が多かったのですが、実習等の経験もないことから参加を断念してもらい、専攻科の15名を中心に保育科2年生を加えることになり、保育科の4名を選考し終えたのは7月初旬でした。

それからの1か月間、専攻科の青山、関の2名のリーダーを中心に、ボランティアの名称を「みんなに笑顔をとどけ隊」に決定し、公務員試験の最中にもかかわらず、遊びの企画、派遣の準備、募金活動、寄付物品集めなどのため、めまぐるしく活動しました。



募金活動



募金活動



最終打ち合わせ



ゼミでうちわ制作



はらぺこあおむしの練習風景



積み込み作業

石巻市の被災状況について

私たちが活動拠点としたのは石巻市です。石巻市は、震災前の人口は 162,822 名（2011.2 現在）で今回の震災でも最も被害の大きかった自治体です。死者数は 3,150 名、行方不明者数 890 名、避難者数 2,979 名、避難所数 73 か所（現在、避難所は無くなりました）、住宅・建物被害（全壊数+半壊数）22,419 か所に上りました（2011. 8. 3 現在）。

沿岸部並びに河口付近は、10メートル以上の津波が押し寄せ、2階建の建物の屋根を越す津波と火災で壊滅的な被害となっていました。また、石巻駅周辺は1階部分が水につかる被害を受けており、駅前の商店街は一部再開している店も見られたものの再開できないままの店のほうが多い状態でした。駅より西側（海より遠い側）は、修復の必要な家屋があるものの、多くの店舗は再開しています。

地盤が沈下しており、満潮になると水没する道路もあるため、各家庭に潮見表が配布され、地盤の低い地区に行く場合は満潮の時間帯を避けるなどしているとのこと。



写真左：門脇小学校



写真右：津波の被災地に咲いたひまわり

第1回訪問活動

1. 日 時 2011年8月1日（月）～2011年8月5日（金）

2. 活動場所 宮城県石巻市内

* 避難所：門脇中学校、蛇田小学校、蛇田中学校、広淵小学校

* 仮設住宅：蛇田北第2仮設住宅、南境仮設住宅、向陽町仮設住宅、南境谷地公園仮設住宅

* なかよし保育園

3. 参加学生 19名

全体リーダー・青山桂子、サブリーダー・関綾乃

(1) 専攻科保育専攻2年生 9名 青山桂子、伊丹沙織、犬飼麻菜、関綾乃、立松万充子、波多野有紀、松浦早紀、三浦由貴、三輪志奈子

(2) 専攻科保育専攻1年生 6名 近藤奈央、近藤瑠衣、田中晴子、堀内郁美、間瀬朋美、若林幸歩

(3) 保育科2年生 4名 野口聖、野道舞、丸山絢子、渡辺里佳

4. 引率教員 2名

野津 牧、岡林 恭子

5. 寄付金・寄付物品等

* 寄付金総額：88,200円 「にじいろクレヨン」に寄付しました。

* 活動資金協力 65,926円 教職員から寄付していただいた寄付金は、ピブス代、おもちゃ等購入資金、食費補助他として活用させていただきました。

6. 訪問活動

8月1日 8:00、いよいよ大学を出発しましたが、宿泊先である石巻市のなかよし保育園に到着したのは19:00近くになっていました。その晩は、石巻市の川開きの花火大会の日です。今年の花火大会は、震災で亡くなった人の鎮魂の願いを込めているということで、きれいな花火を複雑な思いで眺めました。

2日目、海沿いの門脇地区を車で回りました。少しずつ復旧作業が進み始めたとはいえ、今回の震災でも最も被害の大きかった石巻市の惨状を前にして学生たちはまさに声を失うという状況でした。

以後3日間、午前中はなかよし保育園で子どもたちと関わりました。午後は6班に分かれて、メンバーを固定して、できる限り同じ避難所、仮設住宅に入り、保育ボランティアとして主に小学生たちと学童保育のような形で子どもたちとかかわりました。

保育内容は、シャボン玉なども用意しましたが、基本は普段子どもたちが遊んでいる内容としました。活動最終日には、顔見知りになった子どもたちと手紙のやり取りも始まりました。

今回のボランティア活動は、保育園の子育て支援センターに寝袋にくるまつの泊り込みで、食事のほとんども大学から提供していただいた非常食のアルファ米ということで大変ハードでした。



石巻市まで片道11時間かった



仮設住宅の子どもたち



手作りうちわは好評だった

(1) 第1班 波多野有紀・近藤奈央・野口聖

蛇田北部2号公園仮設住宅で3日間、3人で活動させて頂きました。私たちの班は敷地内の空きスペースと仮設住宅の談話室を使わせて頂け、子どもの体調や天候に合わせた活動がしやすい環境を与えて頂きました。

- 活動1日目 最初は、仮設住宅に住む一人のT君と縄跳びで遊びました。暫くすると、仮設に住む祖父母の所へ遊びに来ていた小学生のHさんとRちゃんが姿を見せたので遊びに誘い、リレーやシャボン玉等をして遊びました。この頃はまだ、子どもたちも私たち自身も緊張しており、少しぎこちなく関わっていました。午後からは、近所の子どもたちも遊びに加わり、最終的に10人位の子どもたちと遊びました。遊んでいく中で段々と関係を作っていくことが出来、「サッカーしようよ!」と、子どもたちからも関わってくれるようになりました。子どもたちのお母さん方

も気さくに声を掛けて下さいました。活動の終わり頃に、仮設住宅の各家庭を訪問し、名古屋短期大学生の製作した手作りうちわをお渡ししました。

●活動2日目 昨日の到着が早かったこともあり、子どもたちは13時頃から待っていてくれました。この日は、1～9歳の幅広い年齢の子どもたちが遊びに来てくれました。屋内ではお絵かきやブーメラン製作、折り紙を、屋外ではサッカーやシャボン玉、風船バレーをして遊びました。お母さん方にも協力して頂きながら、臨機応変に屋内外に分かれて行動し、遊びを展開していきました。途中で、「ちょっと子ども見てもらっていていい？」とお子さんを私たちに預け、夕飯の買い物へ行かれたお母さんも見え、子どもたちとも保護者の方とも、段々と信頼関係を築いていることを実感しました。

●活動3日目 祖父母の所へ泊まりに来ていたHくんとRちゃんが、お昼には自宅に帰ると昨日言っていたこともあり、出来るだけ早く活動場所に向かいました。HくんとRちゃんも、保護者の方に頼み、帰る時間を遅らせてくれていたので、夕方までたっぷり遊ぶことが出来ました。遊んでいく中でHくんは、DSで写真を撮り、思い出を残そうとする姿も見られました。この日は、ストローはしごを使って、大きなシャボン玉をして遊びました。年齢の低い子どもたちが、上手く大きなシャボン玉を作ることが出来ていました。年齢の高い子どもたちは、そのシャボン玉を追いかけたり、パチンとはじいたりして、年齢に関係なくみんなで1つの遊びに夢中になって遊ぶことが出来ました。そして、活動も残り1時間という頃に、仮設住宅に住むAちゃんが旅行から帰ってきました。Aちゃんも遊びに誘い、にじいろクレヨンの柴田さんとあいちゃんも含めたみんなで、こおり鬼やかくれんぼをして遊びました。

活動最終日と言うことで、3日間で遊んだ子どもたち全員にメンバーそれぞれから手紙と、折り紙のコマとヒマワリをプレゼントしました。手紙というカタチでも石巻の子どもたちやお母さん方と、これからも繋がっていきたいと思います。

(2) 第2班 三輪志奈子・間瀬朋美・丸山絢子

3日間とも門脇中学校での活動でした。1つのグループに3、4人という少ない人数で1つの避難所や仮設住宅を任せられます。また詳しい情報もあまりないため、臨機応変に行動しなければなりません。これらのことから、初めて避難所に行く時は不安いっぱいでした。

●活動1日目 避難所に着いてまずは避難所の様子を見て、それから早く馴染めるように他のボランティアの方のところに挨拶をしに行きました。今思うと挨拶をしに行ったことで、子どもと他のボランティアの方とも一緒に遊ぶことができ一体感を感じることができました。

1日目、子どもたちは警戒しながらも近寄ってきて、私たちが持ってきたものに興味ないと離れていきますが、けど気になるので私たちのところを行ったり来たりしていました。大縄は珍しかったらしく、人気で長時間遊んでいました。他、風船で遊んだりボールで遊んだりしました。活動は主にピロティでしたが、16時頃から校庭を使えるようになるので、校庭の鉄棒で遊びました。

●活動2日目 昨日の今日なので子どもたちは私たちを見ると、近寄ってきて遊び始めました。こ

の日は男の子たちはブーメラン作りに必死で、女の子たちはトランプやかるたで遊んでいました。また、この日にはじいろクレヨンの「おかちゃん」や「よっぱ」が来て、トランポリンをしたり、キラキラした置物を作って遊んでいました。16時頃は運動場でサッカーをしたりドッチボールをしたりして体をいっぱい使いました。またシャボン玉を帰るまでずっとやっていました。

- 活動3日目 私たちが来るやいなや「しなこ〜」「おねえさーん」などと叫んで走って出迎えてくれました。「ドッチボールやろう」とやりたい遊びはいっぱいです。

今日は、「おんちゃん師匠」と「あいちゃん」も一緒でした。活動最終日なので巨大シャボン玉を行いました。子どもたちはとても楽しんでいました。16時頃になると今日もドッチボールをしました。そして、お別れの日なので手紙交換をしました。前日に今まで遊んでくれた子どもたちに私たちの住所を添えた手紙を一人一人書きました。今日初めて会った子どもたちにもその場で手紙を書いて渡しました。今日で終わりではないので最後は笑顔で別れるようにしました。門脇中学校避難所の子どもたち、これからたくさんお手紙交換しようね。

(3) 第3班 伊丹沙織・近藤瑠衣・渡辺里佳

- 活動1日目 私たちは3日間、蛇田小学校の校庭で活動しました。最初に乗っていたバスから校庭に降りたとき、グラウンドにいる子どもは野球をやっている少年たちでした。遊ぶきっかけを作りたいと思い、「こんにちは!」「何年生?」などと話しかけましたが、もうすでに自分たちだけで楽しめているようで、その子たちとの関わりは広がらず、どのように関わりを持とうと最初は戸惑うこともありました。すると、3人の女の子や男の子2人の兄弟が来て、「こんにちは、一緒に遊ぼう!」と話しかけると元気良く「こんにちは!」と初めて出会う私たちを気持ち良く受け入れてくれました。この日は、その子たちを中心に他の子どもたちも加わって、鬼ごっこやサッカー、キャッチボールや砂場遊びなど比較的活発に体を動かし遊びました。砂場遊びでは、水を使っていたこともあり、子どもたちの口から「津波」という言葉が聞こえました。その様子から、夢中になって遊んでいる最中でも、水を見ると津波に繋がってしまうのだと衝撃を受け、何て返事を返したら良いのだろうと返答に戸惑う場面もありました。

- 活動2日目 この日は、1日目に「また明日遊ぼうね!」と約束した子どもが「今日も来たよー!遊ぼう!」と楽しみに待っていてくれたことがとても嬉しく感じました。1日目は鬼ごっこやサッカー、キャッチボールなど、活発に遊ぶことが多かったので、この日は大学から持ってきたいろいろな玩具を取り出して「これやってみる?」と遊びに誘い、けん玉、シャボン玉、風船、だるまさんが転んだなどをして楽しみました。風船やけん玉を見た子どもたちは「久しぶりにやるー!」と楽しんでいて、たくさんの笑顔を見ることができました。また、学生のみんなが作ってくれたうちわも「もう一本もらってもいい?」と言ってとても気に入ってくれている様子でした。1日目から引き続き来てくれた子どもとは、「早く野球すっぺ〜!」「遊ぼうよー」と子どもたちの方から積極的に遊びに誘ってくれるようになり、本当の兄弟のように慕ったり、少しずつ関係が深まってきたかなと感じられた一時でした。

- 活動3日目 この日は、学校で用意してきた大きいシャボン玉をしていると、プールが終った子

どもたちが「何してるのかな？」と言わんばかりに興味を持って集まってきました。子どもたちは大きなシャボン玉をととても楽しんでくれたようで、すぐにシャボン液はなくなってしまいました。その後は、カラフルな粘土を使って、思い思いの作品を作っていました。途中おじいさんが話しかけにきてくださり、お話を伺いました。そのおじいさんは被災をしてこの近所に越してこられたようで、「蛇田小学校の子どもたちは挨拶をきちんとするいい子ばかりだ」とおっしゃり、私たちもその言葉に納得しました。

しかし、1日目・2日目とずっと来ていたのに、この日は姿が見られない子どもがいました。残念に思いながら迎えのバスを待っていると、その子どもが乗った車がグラウンドの前を通り、たくさん手を振ってくれ、最後の最後に会えたことが本当に嬉しかったです。

たった、3日間でしたがたくさんのおもちゃたちに出会え、刺激されました。子どもたちとたくさん遊びをして楽しみ、どれも楽しくて思い出に残っています。子どもたちの笑顔がたくさん見られて、とても嬉しかったです。また、ボランティアに来なかったら、会うことのない子どもたちと、遊びを通して関わることで関係ができて、テレビでは知ることのできない子どもたちの様子や抱えていることを感じ、私たち自身改めて様々なことを考えさせられる活動でした。

(4) 第4班 関綾乃・三浦由貴・堀内郁美

- 活動1日目 この日は、広瀬小学校で活動しました。避難所の子どもはお昼寝中だったので、以前避難所で暮らしていた小学生2人と遊びました。はじめは2人とも初めて会う私たちに戸惑っている様子でしたが、一緒に遊んでいく中で少しずつ笑顔を見せてくれたり、子どもたちから話しかけてくれたり、やりたい遊びを伝えてくれたりするようになりました。

校庭が使えたので、ケイドロや縄跳び、サッカーなど体を動かす遊びをたくさんしました。遊びの中でもけん玉が人気で、できるとハイタッチをして一緒に喜んだり、上手いくコツを得意な子に教えてもらったりし、子どもたちにつられて私たちが夢中になって遊びました。

- 活動2日目 2日目は、昨日遊んだ子どもがいる新境谷地南仮設住宅で活動しました。新しく仮設住宅に住んでいる子どもや近所の子どもたちも加わり4人の子どもたちと遊びました。

シャボン玉、粘土、縄跳び、キャッチボール、けん玉、ジャングルジムで鬼ごっこ、牛乳パックで羽子板作りなどいろいろな遊びをしました。「〇〇したい」と玩具を見て言ったり、「〇〇しよう」と遊びに誘ってくれたりして子どもたちがしたい遊びを目一杯しました。帰り際には「明日もくる？」と言ってくれる子どももいて、まだ遊び足りないような子どもたちでした。

- 活動3日目 2日目の帰り際、子どもたちに「明日は、何時に来るの？」と尋ねられ、「2時半に来るよ」と約束しました。翌日、私たち3人が行くと、子どもたちが外で待っていてくれました。私は、約束したけれど今日もいるかなと心配をしていたので、待っていてくれた彼女たちを見て嬉しく思いました。

昨日遊んだ子どもたちなので、私たちがどんな遊び道具を持ってきたか伝えると、「しゃぼん玉やりたい」や「粘土もやりたい」「みんなで縄跳びしよう」「ジャングル鬼は？」などと、彼女たちから遊びを提案してくれました。昨日と同様に遊ぶだけではなく、道具を変えて大きなシャ

ボン玉を作りました。大きさや飛んだ高さを競ったり、大きなシャボン玉を作る技をあみだしたりと、子どもたちを始め、私たちも一緒に夢中になって楽しみました。

夕方、全員の子どもたちとハイタッチをしてお別れしました。子どもたちは、私たちが乗ったバスが見えなくなるまで見送ってくれました。短い時間でしたが、被災地ボランティアという枠組みを越えて、私たちは子どもたちと思いっきり遊ぶという楽しさを共有出来たと思います。今後も、この繋がりを大切にしていきたいです。

(5) 第5班 松浦早紀・青山桂子・田中晴子

- 活動1日目 蛇田中学校 この日は1時間程の活動でした。メインの子どもと遊ぶことは、ご飯の時間だったので出来ませんでした。名古屋短期大学の学生の手作りうちわを配らせていただきました。一つひとつ違うデザインを楽しそうに選んでいただけてとても嬉しかったです。

また、配膳のお手伝いも少しだけさせていただき、避難所で暮らしている方々は本当に温かい食べ物が嬉しいとおっしゃっていました。

- 活動2日目 向陽町住宅地区仮設住宅 この日は雨が心配でしたが、外で子どもたちと元気よく遊ぶことが出来ました。初めて逢ったので、最初は恥ずかしそうだった子どもたちでしたが、少しずつ遊びたいなあと寄って来てくれて大なわ4人で30回挑戦や、誰が1番たくさんなわとび跳べるか、おばあちゃんたちと一緒にけん玉やお手玉、ボール遊び、粘土で惑星作り！等いろいろな事をして遊びました！

東北大学のお兄さんたちがボランティアに来てからは、室内に移動して、みんなでカルタやババ抜きカードゲームで盛り上がりました！それから女の子たちは、折り紙でこまやカブトを作ったり、工作ではブーメランや牛乳パックルービックキューブを作りました。男の子たちはお兄さんたちと一緒にかくれんぼや鬼ごっこ、ボール遊びで汗びっしょり、とっても元気でした。

うちわも好きな柄を一生懸命選んで、たくさん抱えて家族に届けてくれました。

- 活動3日目 向陽町住宅地区仮設住宅 お天気にも恵まれ、最初はみんなでドッジボールをやりました。

なわとびをうまく利用してコートづくりをし、特に男の子は強いボールでどンドンゲームを進めていて元気いっぱいでした。その後は大きなシャボン玉を作ろう大作戦を実行しました。遊び班の子たちが一生懸命作ってくれたシャボン玉セット。楽しんでくれるかなと不安もありましたが、子どもたちは上手に風を利用して大きな大きなシャボン玉をたくさん作っていました。そしてその大きさにみんな大興奮！！ 大作戦は大成功しました。その後は、集会場（室内）に向かうグループ以外は外に残って、サッカーやシャボン玉大作戦、なわとびで楽しんでいました！

集会場では、女の子たちは、とっても器用に素敵なデザインのブーメランと牛乳パックルービックキューブを作りました。帰りは大切そうに持って帰ってくれました。

男の子は汗びっしょりで、風船ハンドボール！やっていく中でみんなで気持ちよく遊べるようにルールを決めたり、チームワークを大切にできるようになったり、その白熱した姿は、本当にかっこいいものでした。最後はみんなお片づけを手伝ってくれました。

そして、プレゼントとして折り紙で作ったコマに私たちボランティア3人の住所を書いて渡しました！

帰りもお見送りに来てくれて、バスを追いかける姿にとっても感動しました。

本当に大切にかけがえのない、みんなとの時間でした。

(6) 第6班 立松万充子・犬飼麻菜・若林幸歩・野道舞

- 活動1日目 南境地区公園仮設住宅 私たちが到着した時には幼児～小4までの7名ほどの子どもたちがいて、16時頃から18時半頃までの活動でした。はじめは、にじいろクレヨンの「おんちゃん師匠」と「あいちゃん」も遊びに加わって下さり、原っぱや道路を使って鬼ごっこをしました。明るく、人懐っこい子どもたちとにじいろクレヨンのお二人のお陰もあり、子どもたちとすぐに打ち解けることができたように思います。この日は、遊びセットとして用意していた粘土と風船、大縄が大人気でした。数人の女の子が、色々な色の粘土を組み合わせると色が変わるのを楽しんだり、私たちに指輪を作ってくれたりしました。風船は、膨らませてうちわであおいで遊びを楽しみました。

大縄は、みんなで一緒に跳んだり、子どもたちの提案で「郵便屋さん」や「くまさん」をしました。それから、仮設住宅の近くにある原っぱには大きなバツタがたくさんいて、捕まえて遊びました。体を使う遊びに疲れると粘土など静かな遊びに移るけれど、すぐにまた走り出したり、3時間休む暇もなく汗びしょりになって遊ぶ、元気な子どもたちでした。帰り際に名短の学生が作ってくれたうちわを見せると、大喜びでうちわを選んでいました。「家族の分も持っていくな！」と言って、たくさんもらって行ってくれました。「明日もあさっても一緒に遊ぼうね。」と約束をして、迎えに来たバスに乗りました。

- 活動2日目 蛇田小学校 今日南境地区公園仮設住宅の子どもたちが見当たらず、3班のいる蛇田小に、後から行きました。はじめに、シャボン玉やサッカーをして子どもたちと一緒に遊びました。それから、昔ながらの玩具である、お手玉やけん玉を「見てて！」と何回も挑戦して見せてくれたりしました。また、マルモリダンスも何回も見せてくれる子どももいて、一緒に踊って楽しみました。遅くに到着して長い時間は遊べませんでしたが、蛇田小の子どもたちも元気いっぱい、楽しく遊ぶ事ができました。私たちが帰るとき、子どもたちは必死でバスの後をずっと追ってきて手を振ってくれて、そんな姿に私たちはとても感動しました。
- 活動3日目 南境地区公園仮設住宅 今日2日ぶりに行ったら、子どもたちが「なんで昨日来なかったの？ずっといたのに！」と私たちに言いました。私たちは、昨日行ったら子どもたちが見当たらずに「子どもたちいないね。残念だね。」と思いつき返しましたが、本当はずっといたみたいで、申し訳ない気持ちと残念な思いでいっぱいでした。

その分、最終日の今日1日を思い切り楽しもうと、1日目にした遊びに加え、大きなシャボン玉や折り紙やカルタやトランプ等をして一緒に楽しく遊びました。大きなシャボン玉はみんな本当に楽しそうにやってくれて、大きいシャボン玉ができると「すごーい」という声がきこえ、すぐにシャボン液はなくなってしまいました。子どもたちと過ごす楽しい時間は、あっという間に

過ぎてしまい、最後に手紙や折り紙ピカチュウのプレゼントをすると、喜んでくれたり抱きついてきてくれたりしました。最後に別れるのがとても惜しく、「また遊びたいなあ」とみんな思いました。

また、この日は最終日ということで子どもたちに協力してもらい、住宅をまわってうちわを配りに行きました。突然の声かけでしたが、学生の手作りだということを話すとどの方も大変喜んで下さいました。「大切にします、ありがとう。」涙ぐみながら「お友だちの分ももらってもいいかしら。」と言ってくれる方もいて、とても嬉しく、人の優しさ、温かさを心から、感じました。

第2回訪問活動

1. 日 時 2011年9月28日(水)～2011年10月3日(月)

2. 活動場所 宮城県石巻市内

* 仮設住宅：蛇田北第2仮設住宅、南境仮設住宅、南境谷地公園仮設住宅

* なかよし保育園

3. 参加学生 6名

専攻科2年 犬飼麻菜、関綾乃、波多野有紀、松浦早紀

保育科1年 小椋理恵、細川榛佳

4. 引率教員 1名

野津 牧

5. 活動内容

第2回目の活動は、名古屋短期大学同窓会から10万円の活動資金援助を提供していただきました。

(1) 塩釜市・あゆみ保育園

あゆみ保育園(所在地:宮城県塩釜市花立町1-15-2)は、共同保育所からスタートし、定員90名の認可保育所として運営している保育所で、保育士総数は23名である。

東日本震災時、津波は直接押し寄せてこなかったものの、海水は徐々に地区のマンホールなどからあふれ出し、子どもたちを近くの小学校に避難させた。避難時に残っていた子どもは20名ほどだったが、たまたま役員が園に来ていたため一緒に誘導できたが、児童福祉施設最低基準の職員配置数では子どもたち全員を安全に避難させることはできなかったとのことである。水は、園庭まで達し、最後の子どもの親族が迎えに来たのは丸1日後のことで、以後、5日間ほど水が引かなかった。

子どもの親族で犠牲となった家庭はあったが、死亡した子どもは幸いにもいなかった。

訪問時は、運動会の総練習のときで見学のみとなった。「さくらんぼ方式」の活動を取り入れているため、棒登りやリズム運動を取り入れ、一般的な保育所で実施している運動会の内容はかけっこくらいしかなかった。競技の際の音楽も保育士が交代でピアノを弾いていた。

(2) なかよし保育園

先回に続いてのなかよし保育園訪問。運動会前でしたが快くボランティアと宿舎の提供をしていただきました。午前中みの活動参加で、最終日は運動会の見学もさせていただきました。今回は、床

上浸水のため傷んだ園舎の床の張り替え作業が始まっていました。

運動会は、逆上がりや棒登りなど、前日までの練習ではできなかった子どももみんなに応援してもらいできるようになるなど子どもたちの成長ぶりを見ることができました。斜めに立て懸けた平均台を登る競技や戸板の上に登って飛び降りる競技など、ユニークな企画が多く、先生たちのダイナミックな動きに学生たちは圧倒されました。

(3) 蛇田北部2号公園仮設住宅

蛇田北部第2仮設住宅は、前回に続いての訪問で、波多野有紀、松浦早紀、細川榛佳が参加しました。集会場が使えるため、前回出会ったお母さんたちが他のお母さんたちを誘い合って来ていただきました。「名古屋短大の学生さんたちが来ると、安心して子どもたちを任すことができるので、私たちも安心して買い物に行けたりする」との言葉をいただきました。

子どもたちと遊びでかかわることを目的とした活動ですが、お母さん同士の出会いの場であったりして、学生の笑顔がお母さんたちの心も癒しているのではないかと思います。活動最終日は、暗くなってからも2人のお母さんが見送りをしてくれました。

(4) 南境地区公園仮設住宅

南境仮設住宅も前回に続いての訪問で、犬飼麻菜、関綾乃、小椋理恵の3名が参加しました。南境から運動公園までの地域は、今回の被災地でも最も大きな仮設住宅地区となっており、南境仮設住宅はその南端にあります。

集会場が使えないため寒い外での活動となりました。前回出会った子どもたちに加えて他の仮設住宅からの参加者も増えました。子どもたち同士が誘ってきたり、お母さん同士の口コミで来ていただいたりしました。遊びは、粘土遊び、シャボン玉作り、折り紙、ボール遊び、鬼ごっこなどで、日常の遊びを重視しました。

(5) 南境谷地公園仮設住宅

南境谷地公園仮設住宅は、街の中の小さな公園に2棟7軒の小さな仮設住宅で、第3日目の昼間、関綾乃、小椋理恵、細川榛佳の3名が、前回訪問した子どもの家庭を訪問し、3名の子どもと短時間交流しました。

先回の訪問で仮設住宅へ移ったばかりの子どもと学生が交流しているところに隣の子どもがやってきて地元との接点できましたが、今回も隣の子どもも参加してくれました。



写真左：はらべこあおむし



写真右：保育園の子どもたちからの贈り物



にじいろクレヨン柴田代表に寄付金を渡す



中日新聞 (2011.8.3 夕刊) に紹介されました

参加者の声

1. 青山桂子 (全体リーダー・専攻科保育専攻2年生)

到着した日の夜、なかよし保育園の園長先生が3月11日のことを話して下さったのがとても印象に残っています。全員の安全を第一に考えた咄嗟の判断、保育者同士のチームワーク、なかよし保育園がある地域を正しく理解した避難の仕方。“大切な命を預かっている”という意識を常日頃からそこで働く全員で持ち、チームワークを大切にし、緊急時にも焦らず判断をすることの重要性を心から感じる事が出来ました。いつ起こるか分からない東海大地震。自分が保育者として働いているときにおこる確率はゼロではありません。このように自分が知り、感じたことを職場のみなさん、また同じ保育者の友だちに伝えていきたいと思えます。

保育園での活動では、子どもたちは本当に元気で、自然な笑顔をたくさん見せてくれました。これはなかよし保育園の保育者の方々の努力のためだと思います。子どもたちの心の傷を受けとめながらも、元の生活、いつものように過ごすことを心がけることがとても大切だと感じました。

仮設住宅でも子どもたちはとても元気でした。しかし、子どもたちはそこでの生活の中で、いろいろな人がいるということを感じながら、それでも遊びたいからと友だちを求めて、遊んでくれる大人を求めて、生活しているのだなと感じました。

ボランティアに行く前には夏祭り等イベント系で遊ぼうと考えていましたが、柴田さんには“普通に遊ぶ”ということをお願いされました。実際に仮設住宅に足を運び子どもたちに会い、柴田さんとおっしゃっていたことがわかりました。“子どもたちの暮らしの中での関わり”なのだとということをとて強く感じました。変な言い方かもしれませんが、“普通の時間を普通に過ごす”。これが大切なのだと思います。

ボランティア後、今回の活動を振り返りたいと思いましたがなかなかできませんでした。それはあまりにも近くで人々が感じている悲しい死を感じたり、心の傷に触れたり、壊れたみなさんの大切な街を見たり、でも前向きに生きていこうとしている姿を見たからです。自分がもし今回の震災を間近で経験していたら…と考えると、どんな言葉もみなさんにかけてられないし、私程度の悲しい、つらいで涙を流してはいけないと思いました。

だから、どうしても前を向いてたくて、帰ってきてから自分の生活をいつものように過ごし、い

つものように暮しました。

そして心につよく残っているのはやはり“前を向いて生きる”ということでした。今できること、未来につなげていけること、小さくてもたくさんあると思います。それは保育者としてだったり、家族の一員としてだったり、地域の1人としてだったり、青山桂子という人物としてだったり。

きっといろんな傷は消えないけれど、少しずつ癒えていく日がくるように日本という国の国民として生きていきたいと思います。

2. 関綾乃（全体サブリーダー・第4班リーダー・専攻科保育専攻2年生）

石巻市に出発する前は、準備の確認など毎日、今回のボランティアのことを考えていました。それは、今回の活動を中途半端なものにしてはいけないという思いがあったからです。初めは、野津先生が企画してくださった活動です。

震災後、何かしたいと思いつつも出来ない自分にもどかしさを感じていた矢先、今回の話を聞いて自分も何か出来る！！と嬉しさを感じました。

募金活動や手作りうちわの募集など、学生だけではなく、先生方や事務の方、幼稚園の保護者の方や子どもたち、警備の方、ゴミ収集に来る外部の方まで、様々な方に協力して頂きました。その思いや、「頑張ってきてね」という温かい言葉が、涙が出るほど本当に嬉しかったです。その半面、皆さんの大切な思いを受け止め、それをきちんと私たちの熱意に変えて届けなければならないと感じました。そのような思いで、今回の活動に臨みました。

実際の活動でも、多くの人の温かさに触れました。三日間、午前活動させて頂いたなかよし保育園では、各年齢のクラスに入らせて頂いたり、歌いながら読む「はらぺこあおむし」の絵本を子どもたちに披露するという機会も作っていただきました。絵本を読んだ時の子どもたちは、興味を持ち楽しそうに見てくれました。また、その歌に保育者の方も感動したということも、後に教えてもらい嬉しかったです。保育園での保育ボランティアで最も印象的であったのは、紙に子どもたちが手形を押して作った「ありがとう」というメッセージを書いたものを最後にプレゼントされたことです。大人数で活動し保育園の方にも迷惑をかけてしまったと感じていましたが、保育園の先生方、子どもたちに受け入れて頂き、感謝の思いでいっぱいです。

今回の震災の現状を垣間見ることが出来たのは、避難所、仮設住宅での活動です。未だに、避難所で集団生活をされている方も多くいました。私たち3人のグループは、子どもの人数の関係で、一日目は避難所、二日目、三日目は小規模の仮設住宅を訪れました。子どもの人数が4、5名であったため、少ない分、みんなで一つの遊びをしたり、一人ひとりの子どもに声を掛け密な関わりが出来たと思います。

その中でも、ある一人の小学3年生の女の子が特に印象的でした。みんなで遊ぶというよりは、一対一で自分を見てほしいというような、大人との関わりを求めていました。震災前の彼女を知らないため、推測でしかありません。しかし、多くの方がそうであると思いますが、おそらく保護者の方も震災後慌ただしく時が流れ、子どもの思いを受け止める十分な時間を持てなかったのではないのでしょうか。

また、以前住んでいた所とは異なる地区の仮設住宅に引っ越し、学校も転校となるため、周囲の友だちもいないようでした。その女の子を見ていると、遊び相手、話し相手が欲しかったのだろうと感じました。それも、震災の影響であるし、住宅の整備だけではなく、やはり心のケアも重要なことであると思いました。

今回のような機会を設けていただき、それに参加することが出来たことを本当に嬉しく思います。現状を実際に自分の目で見て、子どもたちと触れ合い、感じたことがたくさんあります。それを、多くの人に伝えることも私たちの役目であると思います。また、最後に子どもたちに手紙を渡し帰ったのですが、仮設住宅で出会った女の子から可愛らしい絵の書いた手紙が届きました。この温かい繋がりを大切にしていきたいと思います。

3. 岡林 恭子 (教員)

東日本大震災保育ボランティアに私が参加するにあたっては、何もできないけれど、学生に何かあったときには“そばについてあげたい”といったそんな気持ちからでした。暑さ厳しいときなので、熱中症のことが一番心配でしたが、幸い誰一人として体調をくずすこともなく、また怪我もなく元気で帰ってくることができ、ほっと胸をなでおろしました。私はいろいろな人に声をかけながらおしゃべりをするしかできませんでした。あえて怖かった3月11日のことにはふれまいと思っていましたが、出会った皆さんからは「聴いてほしい」そんな思いが伝わってきました。そうした出会いの中からの皆さんの声を、なるべく語られたそのままをと思いながら書いてみました。

(1) 避難所で出会った皆さんの言葉から

☆おじいちゃん

「最初（避難所へ来たとき）は苺2つだった。その後はおにぎりが1個。……だけど今はちゃんといただけるから……ありがたい」

—避難した直後のことを思い出しながらのその言葉に、避難所への支援物資がすぐには届かないことの悲惨さを実感しました。

☆おばあちゃん

「ごはんが硬くてねえ……急いで食べないと、いつも最後になってしまうよ」

「だけど、こうして食べるものをいただけるだけでありがたいことで……」

一片づけてくださる人たちに迷惑をかけないようにと、一生懸命硬いご飯をもぐもぐさせていらっしゃるおばあちゃん。ゆっくりでいいよと声をかけるのが精一杯でした。

明日の朝は？とお聞きすると

「今（夕食時）配られているおにぎり、パンが明日の朝と昼の分なの」と。

—今配られているおにぎり、パンが明日の朝と昼の分だと分かって、辛い気持ちになりました。

その日の夕ご飯は、割子弁当。当然冷たいご飯です。でもその日はあったかいトン汁がついていました。若いボランティアの人たちの炊き出しでした。本当にどなたもうれしそうにトン汁を食べていらっしゃいました。

「うれしいねえ。あったかいものが。たまにつくとうれしいねえ」

「ここでは、火も使えないでねえ」

—私たちにとっては当たり前のあたたかい汗物が、避難所の方にとっては、こんなにもうれしく、ありがたいものなんだと……

☆おじいちゃんと二人でいらしたおばあちゃんに、「衝立もなくて大変ですね」と声をかけました。

「この方がいいんですよ。仕切りがないからみんなの顔が見えるよ。仕切りがあったらみんなの顔が見られねえ」

—自分の考えのいい加減さに、恥ずかしさを覚えました。いろいろな人がいて、いろいろな思いがあって当たり前。このご夫婦にとっては、衝立があったら孤立して閉塞感に陥ってしまうだろうと感じました。

☆抽選にやっと当たって仮設住宅に移る方

「明日、ここ（避難所）を出ます。早くここを出て、新しい1歩を踏み出したいと思っていたのですが、なかなか抽選に当たらなくてねえ……やっと当たったので」

☆「だんだん避難所から子どもたちが去っていくので、淋しいねえ……」

☆「子どものいる人が優先なので、しかたがないですよねえ」

とあきらめようとしていらっしゃる方もいました。

—避難所で仲良くなれた人たちが、ひと家族ずつ避難所を去ることによってまた離れ離れ。避難所に残る人の淋しさ、辛さをひしひしと感じました。避難所に残っていた兄弟も、何かを感じながら漫画を読んでいたことでしょう。

(2) 仮設住宅でのおしゃべりの中から

☆「津波の1ヶ月前に父親が死んで、まだ49日も済ませてないときに津波で……位牌もすべて流されてしまって……ただひとつ、車の中にあった父親のめがねを遺骨代わりにお墓に入れたんです……」

—お墓の中に入れるものがめがねしかないということの悔しさ、せつなさが伝わってきました。

☆「姉は避難所から出て義理のお母さんたちと生活を始めたのですが、急な生活の変化でストレスがたまり、体調を崩してしまったのです。仮設がやっと当たり引越しをして、少し元気になってきましたが……。もうひとつ、姉の家族は家を建てて5年。そのローンもかかえているので……仮設は2年の契約。この先どうなるか、心配している。」

「仮設といっても、大変なんです。姉が、昨日は隣の明かりが漏れて寝れなかったから、ガムテープをはった、と言ってました。」

—急な生活の変化から体調をくずし、さらに2年先の予想もつかない生活への不安。言葉になりませんでした。

☆小5の女の子のお母さん

「娘が、こんな怖いところにはもう住みたくないというんです。40年住み慣れた土地なんだけど……でも娘の気持ちを尊重したいし……新しい暮らしを探していこうと……」

—母親として揺れ動く心境。しかし前向きに新しい暮らしを探そうとしていらっしゃる姿に胸

がいっぱいになりました。

☆中1の男の子

「最初は運動場に避難したんだ。津波がくるっていうから、3階へ登ってみんな助かったんだ。1階の書類（学校の職員室）全部なくなったよ。自分の学校がなくなったから、授業も隣の中学に行くんだ。だけど、部活が（2つの中学）一緒なので、やっぱりにくいんだよな……」

一男の子の話から、子どもの命をあずかるときのとっさの判断が命を守る鍵となることを痛感しました。また、部活をする上でも、肩身の狭い思いでやっているんだらうなあ……身を寄せてもらっていることの苦勞を感じているのだなあと思いました。一日も早い学校の復旧を願うばかりでした。

☆小学生のお子さんのお母さん

「みんながこの町からいなくなるんです。」と淋しそうに語られました。

「海浜公園にもつれて行けず、かといって外で遊ぶということもできず、子どもたちもストレスがたまります。こうして学生さんが来てくださると、思いっきり走り回れるので、本当にありがたいです。」

一学生たちと遊ぶ子どもの楽しそうな声につられて、近所の子どもたちも顔を出してくれました。仮設に住む子どもと近所の子どもたちとが、楽しそうに駆け回ったり遊んだりする中で知り合っていく。そんな接着剤のような役割を果たすことができました。考えていなかったことでした。

☆仮設にある談話室

「いつもはこの部屋、使われていないんですよ。ボランティアの人が来てくださるとこの部屋が使ってほっとします。」

一にぎやかな学生たちの声につられて、そのあたりに子どもや大人が集まり輪が広がっていく。私たちが帰った後も、誰か来てほしいと願う気持ちがあふれてきました。

(3) ボランティアをするための宿泊施設として、保育園の2階にある子育て支援センターをかしてくださった、なかよし保育園の園長先生の話から……

☆この園は床上浸水の被害はあったけれど、翌日からは保育園を閉鎖し、職員は炊き出しと避難所における勤務となったんです。24時間体制で。最初のころは避難所の皆さんにおにぎり一人1個しかなくて……みなさんにとすると、小さなおにぎりしかにぎれず、せつなくてねえ。せめてもう少しでもいい、大きなおにぎりを作ってあげたいと思ったのですが……」と。

一1ヶ月たって、みんなで泥の撤去、清掃、消毒などし、やっと園が再開できたとのこと。そんな大変なことがあったとは思えないくらい、子どもたちも先生方も元気いっぱいの笑顔で過ごしていらっやいました。それだけでなく、ボランティアの私たちのことまでも心配してくださって……

シャワー室にこんな張り紙が……

「名古屋短大の皆さん、ボランティアご苦勞様です。シャワー室の排水が悪いので、その都度シャ

ポシャポしてくださいね。また足拭きマット（バスタオル）を何枚か用意したので濡れたら取り替えてくださいね。使用済みの足拭きマットはかごに入れておいてください。大変なボランティアですが、頑張ってください。」

一私たちこそ、保育園をお借りし大変お世話になっているにもかかわらず、こうして気兼ねなく使ってくださいと心をかけてくださることに感激いたしました。大変だった5ヶ月。そんな中で私たちを温かく迎えてくださることに感謝の気持ちでいっぱいでした。私たちこそ「本当にありがとうございます」の気持ちでした。学生たちと感激し、力をいただきました。

☆保育園の壁に貼ってあった全国からの励ましの言葉より

「大変だったね。ご無事でよかった。頑張りすぎないでね」

「ただ 今は祈りを 頑張らないで」

「息抜く力、生き抜く力」

「希望を胸に秘めて」

たけのこの絵を描いて「やっと掘ったようなたけのこです。災害にあってしまった人も、人生にとまどった人々も天を目指してのびよう のびよう」

保育室には、大きな字で「希望」と書かれた寄せ書きがはられていました。

☆学生たちが「はらぺこあおむし」を演じた翌日のこと

昨日欠席していた子に、朝一番女の子が掛け声を。

「きのうね、はらぺこあおむしみたよ。でもいつものとちがうよ。ちがうんだよ。うたつきなんだよ」と。よほどうれしかったのでしょうか。お休みしていた子に伝えたくて、一生懸命話していました。

こんなに喜んでくれてよかったね。

☆1年生のゼミの学生が、一生懸命つくってくれたペープサートや人形やエプロンシアターもなかよし保育園の園長先生にわたすことができました。すぐに子どもたちの前で使って演じてくださっていました。うちわや作品を通して参加していただいたことにも心から感謝です。

(4) 学生たちの生活の中から感激したこと

朝、起きるとすぐにシャワー室をきれいに整える人。汚れたらすぐに掃除をしようとする人。手が空いたら、すぐに食事の準備を手伝おうとする人。借りている部屋だからと丁寧に使おうとする人。こうしてみんなで気をつかいあって、なかよし保育園にできるだけ迷惑をかけまいとしていることがひしひしと伝わってきました。本当にうれしい姿でした。

ボランティア代表や副代表を中心に、念入りな打ち合わせや計画そして準備がなされたからこそと思います。学生たちの状況を捉えた行動力のすごさを見直しました。全力でこの活動に取り組んでくれたことに感謝です。

(5) 振り返って

石巻にいる間、毎日おきる地震。子どもたちも毎日こうした地震、地震情報に怖い思いをしているのかと胸が痛みました。

保存食は簡単にできて思っていたよりもおいしくいただけ、ありがたかったです。でもさすがに3日目ともなると・・・野津先生と私は・・・でも避難所の方々のことを思ったら、大きい声では言えません。小さい声で・・・

最後になってしまいましたが、このボランティア活動が実施できたのも、野津先生のお力によるものです。視察そして下見と、すべてのことを念入りに計画・準備し、現地との細かな打ち合わせがあったからこそと思います。野津先生の力なしでは実施できなかったことです。野津先生に心から感謝です。

また、大学のバスがお借りできたことや、準備や積み込みに力を貸してくださった皆様、募金を通して支援してくださった皆様に心から感謝です。ありがとうございました。

避難所や仮設住宅へ向かう途中で、津波の悲惨な状態を目の当たりにし、カメラのシャッターを押そうとするのですが、なかなか押せない自分がいました。旅行に行って景色をカメラに収めることとの違いを感じながら、「何のために」と問いかけながらのシャッターでした。

こうして活動を終えて思うことは、保育者になる学生たちに「子どもの命を託されていることの責任の重さ」「災害時における判断の大切さ」など、伝えていかなければならないことがいっぱいあります。「命を守るために何をなすべきか」これからの授業のなかに、大切に盛り込んでいきたいと強く思うようになりました。私自身のこれからの課題です。

子どもたちの声やエピソード

◎エピソード（犬飼麻菜）

（鬼ごっこの途中道に座って休憩しているとき、2階建ての家を指差して）

子ども「あのね、あの家よりずっと高い津波が来たんだよ。ぜんぶ流されちゃった。でもね、ランドセルだけ見つかったんだよ。」

◎エピソード（伊丹沙織）

泥んこ遊びをしている時、水が溜まっているのを見て友だちが「津波」の話をし始めました。

子ども「津波の話しちゃいけないんだよ、津波の話すると、本当に津波くるよ。」

—その言葉を聞いたとき、何て言葉を返したら良いのか分からずとても胸が痛みました。

◎RちゃんとHくん（波多野有紀）

有紀 「今日は私たちが持ってきたもので遊んでいるけど、いつもは何をして遊んでいるの？」

Rちゃん 「(まだこの頃は、少し私たちに対して人見知りしていた為か)・・・」

Hくん 「いつも死人ごっことかやってるよね！」

有紀 「そうなの？」

Rちゃん 「してないー！」

Hくん 「後は、DSとかかな。」

—HちゃんとRちゃんは親戚だが遠い所に住んでおり、こちらへ遊びに来て間もないと言っていた

ので、普段本当に死人ごっこをしているかは分かりませんが、死人ごっこという言葉は、やはり地震の影響から出て来ている言葉ではないかと思いました。

◎Kくん（立松万充子）

万充子 「(傘をさしていたK君の妹に) その傘可愛いね。」

Kくん 「僕は傘ない。全部流されましたー。」

◎エピソード（三浦由貴）

一活動2日目に仮設住宅に行って子どもたちと遊んでいると、公園のすぐ隣に住んでいる子ども（Yちゃん小1）がおばあちゃんと一緒に遊びに来ました。子どもたちが遊んでいる姿を見ながらおばあちゃんがお話を聞かせてくれました。

おばあちゃん 「地震の後は水が出てきて、この公園もあの柵くらいまで水につかってたんだよ。5日間は外にでられなくて、2階でずっといたんだよ。甥が胸まで水につかりながらきてくれたり、家から出るときはボートでこいでいったんだよ」

由 貴 「5日間ですか？それは大変でしたね・・・。」

おばあちゃん 「大変大変。しばらくしたらみんなで1階の水を掻きだして、それは大変でねえ。その間、Yちゃんはずっと2階で絵とか描いてたんだよ。Yちゃんは絵を描くのが好きだから。それがね、落ち着くとべったりで。」

由 貴 「Yちゃんがですか？」

おばあちゃん 「そうそう。それまではずっと1人でいても大丈夫だったのに、少し落ち着いたら急に離れなくなっちゃってね。」

由 貴 「そうだったんですか・・・。Yちゃんも大変な様子を見て我慢してたんですね」

おばあちゃん 「ほんとにね。1人で我慢させちゃってかわいそうだったよ。でもうちはまだ家があるからね。でも1階をきれいにするのも大変で。おかげで膝に水がたまっちゃってね。抜いてもらって歩けるようになったけど」

由 貴 「大変でしたね。でも、歩けるようになってきて、よかったですね」

おばあちゃん 「ほんと、よかったですよお」

一Yちゃんと一緒に遊びはじめてから、工作を楽しんでくれたり、絵を描いたり、笑顔で楽しんでくれている様子でした。そのような中でこのおばあちゃんのお話を聞いて、子どもたちが地震や津波から怖さや不安を感じると同時に、周りの様子も敏感に察知して自分の怖い思いをぐっとこらえていることもあるのだと感じさせられました。地震からもうすぐ5ヶ月がたちます。食事や物資の面は行き届いてきている中で、住宅や仕事などに加えて、安心できる場所、本音が出せる場所や時が必要になってきているのではないかと感じました。

◎子どもの声：5歳の男の子（近藤奈央）

奈 央 「この中から好きなうちわ持ってっていいよ！」

子ども 「お兄ちゃんの分もいい？」

奈 央 「うん！家族みんなの分いいよ」

子ども 「…うーん。みんないない～」
奈央 「え？」
子ども 「うちわ…う～ん。いい～」
奈央 「そっかあ。また明日も来るから欲しくなったら持ってっていいからね！暑いからね！」

—子どもと二人で外で遊んで、少したってから…

子ども 「やっぱり～いる～」
奈央 「うちわかな？」
子ども 「うん…」
私 「好きなを選んでいいよ！」
子ども 「あのね～お父さんいないからね～、4枚いい～？」
奈央 「全然いいよ！どのうちわがいいかな？」
子ども 「(うちわ選びながら)あのね～お父さん津波でざぶんってお星さまになっちゃったの～だからうちわいらないよ」
奈央 「そうなんだあ。お姉さんに色々お話してくれてありがとうね。」
子ども 「うん！お母さんは猫好きだからこれ！お兄のはこれで…」

◎なかよし保育園3歳児Nちゃん(田中晴子)

Nちゃん 「おねえさん地震速報の曲知ってる？」
私 「知ってるよ、あの音怖いよね。」
Nちゃん 「うん、怖い、あれが鳴るとね、グラグラってなってね、危ないからね、Nちゃん隠れてじっとするの」

◎仮設住宅の若いお母さんの話(若林幸歩)

お母さん 「当時3ヶ月だったS君と一緒に車に乗っていて、車ごと津波にのまれ、流されてしまいました。運よくどこかの住宅に突っ込んで、そこからは流されずに済んだけど、そのまま車は水の中に沈んでいきました。私は気を失ってしまったのですが、Sの泣き声で気が付き、救助を待つことができました」

—話を聞いた印象では、やっぱりすぐには救助がこなかった(1日後とか?)ようでした。

お母さん 「Sが助けてくれた。」「きっと(地震で)亡くなったおばあちゃんが守ってくれたんだね。」

—(お母さんの話を聴いているとき)まわりにいた子どもたち

女の子 「〇〇(名前)もね、おばあちゃん死んじゃった。だから今日お墓参り行ったの。」
男の子 「おれのおじいちゃんね、まだ行方不明なの。」
幸歩 「昨日の花火見た？」
女の子 「見たよ。前のお家では見れたけど、今(仮設住宅)は見れないと思ったけどね、ママが教えてくれて見れた」と答えてくれました。

◎Tくん（渡辺里佳）

一男の子2人、女の子3人くらいでトンネルを掘って遊んでいるとき、小学5年生のTくんが水を入れてあふれた様子を見ていたときです。

Tくん 「津波だ！津波見たことある？オレ、遊んでいるとき、後ろに津波が来てた。」

里 佳 「テレビで見たことはあるよ。」

Tくん 「オレは、本物を見たことがある。」

里 佳 「そうなんだー。怖かったね。」

Tくん 「テレビで人が流れているのを見た。」

次の日も、「津波見たことある？」と口にしていました。

Tくん 「明日来る？何時に来る？絶対来る？」と、何回も念を押されました。

里 佳 「来るよ。大丈夫だよ。」

Tくん 「あの世だけは、絶対に行くんでねーべ。」

Tくんは、家族で亡くなった人はいなかったのですが、不安な様子が見て取れました。

3日目。私たちが乗ったマイクロバスが来たら近寄ってくれて、「穴ほるべ」と誘ってくれました。ほかの子にシャボン玉などを渡していたら、「はやくやるべ。」と言っていました。今日も水があふれたら、昨日と同じことを言っていて、不安を取り除こうとしているのかなと思いました。

Tくん 「りかは、保育士なれねーべ。」

里 佳 「どうして？」

Tくん 「だって、オレ一人残して、帰って行ったべ。片付け一人でした。そんなやつは保育士なれねーべ。」里佳「ごめんね。バスのお迎えが来ちゃったから。」

一Tくんは、私が謝っても受け入れてくれませんでした。Tくんは、最後まで一緒に遊びたかった、片づけしたかったのかなと思いました。遊びの中でも友だちが増えると、「たくさんいると楽しいな。」と、一人や少数で遊ぶよりもみんなで遊ぶことが好きな子でした。

◎南境でのエピソード1：犬飼麻菜

おじいさん：(子どもたちが遊んでいる様子を窓から覗いて見て)なーんもすることがなくて退屈だけど、子どもの声がするといいなあ。

私： 子どもたちみんなすごく元気ですね。

おじいさん：ああ、孫がふえたようだよ。ここにいると本当にやることがないからなあ。

私： そうなんですね、よろしかったらおじいちゃんも一緒にどうですか？

おじいさん：いやいや、わしはもう年だから。

私： じゃあ、またちょっとだけでも顔だしてくださいね！そういえば、私今日高いところからこの街の景色見てきたんですけど、自然がいっぱいすごくいいところですね。

おじいさん：そうだな。ほんとにいいところなんだ。でも、前はもっと綺麗だったんだよ。全部流されたからなあ。こんなことになってな。わしはもう先が短いけど、あの子たちは大変だなあ。大変な思いをいっぱいするんだろうなあ。全部流されたけどな、子

どもたちはこの街の希望だ。この子どもたちはこうやって遊んでもらえて幸せだなあ。

◎南境でのエピソード2：関綾乃

一子どもが、携帯で音楽を聴いていた時に、その隣りにいた小学生の女の子が話してくれたことです。

子ども： 大きな音で聴いてると、お母さんに怒られるんだよ。

私： どうして怒られるの？

子ども： だって、仮設は壁薄いから。〇〇（名前）の部屋は、端っこだから隣りに聴こえちゃうの。前は、カラオケよく行ってたけど、震災後行ってない。

私： そうなんだ。誰と行ってたの？

子ども： 家族だよ。でも、カラオケ屋さんは、津波で流されちゃったんだよ。



通路は支援物資でいっぱい



到着後の大橋先生の体験談



川開きに行きました



非常食の昼食



なかよし保育園の子どもたち



蛇田小学校の子どもたち



仮設住宅の子どもたち



1回で終わらせられない



疲れるとどこでも寝ます

幸せに生きる大人像を思い描いた、 3歳未満児保育

いなべひまわり保育園

近藤直樹（園長） 若林則子（主任）
渡邊道子（2歳児クラス担任） 石塚真以（1歳児クラス担任）
伊藤 茜（1歳児クラス担任） 川島 恵（0歳児クラス担任）

【1】 いなべひまわり保育園のご紹介

2008年4月に、三重県のいなべ市にて、“6か月～3歳児”対象の30名定員の保育園として開園しました（2009年からは、6か月～2歳児までに対象年齢を変更）。

私たちは、成長が最も著しい3歳未満児期の子どもたちの発達に最も良い環境、関わりを提供するために、日々切磋琢磨しながらも、私たち保育士も「楽しい」と感じられることを大切に子どもとかわっています。

【2】 いなべひまわり保育園での子どもの成長の道筋とねらい

（1）私たちが考える保育（目指す子どもの姿）

私たちは、子どもの幸せを考える時、今だけでなく、大人になった時も、「めいっぱい幸せを感じ、楽しく生きてもらいたい」と願っています。

そのために、私たちが、子どもたちにまず育みたいのは「感受性豊かな心（気持ち）」を持つこと。そして、その心（気持ち）を土台にして「自分の気持ちに素直になって生きる姿勢」と「自分で考え、自分で判断し、自分で行動できる習慣」を育みたいと思っています。

また、子どもの真似をする力は大変強いものがあります。その対象である私たち自身も、常にそうあるよう心がけています。

（2）子どもの成長と私たちの関わり

私たちは、0～3歳児の保育、ということで、まず「愛着」を大切にして関わっています。特定の大人とのしっかりとした信頼関係ができた園での生活は、“心の安全基地”という大きな安心感を土台として、個々それぞれの気持ちや発達段階から出てくる素直な興味・欲求により、様々な体験をすることになります。

私たちの保育では、こうした素直な興味・欲求による経験が、個々それぞれの発達に沿った育みにつながるとともに、「自分の気持ちに素直になって生きる姿勢」と「自分で考え、判断し、行動できる習慣」を育むことにつながると考え、「見守り」「共感する」「否定しない」関わりを

大切にしています。

園での子どもたちは、欲しい物は欲しい、嫌だったら嫌だった、悲しい時は悲しむ、というように、素直にその気持ちを表現します。

そしてその中で、子どもの興味が、「欲しい！」という欲求につながり、その欲求が「したい！」という意欲につながり、そしてその意欲が、「自分で～したい！」という主体性の育みへとつながっていきます。

また、こうした育みの中では、人と関わったとき、「良い」経験も、「嫌な」経験も含んだ“丸ごとの経験”をし、“丸ごとの人”というものを体験的に理解することにもなります。

そして、周囲の豊かな自然の中、毎日のお散歩や、焼き芋、さんま焼きなどの行事を通じて自然を感じて育っていきます。

こうして、子どもたちは、心で「人」や「自然」を感じ、頭も体も全部使って生活し、生きる土台となる、感受性豊かな「気持ち」の発達をしていくのです。

【3】子どもの発達の捉え方

(1) 成長の種は子どもの中にある

子どもの成長・発達において、私たちは、“大人が教えなければ子どもはわからない”という考え方ではなく、“成長の種は子どもの中にある”ということを基本概念に置いています。

それは、もともと発達の種は子どもの中にあるのだから、極力その邪魔をすることなく、その土壌を豊かにし、健やかに芽を出し、成長していけるような環境づくりをしようという考え方に繋がっていきます。

そしてそこから、“自ら成長しようとする力を見守り、育む姿勢”や、“目の前の子どもが自ら何を育もうとしているか”を考える保育実践につながっていきます。

(2) 十分に経験することで、次の発達段階へ、健全に移っていく事ができる

子どもの発達段階を経て成長していく過程においては、「今の発達段階の経験を十分にすることで、自然に次の発達のステージへと移っていける」と考え、まず、目の前の子どもの活動を肯定的に捉え、見守ります。

例えば、「遊び食べ」、「物を出したり、入れたりする活動」なども、見通しを持って適宜関わりながら、できる限り十分に経験できるように配慮しています。

(3) 子どもの気持ち、特に「～したい」という子どもの意欲が発達の要

私たちは、発達の原点は、愛着や、「～したい」という意欲などを含めた“気持ち”にあると考えており、子どもと関わる時は、常に子どもの気持ちを最優先に考えています。

【4】いなべひまわり保育園の保育体制

(1) 緩やかな異年齢保育

私たちの保育室は、緩やかな異年齢保育の実践を目的に、基本的にはオープンスペースとなっています。平成23年4月1日現在は、各年齢1クラスずつの3クラスがあり、クラスごとに所定の場所が決まっていますが、その区切りは、高さ120cmほどのロッカーや間仕切りで仕切っ

ています。

そして、園での活動は、大まかにクラスごとでまとまりはするのですが、クラスごとの部屋の入口にドアはなく、基本的に入出入り自由、行動も自由、など多くの機会子どもが自分で選択できる環境となっています。

そのねらいは、以下の四点です。

1) 保育士間の連携と、子どもが落ち着ける空間づくり

間仕切りの高さが120cmほどの理由は、大人（保育士）が互いの位置を目視で確認でき、死角となるところに、保育士が居るかどうかなを確認したり、声掛けがしやすくなるなど、クラス間を越えた、保育士どうしの連携をはかることです。

またその一方で、子どもの目線から見ると、高さ120cmほどの間仕切りは壁となり、落ち着く空間を作り出すことができます。

2) コミュニケーション

異年齢の交流は、多様なコミュニケーションの経験となります。

3) 発達の保障

年齢の高い子どもが、年齢の低い子どもの活動に入ることで、経験が少なかったかもしれない活動をもう一度経験することができます。

子どもの発達の中で、子どもが興味を惹かれること、楽しいと思うことなど、無意識に求めるものの背景には発達要求があり、その子どもの発達にとっては、その経験が必要かもしれない、と第一感として考えることを大切にしています。

その日の活動を「子ども自身が決める」ことができる環境は、意欲や主体性をその子どもに育むことをねらいとしています。

4) 真似をする⇒主体性の育み

年齢の高い子のすることを、年齢が低い子たちが、日常の中で何気なく見ることで、自然に真似ていきます。

そのことで、自らの発達に応じた行動を誘発するとともに、大人がさせるという受け身な習慣ではなく、「自ら行動する」主体性を育むことをねらいとしています。

(2) 担当制

私たちは、特定の保育士が、特定の園児を担当する、担当制をとっています（一人の保育士が担当する子どもの数は年齢に依ります）。その主なねらいは、0～3歳の子どもの発達にとって必要不可欠な「愛着」をつけ、「見守る保育」を実践することです。

(3) 週に1回の会議の実施 ～一人ひとりの発達に合わせた保育の実現に向けて～

子どもたちの発達をしっかりと把握するため、毎週、研修会や会議を実施しています。中でも、子ども一人ひとりの姿を確認するため、月1回、クラスごとに行う「月案の反省会」は、子どもの発達を把握し、その発達課題に適応した保育を実施していくことの要となっています。

その会議では、担当の保育士が、一人ひとりの子どもへの関わりや姿を報告し、その関わりが

良かったのか、どう関われば良いのかを主任補助、主任、園長とクラス全員の保育士で検討する会議となっています。

(※子どもへの関わりを考える際に気をつけていること)

子どもの発達に関して私たちは、発達の順序は決して変わらないけれど、それぞれの発達段階での経験の多さや希薄さ、子どもの個性などで、その進度が、子どもそれぞれで、異なってくると考えています。

こうした考えを踏まえ、以下三点に配慮し、子どもの関わりを考えています。

- 1) 発達の道筋を踏まえる
- 2) 『担当している子どもがどう育ってきたか』という背景や『その場面での子どもの気持ち』を知る。
- 3) 当園で大切にしている「育みたい子どもの力」と「子どもとの関わりで、保育士が心がけていること」を考慮する（詳細は後述）。

【5】私たちが育みたい子どもの力

- (1) 「人や社会への信頼感」
- (2) 「意欲」
- (3) 「自己肯定感」
- (4) 「主体性」
- (5) 「自己表現（気持ちの表現）」

(※「自己表現（気持ちの表現）」について)

私たちは、欲しいと思ったものは、欲しい、いやだと思ったものはいやだ、と自分の気持ちを素直に表現する力を、育みたいと思っています。

そのために、子どもの素直な行動、表現は、どんなものであれ、認め、共感していきます。「駄々こね」「だこね」などの姿は、要求を叶えるか否かは別として、周囲を信頼し、自分の気持ちを力いっぱい表現できている姿として、大変好ましい姿と捉えています。

【6】子どもとの関わりで、保育士が心がけていること

(1) 『欲求充足』

意欲・主体性を育むために、子どもの欲求には、できる限りタイミング良く心地良く満たしていきます。

(2) 『“気持ち”の全面受容』（共感する・認める）

私たちは、共感することは、愛情が最も伝わる行為と考えています。また、「気持ちを分かってもらえた」という経験は、人を信頼すること、自分を肯定する気持ちにつながることから、最も大切にしている関わりの一つです。そして、特定の大人がともに生活をしていく中で、繰り返し欲求を満たしたり、気持ちを共感したり、認めることで“愛着”を培うことを大切にしています。

(3) 『大人が姿を見せる』

子どもの持つ“真似る力”を引き出し、主体性を育みながら、様々なことができるようになる

事をねらいとしています。

(4)『見守り』

私たちは、「見守り」を、放任ではなく、「子どもを育むねらいを持ちながら、関わる時はしっかり関わり、いざという時には手を差し伸べられる、子どもとの関わり」と考えています。

経験を通して「心と体を通して知っていく」こと、「自ら気づいていく」こと、「自分で～する」という主体性、などを育むことをねらいとしています。

(5)『否定しない』

“自己肯定感”を育むため、伸びやかな子どもを育むため、決して「ダメ」と言わない工夫をして関わっています。

【7】食事で大切にしていること

(1)「よく噛むこと」

私たちは『脳への刺激』、『よく噛む習慣づくり』、『唾液による殺菌効果』ほか、“意欲”と“集中力”にも大きな影響があると考えられることや、顎の上下運動が、舌の動きや咀嚼運動への動きにつながることから、『よく噛むこと』を、とても大切にしています。

例えば、0歳の食事の場面では、取り皿を一つ用意し、口の中のものがなくなってから、次の食材を一つずつ取り皿に入れ、つめこみ食べをすることを避けています。

また、離乳食初期では、大人がスプーンで食べさせることになりますが、子どもがスプーンを口の中に入れた際、大人がスプーンを引くのではなく、子どもが上唇と下唇を使って、自分の口の中に取り込むことをねらいとして、「んぐっ」と子ども自らスプーンから口を離すのを待ちます。

また、園では、噛みごたえのある食材を選ぶ、素材を大ぶりにする、など食材の工夫をしたり、「かみかみね」と声をかけながら、大人が噛む姿を見せていくなどの工夫をしています。

(2)手づかみ食べ

以下の理由で、食事時の“手づかみ食べ”を大切にしています。

1) 豊かな心を育む

「皮膚感覚は、心に大きな影響を与える」と考えています。手づかみ食べは、“食べる”という生き物にとって最も大切な営みの際、五感で食べ物を感じることができます。

2) 食べる意欲の育み

手でつかみ、肌で感触を味わって食べていると、今度は、触った感触から、食欲を喚起する効果も期待できるようになってきます。

園では、手で食べる姿を肯定的に見守り、離乳食、特に後期食の野菜は、手でつかみやすく、かつ噛み取りができるように、6～8センチのスティック状に切っておくなどの配慮をしています。

(3)食べる意欲・主体性

私たちは、食欲、つまり食べる意欲は、他の意欲に影響を与える大切な意欲だと考えています。ですので、大人が食べさせたり、これを食べなさい、という関わりは行わず、自ら食べる姿を「お

いしいね」と共感しながら見守り、食べる意欲を育みます。

大人に「食べさせられる」のではなく、自らが「食べる」ことは、「食べたい」という自分の欲求に沿って自らが主体的に関わっていく経験となり、活動全体の主体性を育むことができます。

また、離乳食初期の子どもにも、できる限り意欲、主体性を育むために、スプーンで食べさせる際、スプーンを口元でとめ、子どもが自ら口を近づけるまで待ちます。

また、0歳クラスは、取り皿に、食べるものを一つずつ大人が入れていき、子どもがそれを手に取って、一つずつ食べる、という食べ方をするのですが、その際も、手差し、指さしなど「これが食べたい」という子ども自身の意思表示を待ちます。

(4) 楽しく食べる

当園では、以下、二つの理由で、食事において、大人も子どもも「楽しく食べる」ことを大切にしています。

1) 摂食機能の発達

食事時の大人（保育士）と子どもとの相互関係や「情動・心理的影響」が、子どもの摂食機能の発達に大きな影響があると考えています。（例えば、健常児では嫌いな食物を無理に食べさせることはかえって偏食を助長することがあり、さらに食事をいやいや食べることは消化管からの栄養吸収に影響を与え、摂取量は十分取れていても体内には十分な栄養が入っていないと言われています。）

2) 仲間づくり

食事をするときは、心が緩むとき。そして、本当に自分が大好きなおいしい物を食べる時は、至福の時。子どもたちは、この世に生れ出てまだ間もないことを考えると、口にするもの全て新鮮で、感動の連続のはず。そんな気持ちで食べれば、自然と気持ちも緩んでくるもの。「ともに釜の飯を食う仲」ではないですが、一緒においしいものを食べた仲間は、より心をゆるし、仲良くなっていくと考え、食事時の友だち同士の会話、関わりも大切にしています。

(5) 素材にこだわる

0歳～3歳までは、味覚の基礎が培われる時期、ということで、設立当初より、「自然・本物・手作り」にこだわっています。

当園の給食は、調味料は全て無添加の物を使い、野菜においても、徐々に無農薬野菜の仕入れ数を増やし、子どもの味覚の基礎に「自然・本物」を培うことを目指しています。

(6) 一人ひとりの発達に合わせて、食事を考える

先に述べた「0歳の月案の反省会」には、栄養士も出席し、子どもの噛んで食べるなどの姿や、食材、調理の仕方などを細かく確認します。「良く噛むことや咀嚼運動」に課題がある子どもであれば、離乳食・完了期だった子どもでも中期食に戻して、噛む習慣や咀嚼運動につながる動きの習慣づけをするなど、一人ひとりの発達の課題に合わせて、保育士の関わりだけではなく、保育園全体で関わっていきます。

【8】実践報告

(1-1) 0歳児クラス：クラスの取り組み

「気持ち」を中心においた子どもとの関わり

0歳は、自己肯定感、愛着や欲求、生活のリズム、意欲など、未満児保育の中でも、発達の基礎となる大変大切な時期。それぞれの育みを意識しながら、「子どもの気持ち」を保育の中心に置いて子どもと関った。

1) 具体的な関わり

- ①子どもの表情、しぐさ、目線で子どもの気持ちをくみとり、共感することを大切にした。
- ②活動の中では「一緒に」ということを大切にした。一緒に感じ、一緒に活動し、寄り添うような関わりを心がけた。
- ③欲求・思いは必ず、言葉に換えて、丁寧に応えた。
- ④子どもが泣くことを大事な自己表現だと肯定的にうけとめ、丁寧に応え、共感した。

2) 「課題を持った子どもへの関わり」の紹介（課題別に記す）

- ①あまり泣かない、感情の表現が育っていない、目と目が合いにくい子どもへの関わり
 - i) 子どもの様子をよく見て、子どもの気持ちの微細な変化に共感していった。
 - ii) 子どもの欲求が出たときには、タイミングよく心地よく対応するよう心がけた。
 - iii) あやし遊びやわらべ歌など、肌と肌の触れ合いや、気持ちのやりとりができる活動を大切にした。
 - iv) おむつ交換なども含め、できる限り、活動の中で目と目をあわせて楽しむことを大切にた。

②歩行が不安定

斜面のぼりやマット山のぼり、築山などを積極的に遊びにとりいれたり、園外保育では田んぼやあぜ道など、でこぼこした不安定な道を歩いたり、土手のぼりをしたり、保育士も一緒にハイハイをして楽しむようにした。

③不安でよく泣く子ども

不安な気持ちで泣いたり、抱っこを求めたことに対して、タイミングよく心地よく応えるように心がけた。

3) 事例

ホールの滑り台で保育士と遊ぶ。

歩行もまだまだ不安定なためできるだけ、足の指の蹴りをつかって、はいはいができるように、滑り台を本児と一緒にのぼったり、すべったりして遊ぶ。

保育士と一緒に登るとうれしそうに保育士や友だちと笑いあったりする。何回かのぼったり、すべったりして遊ぶが突然泣き出す。

「抱っこがしてほしかったの？」と本児を抱きしめ、「大丈夫だよ」「おなかがすいてきたんだね」等、本児がなぜ泣いているのかを問いかけながら、ゆったりと気持ちを聞き、安心できるようにした。

4) 子どもの変化・成長

愛着関係が付き始めた当初は、担当の保育士と離れるだけで泣いてその場から動けなくなっていたのだが、しっかりとした信頼関係ができあがると、保育士から離れて自分の興味のあるものや場所にむかっていくようになり、友だちと笑いあったり、とりあいもしながら、子ども自身が世界をひろげる姿が見られるようになった。

目と目が合わず、表情の変化も少なかった子どもが、ゆったりとおむつ交換ができ、触れ合い遊びなどでともに笑えるようになった。生活の場面全般で、目と目をあわせて笑いあえるようになり、最近では「僕ここにいるよ。みててね、などと目と目で会話できるようになった。

(1-2) 0歳児クラス：個別事例 F君〔2011.8 入所〕

1) 入園当初の姿

入園当初（8月下旬）は、人見知りが全くなく、登園後、母と別れるときも泣くこともなく、どの保育士が抱っこをしても泣くことがなかった。また、入園後1週間ほど笑顔を見せず、感情表現も乏しい印象を受けた。

遊びに関しては、あまり表情に変化はなかったが、どの場所にも興味があり、自分の行きたい場所へ行って遊んでいた。

食事は、家で親にスプーンで食べさせられていたため、園では、いすにすわった後、スプーンで食べさせてもらうのを待っていた。果物は、口に入れると吐き出したり、口を閉ざして嫌がったりしていた。

睡眠に関しては、眠いときはいつでも眠っていた。おんぶでも抱っこでも眠ることができた。

2) 子どもの課題

母との愛着が弱く、表情も乏しい。また、食事全般で、咀嚼が弱く、飲み込みが苦手である。それに加え、自分で食べようとする意欲が弱い。

3) 保育士の関わり

日常の活動では、担当保育士と愛着をつけることを最も大切にした。食事では、自分で食べようとする意欲と、咀嚼の力をつけるよう心掛けた。

①「愛着」

具体的には、担当保育士の姿が見えなくなっても、泣いたり、探したりすることがなかったため、“○○くん、おはよう”の声掛けや、「いつも近くにいるよ」という思いを伝えようと、“○○して遊んでたの？”“一緒に○○しようか？”などと、声を掛けながら関わるようになってきた。また本児の欲求充足も大切にし、遊びたい場所へ一緒に行き、一緒に遊んだりしながら関わってきた。歌も興味があるため、ふれ合い遊びや、わらべうた遊びも取り入れ

た。

②「食事」(咀嚼のはぐくみ)

食事は、保育園の生活に慣れるまでは、担当保育士が食べさせる形をとっていたが、慣れてからは、担当保育士が手づかみで食べる様子を見せたり、他児の姿を見る事で、手づかみ食べをするようになった。

果物は、口に入れると吐き出すからという理由で、母がミキサーにかけ、ジュースにして飲ませていたこともあり、特に柔らかいバナナも噛みとって食べるができなかった。

担当保育士は“バナナだよ”などと食べ物の名前を言いながら一口ずつ口に入れ、食感を味わえるようにした。

③睡眠

おんぶやだっこで本児が安心して眠れるように配慮した。

4) 子どもの変化・成長

入園して、2か月半くらいで、母や担当保育士に抱っこを求めたり、泣いてそばにいて欲しい気持ちを出すようになった。担当保育士の姿が見えなくなると、泣くようになる。

更に1か月ほどすると、朝、母の抱っこから降ろされると泣くようになり、担当保育士を泣きながら追いかけてきたり、抱っこを求めたりするようになった。母も“手がかからなくて楽だった”と言っていたが、今まで出さなかった思いを1才4か月で出せるようになったことを母と共感し合った。果物も自分から口へ入れるようになる。果物のほとんどをかみ出したが、バナナだけは、自分で食べ、完食するようになった。睡眠は、布団に降ろすと、20～30分で起きてしまうが、抱っこやおんぶをしていると、1時間以上眠っている。密着していることで、安心して眠れるようである。

5) 考察

子どもが“手がかからない”ような、比較的大人しい場合は、子どもの発達を改めて捉えなおすことが大切だと実感した。そして、子どもが欲求を出したり、泣いたりする表現を、肯定的に捉えられるよう、保護者と一緒に成長・変化を喜んだり、保護者と連携して子育てしていくことを心がけることも大切だと思った。

また、食事での関わりもそうだが、多くの場面で、子どもの真似をする力を引き出したりするなど、時間を要しても、子どもが主体性を持って成長していけるような関わりを、日々重ねていくことが大切な関わりだと改めて思った。

そして、担当の保育士との愛着がついてくるのをきっかけにして、母親とも愛着がついてくる姿をみると、発達の種は子どもの中にあり、その種が一旦発芽すると、芽を伸ばし、発達の道筋をたどっていくことができるのだ、そして、その環境、土壌を作ることが大切なのだ、改めて感じた。

(2-1) 1歳児クラス：クラスの取り組み

食と意欲のつながり

1) 1歳児クラスでの子どもの姿

1歳児クラスでは入園当初、ほとんど泣かない子、食への意欲が薄い子、食材を噛み取れず、丸のみやかみだしをする子、咀嚼の弱い子の姿が気になった。まずは保育士との愛着関係を築き、子どもたちが安心できる環境のもとで楽しく食事ができるようにと心がけていくことにした。

また、子どもの気持ちに寄り添い、要求をひとつひとつ受け止め、共感していくことを前提としながら、そのような子どもたちの課題を考えたときにもっと自分を表現し意欲的な子になってほしいという願いのもと、会議等で以下のような関わりを大切にしていくことにした。

2) クラスで大切にしてきた保育士の関わり

- ①保育士との関係を深めるためにスキンシップを多くもち、わらべうたあそび、ふれあいあそびをとおして、体に触れ、気持ちを解放するようにする。
- ②足腰の力、背筋力、腹筋力をつけるために、さくらんぼリズム運動や功技台・滑り台をとりいれ、保育士と楽しみながらハイハイやたかばい、ずりばいをしたり、全身をつかって遊ぶ機会を増やしていく。
- ③食事場面では子どものありのままの姿を受け止め、「おいしいね」「もぐもぐだね」などと大人が食べる姿を根気強く見せたり、食事以外の場面でも探索活動を十分にし、子どもたちの「ここにいきたい」「これがやりたい」という欲求を満たし、寄り添いながら、共感していく。
- ④園外保育に出かけ、田んぼのあぜ道や、神社の砂利道を歩いたり、坂道、階段などを登ったり、降りたり体を使って遊ぶことや四季折々の自然の中での発見や生き物とのふれあいを友だちや保育士と楽しむ。
- ⑤じゃがいも掘り、さんま焼き、焼き芋などをとおして、食材に直接触れたり、興味を持ち、体験していくことで食べることへの興味を広げていく。

(2-2) 1歳児クラス：個別事例 D君〔2010.10 入所〕

1) 8月の子どもの姿

(夏のプール遊び)

全身に水を浴びることに少し抵抗があったが、たらいや洗面器に張った水には興味をもっていた。ある日、友だちや保育士が入っているのを見て、プールの傍まで自分で来る姿が見られた。そこで、まずは水の楽しさを体で感じてほしいと思い、水を体にかけたり、水しぶきを顔で感じたり、たらいに張った水に浸かってみることからはじめた。

すると徐々にからだで感じることを楽しみはじめる。

またある日、皆がいなくなったプールに「入ってみる？」と保育士が声をかけると本見からプールに入る姿が見られた。プールのなかでハイハイをしたり、座りこんで水を触ったり、

保育士と目があうと"みてみて～僕、入ったよ。楽しいよ"とばかりに、にこにこ笑っている本児の姿があった。

このことをきっかけに自らプールに入って楽しむようになる。

プール遊びでの姿から活動量が増えてきて、意欲的になり本児が自信を持ってきたことをきっかけに周りへの興味も出始める。友だちのしていることに興味をもって、真似をしようとする姿も出てきた。

2) 11月の姿(本児の子ども同士のかかわりの変化①)

友だちへの興味が深まると共に自分の気持ちも強くなり、玩具や絵本の取り合いがよく見られるようになる。以前は取られると泣くだけだったが「いやーっ」と取られまいと怒りながら踏ん張る姿がある。

それでも取られると泣いてひっくり返ったり担当保育士を泣きながら探しにくる。

保育士が「とられたら嫌やったなあ」「くやしいなあ」とぎゅっと抱きしめながら本児の気持ちをうけとめることで落ち着き、気持ちを立て直していく。

☆友だちとのかかわりが増え、大人との信頼関係のもと「いやいや」が出てくるようになり、だだこねも見られ始める。また遊びの場面でもいろんなことに挑戦しようとする姿が出てきて、自分の意思で動くことが多くなる。このころから食事への意欲がでてきて全く興味を示さなかった野菜を指差したり、友だちの食べているのを見て食べる姿がみられてきた。またスイカ割り、焼き野菜、さんま焼きなどその季節の旬の食材を手にとり、その場で調理して食べることで本児の「食べたい、という食への意欲がたかまってきた。

3) 12月の姿(本児の子ども同士のかかわりの変化②)

(焼き芋の場面)

園庭での焼き芋に興味を示す本児。

芋を洗っていると「自分でやる、と意欲的。新聞紙、アルミホイルで芋を包んだり、火のなかに芋を入れようとしたりする。

自分で包んだ芋が焼けるのを心待ちにしている様子。

焼けた芋を皆で分け合って食べ、満足そうだった。そんな体験が子どものなかに残っており、給食のさつまい汁のなかに芋が入っているのを見つけると「あっ！いもっいもっ」とうれしそうに食べたり、友だちや保育士と「いもだね」「おいしいね」と喜びを共有する姿が見られる。

4) 考察

①活動量や意欲、友だちへの興味が出てくることで食への意欲も出てくるようになり、単に食事場面を捉えての課題ではなくその子自身の遊び・意欲・身体運動がどうなのかを考え、生活全体でかかわっていくことの大切さを学んだ。

②食事に興味がなかったり、食べる量が少なかったりすると、「何で食べてくれないんだろう」と悩み、あせる気持ちが保育士のなかにあり、「食べる」「食べない」ということを第一に考え

てしまっていたことに気がついた。

大切にしたいのは「いっぱい食べる」「何でもたべる」よりも「楽しい食事、子どもが満たされる食事」だと気づき、子どものどんな姿も素直に受け止めようと思うようになった。

子どもが一口かじっただけでも「おいしいね」「にんじんだね」と事実を認める声掛けやおいしいを共感する言葉を何よりも大切にし、子どもがお腹も気持ちも満たされるようにしたいと感じる。

(2-3) 1歳児クラス：個別事例 E君〔2011.4 入所〕

1) 入園当初

①姿

緊張のためか、身体が硬直し、触られると震えていた。

会話のやりとりはできるが、比較的理解力が弱いと思われる場面が見受けられる。言葉もあまり話さず、片言で話すのも難しかった。

②活動

あまり遊ぶ姿はなく、保育士や友だちが遊ぶところを見ているだけだったり、部屋へ入ることを嫌がり、保育士におんぶを求め、1日中おんぶで過ごしたり、外で過ごすことが多かった。

③食事

当初、おんぶから全く降りることができなかつたため、給食もおんぶをされながら食べていた。ごはん粒が手につくのが嫌でおにぎりにしていたが、大きいものはかみとれず、つめ込んでいた。果物は家庭で出ないこともあり、全く口にせず、牛乳もあまり飲まなかつた。

2) 保育士の関わり

①活動

- i) 担当保育士や友だちと、自然の中で、また、さんま焼き、野菜の収穫、さつま芋掘り、やき芋などの行事を通して、ともに楽しい体験をして心がほぐれるように心がけた。
- ii) 興味・関心が向くことに一緒になって取り組み、悲しい気持ちや楽しい気持ち、うれしい気持ちなど、色々な気持ちを担当保育士と共に十分感じられるように配慮した。
- iii) 悲しいことがあって、求めてきたらぎゅっと抱きしめ「悲しかったね。」嬉しいことがあって、こちらを見てきたら「嬉しいね」と声をかけるなど、子どもが求めてきたり、反応を期待したことは、全て受けとめ、子どもとその場の気持ちを共感できるように、1つ1つ言葉と行動にして応え、伝えてきた。
- iv) 身体が緊張気味だったので、触れ合いあそびを入れたりして、身体に触れることをできるだけ遊びの中に取り入れられるよう配慮した。

②食事

“食事は楽しい”という事を言葉や表情、態度で示したり、胡瓜なら胡瓜の味、人参は人参の味、など食材と味を覚えて欲しいという願いから、食事中に1つ1つの食材を見て、言葉にして伝えるよう配慮してきた。

3) 子どもの変化・成長～7・8月頃（3・4か月後）～

①活動

おんぶや抱っこで過ごす姿はなくなり、友だちとの関わりもできるようになっていたが、友だちとのやりとりの中で嫌なことがあると逃げたり、笑ってごまかすなど、自分の気持ちを素直に出して関わっていくことはまだできていない。

夏の水遊びには、参加して欲しかったのだが、水や泥が苦手なため遠くで見ているだけだった。しかし、遊びの中で変化があり、模倣あそびをよくするようになった。大人の言葉を繰り返す姿が見られ、他の関わりなどからは、本児の理解力が高まったように感じた。

入園当初にあった身体の緊張は、まだ残っており、着脱の時や、友だちとの関わりで困った時に体が硬直したり、震えていた。しかし、入園当初よりも収まっていたので、やはり気持ちとの関連性があり、しかもその気持ちは随分和らいできていることがその姿より読み取れた。

この時期には、信頼関係が随分ついてきて、担当保育士を求めることが多くなり、一緒に遊ぶことが多くなった。

②食事

自分でおにぎりを噛みとって食べるようになる。食事に対する意欲も出てきて、主のおかずをおかわりするようになる。

しかし、咀嚼がまだまだ弱く、物によっては、噛み出すこともあった。野菜は、友だちの姿を見たり、保育士の姿を見たりして、手に取るが、まだ口にはしない。果物は、果汁から口にする姿を保育士が見せたり、友だちのそうして食べる姿を見ていたこともあり、果汁から口にし始め、次第にそのままの果物を手に取り、自分から食べるようになる。

4) 子どもの変化・成長～12月頃（8か月後）～

①活動

自分の思いを片言や態度で示すことができるようになった。また、嫌なことがあると、友だちへ向かっていくようになり、自分の気持ちを素直に表現できる姿になってきた。

また、泣くことが増え、豊かな感情表現ができるようになった。遊びに関して、7、8月頃から見られた、模倣あそび、ごっこ遊びが、今ではメインの活動になり、夢中になっている。担当保育士に、家であった出来事など、色んな話をするようになった。

指先をつかって遊ぶことも多くなり、自分に自信がついてきたのか、体を大きく動かす遊びも多くなってきた。また、自然の中で活動していたことが良かったのか、2歳クラスが植えた野菜やさつま芋を、散歩中などに、指をさしたり、触ったり興味を示す。

②食事

おにぎりにしなくても、比較的、噛んでごはんを食べられるようになり、野菜も名前を言いながら食べられるようになる。

5) 考察

入園当初、身体がこわばっていたのは、人と接することに、不安を感じていたからだと思われる。それに気づいた担当保育士が、肌の触れ合いを増やしたり、遊びや食事を通じて、人の心地良さを伝えることで、担当保育士が「守ってくれる、わかってくれる存在だ」ということが伝わって、徐々に気持ちが落ち着き、気持ちが出せるようになってきたのだと思います。

活動の場面でも、食事の場面でも、大人が信頼関係をしっかりとつけたうえで、意図を持ちながら子どもを見守り、大人が姿を見せていくことで、子どもの素直な成長を保障していけることの大切さが改めてわかった事例でした。

(3-1) 2歳児クラス：クラスの取り組み

自己表現を大切にしたり関わり ～素直に自分の感情を表現することの育み～

<2歳児クラスの姿>

4月当初、1歳児クラスから進級した子どもたちが多いこともあり、担当保育士との安定した関係を土台に友だちと一緒に遊びたいという気持ちが強くなり、子ども同士の関わりも増え、物のとりあい、気持ちの行き違いなどによるトラブルも多くなってきた。そんな場面では丁寧にかかわり、子どもの気持ちに担当保育士が共感していくようにした。

子ども同士のなかで楽しい経験はもちろんのこと、時には悔しかったり、悲しかったりする経験をいっぱいしながら、時には体でぶつかったり、気持ちをぶつけあったりしながら、人と関わる力（コミュニケーションのとりかた）を学んでいってほしいと願い、大人が答えを出したり、解決をしていくのではなく、子ども自身が感じ、考えて行動していくことを心掛け、見守っていくことを大切にしてきた。

(3-2) 2歳児クラス：個別事例 Bちゃん〔2011.4入所〕

1) 子どもの姿

1歳児で入園。母との離れ際に泣くことがなく、我慢をしているように見えた。また、表情も乏しく、淡々としていて自分の気持ちが素直に出せていないのではと感じることがあり、楽しいときはいっぱい笑い、嫌なことがあったらいっぱい泣いたり、怒ったりそんな感情を豊かに出してほしいという願いをもち保育をすすめてきた。

2) 2歳児クラスになっての子どもの姿

友だちに強く言われると固まってしまう。大人が来てくれて、助けてもらうのを待っている。

(事例：4月)

友だちがままごと遊びをしているのを見て、一緒に遊びたくて近くに行く本見。
ままごとコーナーに入ろうとすると「○○ちゃんはあかん」と友だちから言われる。

その場に立ちすくむ本児。保育士に目で訴える。

保育士「どうしたの？いやなことがあった？」と聞くが何も言わず黙っている。

しばらく本児を抱きながら、本児の気持ちを言葉にかえて共感し、「一緒にあそびたかったな」と気持ちを受け止めるようにした。そのうち「おんぶしてー」と本児。

しばらくおんぶをすることで、かたくなだった気持ちがほぐれていくようであった。

3) このような姿から保育士が心掛けた関わり

- ①表情がかたまったり、嫌なことがあったときは抱きしめたり、傍にいて気持ちを聞いていき気持ちを言葉に置き換えて表現し、伝えていく。
- ②触れ合い遊びが好きだったので1対1の時間を作り、スキンシップを充分にとったり、目と目をみて笑いあう経験をしていき、気持ちと体の解放感を味わう。
- ③本児が固まるようになってしまったからは、本児から泣いたり、求めたりする姿を根気強く待つように心掛けた。
- ④本児の好きな遊び（お医者さんごっこ、ままごと）を十分に保育士や友だちと楽しみ、友だちと遊ぶ楽しさを味わっていく。

4) 子どもの変化

(事例：11月)

叩かれたりしたとき、しっかり声をだして泣くようになる。悲しかった気持ちを言葉で伝え、相手に気持ちを伝えに行くようになる。

ホールでお買い物ごっこをしている。

本児が入りたくて「いれて」と言う。

「あかん」と言う子。それを聞いていた子も「〇〇ちゃんはいれたらん」と返す。

「〇〇ちゃん（私）も入りたいんやもん」「なんであかんの」と主張する本児。

すると「あかん」と押される。それでも「私もやりたいもん」と主張し、友だちから叩かれる。叩かれて声をだして泣いて保育士のところへ走ってくる。

保育士 「どうしたの・・・？」

本児 「あかんって言われた」

保育士 「嫌やったなあ」「一緒に遊びたかったね」と抱きしめる。

本児 しばらく泣いていたが「もう一回言いに行く」と気持ちを立て直す。

自分で行こうとするが、戻ってきて保育士に「一緒にいって」と言いにくる。

保育士がそばにいて安心したのか友だちに気持ちを伝えに行く。

5) 考察

本児が声をだして泣いたり、自分の気持ちを少しずつ表現できるようになってきた姿をうれしく感じた。

また、不安なこと、自信のないことには「しやん」と行ってしまうことが多かったが、「〇〇する？」と声をかけると「それなに？」「する」と何事も積極的に参加し、挑戦する姿もみられ

るようになった。喜怒哀楽の表情が豊かになり、日々生き生きとしてきた。

担当保育士に「自分のことをわかってくれているんだ」「大切にされてるんだ」という安心感が、友だちに向かっていける原動力になってきたのだと感じる。

それに加え、本児がリズム運動で保育士や友だちから認められることで自信が持ててきたこと。またお医者さんごっこなど、本児のアイデアや発想が楽しく、友だちをリードして遊ぶ場面が増えてきたこと、友だちと遊ぶ楽しさを充分に経験し、友だちに受け入れられたり、受け入れることができるようになり、友だちと遊びたいという気持ちが一層強くなってきたこと、等が友だちに向かっていける原動力になったと考えられた。

様々な場面での保育士の子どもへの関わりについてはどこまで子どもの姿を見守っていったらよいのか保育士にも戸惑いがあった。しかし決して大人がさせるのではなく子ども自身が自分の力で一歩踏み出すことを見守っていくこと、子どもの力を信じていくことの大切さ、子ども同士のなかでお互いに育っていくことの大事さを学んだ事例であった。

保育士がいかなる場合も子どもの行動を肯定的にとらえ、行動の裏にある気持ちに共感していったことで、子どもは、自分自身の行動のなかにある気持ちに気づき、担当保育士と一緒に居てくれる、わかってくれるという安心感のもと、自分のありのままの姿・気持ちを担当保育士にぶつけることができたのだと感じる。その経験を土台にして友だちに向かっていくことができたのだと思う。

この先、ひとりひとりの子どもたちが自分を表現することの幸せを感じていくことを切に願う次第だ。

(3-3) 2歳児クラス：個別事例 O君〔2010.4 入所〕

1) 子どもの姿

入園して、2年目の今年（2011年）の8月頃の姿は、担当とのしっかりとした愛着はついていて、担当を見失うと不安でパニックになって、大泣きをする姿が多い。担当と同じ空間にいても、視界から消えると、泣いて、全く違うところに探しに行く。遊びの中では、うんていや鉄棒などにぶらさがっても、「怖い」と自分が思ったら、危険な場所でも手を離す。（大人まかせ）な姿があった。

2) 課題

こうした状況から、大人まかせな習慣が気になり、「自分で行動する」「自分で解決していく」という主体性の育みが大切だと実感した。

3) 保育士の関わり

具体的には、共感したり、欲求や、子どもの姿はできる限り認める、という関わりは、大前提として行い、更に、本児から少しでも違う場所に行く時は、「○○に行くけど、どうする?」「すぐに戻ってくるからね」「戻ってきたら○○ちゃんのところにすぐ戻ってきたよ」と、子どもの意志を聞いたり、声をかけてから行動することを徹底したり、子どもが遊び（運動面）の中で挑戦しようとするときは、すぐ側で見守るのではなく、一歩離れた場所から見守り、「自分で何

とかするしかないんだ」と意識づけるように関わった。

また、本児が、失敗を恐れる傾向もあったので、大人がわざと失敗する姿を見せていった。

4) 保育士が大切にしたこと

「いつも自分のことを見てくれている」という安心できる気持ち、担当を信頼する気持ちが育つようにという願いを持って子どもと関わった。

5) 子どもの変化・成長

徐々に姿は変化し、11月頃になると、担当保育士から離れることの不安は減ったように見られ、自分から興味のある遊びを見つけ、「〇〇、行ってくるわ!!」と走って行ったり、「〇〇ちゃんと遊んできたよ」と戻ってくることも増えてきた。

散歩中など、外や初めての場所では、担当と離れると不安で泣くが、それ以外では、担当保育士の名前を呼んで、自力で探す姿がでてきた。運動面でも自信がつき、自分で高いところまでのぼったり、「怖い」と思っても、その場で手を離さなくなった。

大人との信頼関係が安定してくると、自信もつき始め、身体を動かすことへの意欲もわいてきた。週に2回ほど行っているリズム運動にも、それまでは、殆ど参加しなかったのだが、徐々に参加するようになっていった。

そして、気持ちの表現も豊かになり、言葉もよく出るようになっていった。

6) 担当保育士が、子どもの変化・成長で感じたこと

①様々な面で自信をつけてきてからは、遊びの幅も広がり、「大好きな遊び」も自ら見つけ出して動く姿が見られるようになった。「担当保育士は、必ず自分の元に戻ってくる」という、安心感、信頼が強くなった。

②運動遊びでは、はじめから「しない」という姿は減り、「どこまでできるかな?」と自分で探りながら挑戦していく姿が見られた。

7) 考察

できないからさせる、うながす、ということではなく、大人との信頼関係がしっかりとつき、気持ちがしっかりと安心・安定すれば、気持ちが前向き、動き出そうとする。

そして、その気持ちを更にフォローするため、少しずつ子どもに自信をつけていく環境が大切だということが、改めて認識できた。

特に、“失敗をしてはいけないんだ”という気持ちが強かったため、失敗をする姿を大人が見せていく事も良かったと思われる。

また、本児の変化・成長を見ていて、周囲の環境、習慣が、いかに大きな影響を与えているかを改めて教えられる事例であった。

【9】 いなべひまわり保育園が大切にしている保育 ～『三つ子の魂百までも』が意味するもの～

■先述の通り、私たちは、子どもが大人になった時、「自分の気持ちに素直になって生きる」という姿勢と「自ら考え、自ら判断し、自ら行動できる」習慣を持った姿を思い描き、子どもと関わっています。

その理由は主に三つあります。

一つ目が、0～3歳までの時期が、脳のネットワークが張られるなど、脳の基本構造を作る時期にあたり、人格や、その後の成長発達に大きな影響を与えることになる、ということです。

二つ目は、“習慣”です。私たちは、一度身についた習慣を変える為には、大変な困難を要します。つまり、変えにくいのです。これを逆手にとると、一番最初に良い習慣を身につけたら、これは大きな財産になるということなのです。何故なら、“変わりにくい”のですから。

そして三つ目が、一番最初の経験が、人の感情や思考に大きな影響を与える、ということです。“第一印象”“初恋”“初体験”などと言われるように、なんでも「初めての体験」は、心に強く残り、後々まで影響を与えます。この頃の経験は、人生を始める最初の時で、しかも“初体験”ばかりなのです。

■何故、「自分の気持ちに素直になって生きる」という姿勢と「自分で考え、自分で判断し、自分で行動できる」習慣が理想なのか。

今の時代、高度情報化社会に突入して数年が経ち、多様な価値観や情報が溢れ、時代の変化も日に日に早くなってきています。

現代の社会では、2年前、3年前に“良い”と言われていたものが否定され、新しい価値が生まれてきていることが多々あります。他人に教えられた価値感では、時代に振り回され、その対応だけに右往左往することとなります。現在でもこれほど時代の流れが速くなってきているのですから、子どもたちが大人になる20年後は、もっと早くなり、そしてもっとグローバル化が進んだ中で、幸せに生き抜いていくことが求められるのです。

子どもたちと泥団子を作っても、それぞれで出来栄えが違ってきます。お母さんの絵を描いても、子どもそれぞれで個性があります。

同じことをしていても、人が想像し、生み出すものは、個々それぞれ違っているのです。傍らから見ると、周りと同じようなことをしているように見えても、それを懸命に磨き続けると、それは世界に一つしかない価値あるものになっていると思うのです。“その人らしく”本当に突き詰めていけば、何でも“その人らしく”なり、価値あるものになっていくと思うのです。

そして、ここが大切なのですが、“一生懸命に磨き続けることができる”ものは、“好き”だったり自分の中から生まれてきたものだけなのだと思うのです。

自らの心の底からの欲求や思いを求め、試行錯誤しながらも、自ら気づいて前へ進んでいける力。それが、「自分の気持ちに素直になって生きる」姿勢と「自分で考え、自分で判断し、自分で行動できる」習慣にあるのだと思うのです。

子どもが20歳になった姿を思い描いて、今、私たちは0～2歳児の保育をしています。

大船渡市七夕まつりボランティアに参加して

名古屋短期大学保育科2年生 越橋 美波

私は安城市に住んでいませんが被災した方のために何かしたいと思い、安城市の七夕まつり実行委員会が企画した大船渡市の七夕祭りを支援する今回のボランティアに参加しました。

被災地に着いてまず実際に被災地を回る時間をもらいました。そこでは、テレビのニュースで報道されているような光景で靴や布団など生活用品が流されて置いてあり、とても衝撃的で言葉が出てきませんでした。

また、テレビを見ているだけではわからないようなにおいがしていました。このにおいがするなかで被災地の人は生活をしていると思うと心苦しくなりました。被災地の様子を見てよりいっそう七夕祭りを成功させたいという気持ちが強くなりました。

私の役割は風船に願い事を書いてもらうように呼び込みの手伝いをすることでした。初めはどのように声をかけたらよいのかわからず、なかなか声をかけることができませんでした。また、学生や親子連れの方は進んで書いてくれましたが、お年寄りの方は「願い事ないから…」と書くことに抵抗をもつ人が多く無理に書いてもらってはいけないし、どのように声をかければよいのかわからずそのまま立ち尽くすことが多くありました。願い事を書いてもらうことは大変で辛いこともありました。

しかし、「わざわざ遠いところから来てくれてありがとうね。」と声をかけてくれたり、話を聞いてあげるだけでも喜んでくれる姿を見ることができたのでうれしかったです。

風船を一斉に打ち上げるときには大勢の人が来てくれました。そして、打ち上げた風船をみて喜んでいただいたのでとても嬉しくなり、手伝えてよかったと思いました。祭りを見る時間をもったときにもたくさんの人が屋台をみて回ったり、盆踊りをしていてたくさんの笑顔を見ることが出来ました。

今回のボランティアには、私が元気をあげられたらと思い参加しましたが、反対に元気をもらっていました。そして、たくさんの人の笑顔や優しさに触れることができ、頑張ろうという気持ちにもなりました。

また、このボランティアを通してたくさんの人に出会うことができ人と人の繋がり大切さをまなびました。愛知県と岩手県はとても遠く離れていますが思いやる気持ちはどこへ行っても同じなのだと強く感じました。

ボランティアでたくさんを感じ、たくさん考えさせられいろいろなことを学びました。これから、この被害の大きさを周りの人に伝えていき、そして、今後に活かしていきたいです。貴重な経験をさせていただきありがとうございました

岩手県大船渡市の七夕祭りボランティア

桜花学園大学保育学部3年 山田 英実



私は、8月の5日と6日の2日間岩手県の大船渡市に行ってきました。3月11日に起きた東日本大震災では、津波によって多くの人の命や宝物が奪われてしまいました。このとき、私は自分に何ができるのかを考え、ボランティアに行き、現地の人々の力になりたいと感じました。しかし、大学も毎日授業があり休むまでの勇気も無く、現地の人々の足を引っ張ってしまうボランティア難民などの話を聞き、なかなか行くことができずにいました。夏休み前になり、この研究所の情報で知ったボランティアの説明会に出ました。活動内容は、安城市が主催となって開く安城七夕祭りが、震災を受けて開催が危ぶまれた岩手県大船渡七夕祭りを支援していく「One Heart Tanabata Project」というものです。私は少しでも現地の人達の役に立つことができればと思い、即座に参加することを決めました。

実際に被災地を視察することができました。バスから降り立ったときに、まず磯の香りがしました。そして、周りを見渡すと津波で流されてしまった家の跡や骨組みだけ残っている建物、津波が来る前の生活感が見られる靴などが落ちていました。私が行ったのは8月だったので、震災から5ヶ月近くが経過していましたが、場所によっては津波がきた当時の建物が建ったまま工事がまったく進んでないところもありました。ニュースで、何度も現地の様子を見ていましたが、実際に自分の五感を使って感じとることで現実に起きたものであるということ強く認識させられました。



今回の私たちの仕事は、安城七夕祭りと大船渡七夕祭りがコラボレーションして「願いごと風船」を同時刻に飛ばすために、風船や願い事短冊というものに現地の人々の願いを書いてもらうことでした。



ボランティア1日目は、地元のスーパーマーケットに行き、その中で風船に願い事を書いてもらえるように呼びかけをしました。現地の人々は、快く引き受けてくれて今感じている思いや復興に向けた願い事を書いてくださいました。そこに買い物に来ていた人の中にも、津波により被害を受けた人や、家を奪われてしまい、仮設住宅で生活している人がいました。そのような人々の願いは1日でも早く地震前の生活に戻りたい、家族が幸せに

暮らせるようにというものでした。地震が起こってから5ヶ月が経ち、確実に復興へと歩んでいると感じました。



ボランティア2日目はいよいよ七夕祭りの本番だったため、1日目に引き続き風船や願い事短冊にも思いや願い事を書いてもらうなどをして、地域の人々と交流することができました。その中で、地震が起きたときのことを教えてくださった方もいました。今回の祭りの会場になったところは、津波による被害はありませんでしたが、揺れは相当なものであったそうです。私たちは、この地震のことを忘れてはいけないと感じたと共に、自分だけは大丈夫と思わずに、日頃から備えていかなければいけないと感じました。



「願い事風船」では、安城七夕祭りと同様に、安城から大船渡に向けてエールを送ることを目的に同時開催しました。大船渡の人々の思いが込められた風船にヘリウムガスを入れて1つ1つ手渡していき、17時5秒前になると、カウントダウンが始まり人々の思いが込められた風船が17時に一斉に飛ばされました。それを見て、私はみんなで1つのことを

協力してやり遂げられたことにとっても感動したと同時に、地元の人たちの笑顔を見ることができ、嬉しく思いました。

大船渡七夕祭りは、色とりどりの竹七夕飾りが飾られたり、あんどん七夕山車が通ったり、とても華やかなものでした。ボランティアだけでなく、地域のお祭りの様子も見ることができたので、とても充実した2日間となりました。

このボランティアに参加させていただいて、暖かい布団で寝たり、美味しいものを食べたりできることなど、普段当たり前のよう生活している暮らしがとても幸せなもので、感謝しなければいけないものであることを再認識することができました。

今回の貴重な経験を忘れずに、残りの学生生活を送っていきたいです。

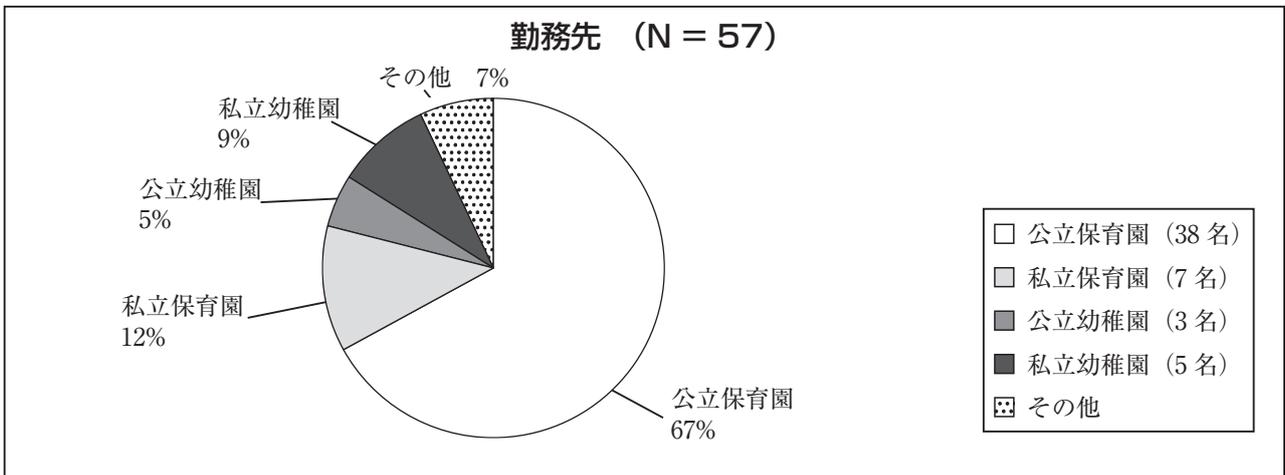
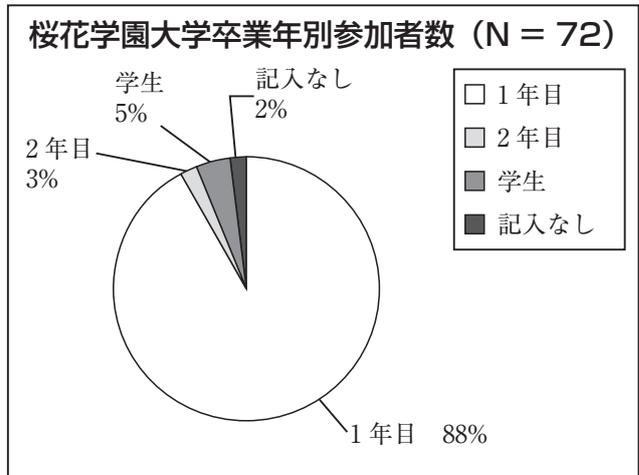
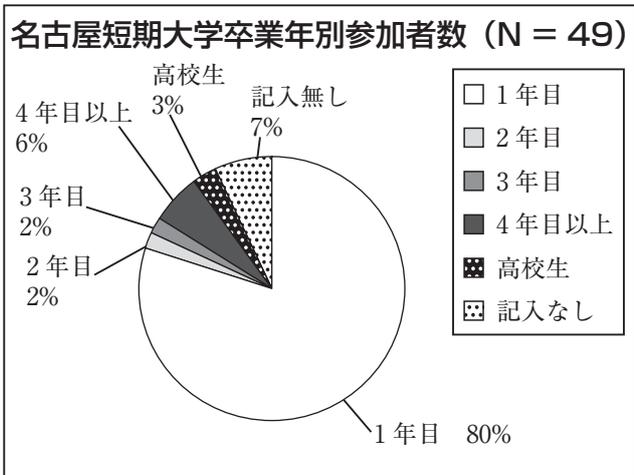
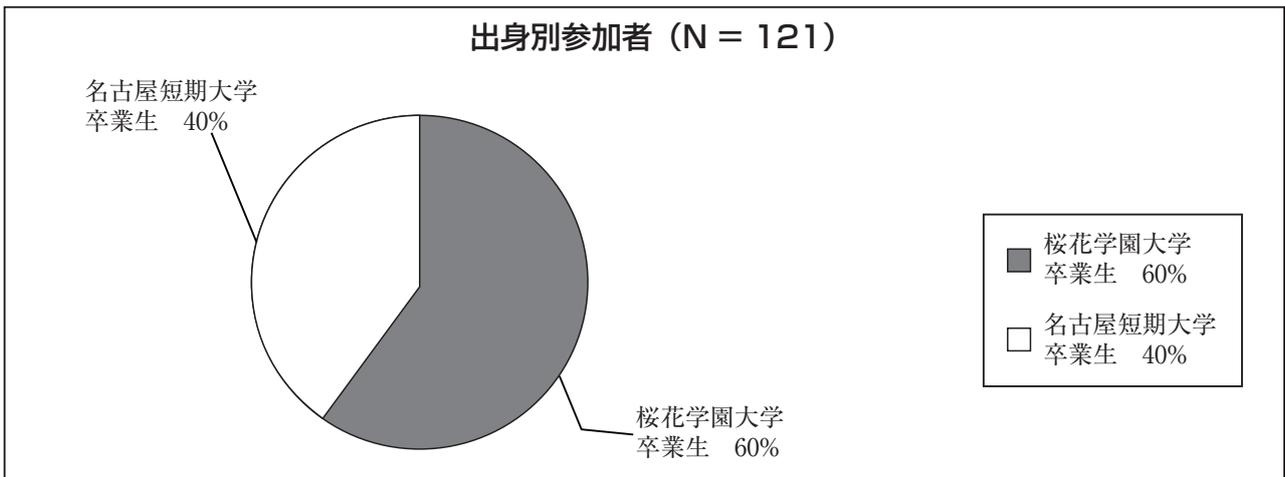


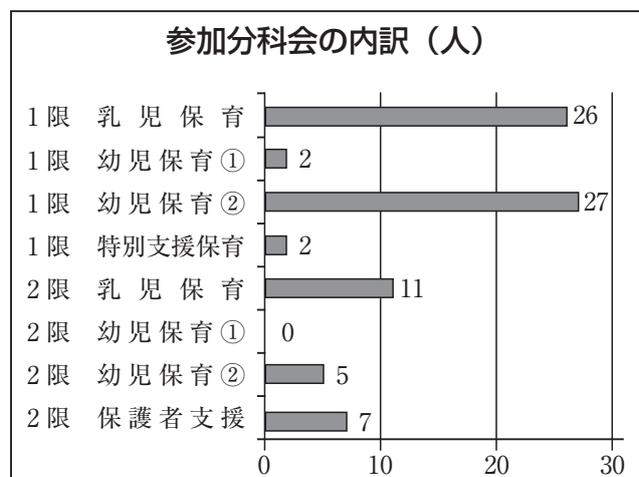
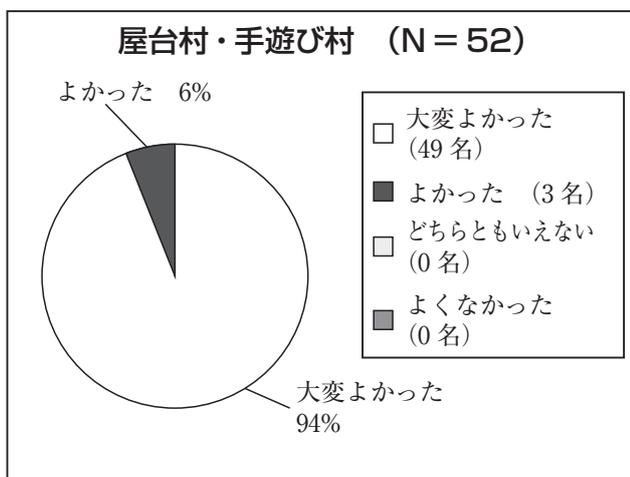
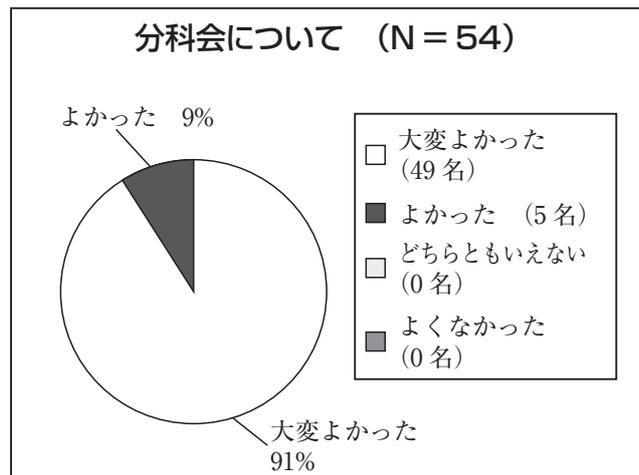
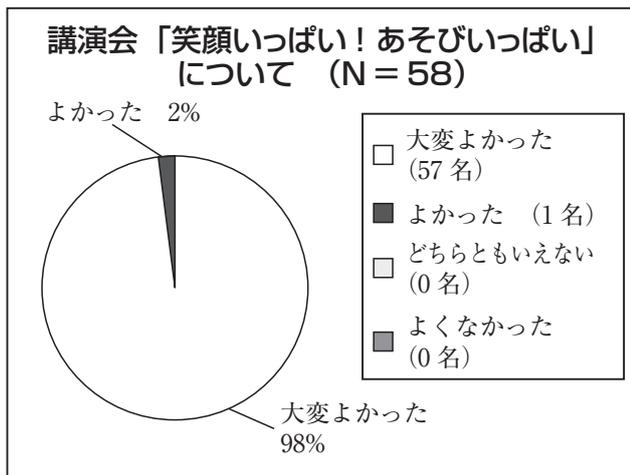
資料

2011年度 事業報告

1 第9回夏季保育研究セミナー

2011年度夏季保育研究セミナーアンケート結果





感想・要望 など

- ・ 少人数でお話ができとても良かったです。悩みが解消できました！！ありがとうございました。
- ・ 講演会とても楽しく、みんなで関わられたのが良かったです。人数が少なく、話をとてもよく聞いて下さってとても良かったです。
- ・ 講演会とても楽しく、明日からさっそく使えるものばかりでとても良かったです。
- ・ 講演会では元気をいただきました。若い卒業生に交わり楽しく参加できました。ありがとうございました。
- ・ 楽しい時間を過ごすことができました。ありがとうございました。
- ・ 来年も来たいです。
- ・ とても参考になるものが多く、たくさんの学びができました。またこのような機会を作っていただけると嬉しいです。母校と一緒に学んだ仲間と会って話して学びあえるって素敵だなと感じました。
- ・ みんなの悩みを元にいろいろ話合えて良かった。制作は現場で役立つものばかりで良かったし、楽しかったです。
- ・ 1年目で同じ悩みを共感できたり、皆に会えることで今後の保育を頑張る力がますますわいてきました。ありがとうございました。
- ・ 楽しい手あそびや歌をみんなと一緒にできたり、悩みやアドバイスなど意見交換でき、とても有意

義な時間になりました。ありがとうございました。

- ・新しい手あそびや手作りおもちゃを学べてよかった。浦中こういちさんの体操やふれ合いあそびがとても為になって保育にいかして実践していきたいと思います。
- ・たのしく遊べてたくさんお話ができました。また明日から頑張れます。
- ・いやし棒よかったです。
- ・明日からつかいます。毎年さそって下さい。
- ・とっても楽しかったです。
- ・明日から使います。ありがとうございました。
- ・また来たいです。
- ・おもちゃを作れてとてもよかったです。
- ・とっても楽しかったです。さっそく保育でいかしたいこといっぱいでした。
- ・またかえってきます。
- ・午前中の講演会は、色々な手遊びや体を動かす遊びを教えていただいてとても楽しかったです。午後の分科会もとても勉強になるお話ばかりでした。
- ・楽しかったです。明日からまた頑張ります。
- ・楽しい歌や働いている人の仕事の話聞くことができよかったです。
- ・分科会は少人数だったので、話を聞いて頂いたり、直接アドバイスをもらえてすごくありがたかったです。これから頑張っていく力がわきました。
- ・少人数でゆっくりできてよかったです。
- ・とてもおもしろかったし、楽しかったです。分科会では他の人の話がたくさん聞けてとても良かったです。
- ・たのしかった。
- ・とても有意義な時間となりました。分科会では少人数だったので一人ひとりの話を密に聴くことができたので良かったです。
- ・久しぶりに大学に来て、先生たちや同期の人たちの話を聞くことができいろいろ参考になりました。あと、ストレス発散も。
- ・子どもたちに楽しい遊びをしてあげたくなりました。これからも頑張ります。また企画してください。
- ・とても楽しかったです。また行きたいと思います。
- ・たのしかったです。リフレッシュできました。せっかく教えてもらったのに、忘れてしまった……。残るようなプリントなどをもっともらえたらうれしいです。

(辻岡 和代)

2 2011年度保育子育て研究所講演会のまとめ

今年度は、2011年12月10日、三重大学の河崎道夫先生をお呼びし、「子どもたちのあそびを豊かに—あそびの意味と指導のあり方—」をテーマに講演会を開催し、230名のみなさんの参加を得ました。今回の講演会は、遊びの歴史を実際のこまなどのおもちゃを提示していただいて解説していただきながら、びゅんびゅんごまなどの実演、そして遊びの魅力について語っていただきました。講演終了後は、若手の保育者のみなさんを中心に河崎先生の周りに集まり、びゅんびゅんごまに挑戦される等盛り上がりしました。

参加者の声よりいくつか紹介させていただきます。

保育関係者：「コマがすごい!!子どもがすごい!!と思いました。」「あらためて遊びの大切さがわかりました。」「ドキドキ、ワクワクする経験を子どもたちにたくさんさせてあげることができるように頑張っていきたい。」「こういうワクワク感が保育には大切だと思う。」「子どものあこがれとなるように、たくさん遊びやアイデアを学んでいきたい。」「今後の保育に向けてとてもパワーをいただきました。」

保育関係者・本学卒業生：「楽しい実践を交えたお話と久しぶりの大学の講義で楽しい時間でした。」「豊かな遊びは、遊び心をもった保育士によって生まれてくると感じた。」

一般参加：「引き込まれるお話でした。まずは自分がたのしみたいなーと感じました。」

本学学生：「こどものあそびは突然できたり、すごい力を持っているのだと思いました。」

本学非常勤講師：「あこがれをつくるのが、以前は自然な集団の中でできていて、今はそれを意識してつくっていくところに、おもしろさをつくる人らしさが出るのかなと思いました。」

表) 2011年度保育子育て研究所講演会のアンケート集計

アンケート回答者 内訳	本学との関係	数	講演内容について				
			大変 よかった	よかった	普通	あまりよく なかった	未記入
保育所・幼稚園 関係者	本学卒業生以外	108	69	32	4	0	3
保育所・幼稚園 関係者	本学卒業生	43	30	9	3	0	1
教職員 (小・中・高・大)		1	1	0	0	0	0
一般		6	4	2	0	0	0
他大学学生		8	7	0	0	0	1
本学学生		12	10	2	0	0	0
本学教員		7	7	0	0	0	0
計		185	128	45	7	0	5
		100.0%	69.1%	24.3%	3.8%	0.00%	2.70%

(文責・野津 牧)

3 2011年度 子育て交流会の経過・参加人数・内容

保育子育て研究所

- 4月12日(火) 第1回 子育て交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 12名 大人 11名
注意事項説明
集団遊び「大なみ小なみ」
手遊び「アンパンマン」「りんごがころころ」
絵本「くだものぼっくん」(水谷)
- 4月13日(水) 第2回 子育て交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 12名 大人 11名 学生 21名(保育学部2年辻岡ゼミ)
手遊び「とんぱらり」「いっほんばし」
絵本「だるまさん」(村井)
- 4月15日(金) 第3回 子育て交流会(0歳児) 天気:晴
子ども 6名 大人 6名
集団遊び「大なみ小なみ」
手遊び「ちょちちょちあわわ」「アンパンマン」
絵本「こちよばこちよばこ」(水谷)
- 4月19日(火) 第4回 子育て交流会(1歳児) 天気:くもり
子ども 12名 大人 12名
集団遊び「大なみ小なみ」
手遊び「アンパンマン」「だっこしてぎゅ」
絵本「あっ!」(水谷)
- 4月20日(水) 第5回 子育て交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 5名 大人 2名 学生 21名(保育学部2年今野ゼミ)
手遊び「あんぱん・しょくぱん」
絵本「ぼんちんぱん」(村井)
- 4月22日(金) 第6回 子育て交流会(2歳児) 天気:くもり
子ども 13名 大人 11名
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」「だっこしてぎゅ」「ペンギン」「あたま・かた・ひざ・あし」
絵本「いいないいな」「コンコンたまご」(荒川)
- 4月26日(火) 第7回 子育て交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 9名 大人 5名
集団遊び「大なみ小なみ」
「竹とんぼ」を作ろう!(牛乳パックとストローを使って)
- 5月10日(火) 第8回 子育て交流会(0歳児) 天気:雨
子ども 7名 大人 6名
手遊び「ちょちちょちあわわ」「アンパンマン」
「竹とんぼ」を作ろう!(牛乳パックとストローを使って)
紙芝居「ワンワンワン」(水谷)
- 5月11日(水) 第9回 子育て交流会(1歳児) 天気:雨
子ども 9名 大人 9名 学生 21名(保育学部2年浅野ゼミ)
おもちゃ広場(浅野ゼミ)
手遊び「キャベツのなかからあおむしでたよ」(学生)
紙芝居「たべたいな たべたいな」
絵本「おさかないっぱい」
手遊び「とんぱらり」「さかながはねて」「さよならあんころもち」(村井)
- 5月13日(金) 第10回 子育て交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 14名 大人 11名
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」「アンパンマン」
絵本「くつついた」(荒川)
うた「かたつむり」(高田)

- 5月17日(火) 第11回 子育て交流会 (3歳児) 天気:くもり
子ども 9名 大人 5名
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」「きんぎょちゃんめだかちゃん」
集団遊び「大なみ小なみ」
絵本「ぞうくんのさんぽ」(水谷)
- 5月18日(水) 第12回 子育て交流会 (2歳児) 天気:晴
子ども 13名 大人 11名 学生 22名(保育学部2年石山ゼミ)
いろいろな楽器で音楽会「かえるのうた」「きらきらぼし」
手袋シアター「おはながわらった」(学生)
手遊び「アンパンマン」「とんぼり」
絵本「ももんちゃんぽっぽー」(村井)
- 5月20日(金) 第13回 子育て交流会 (1歳児) 天気:晴
子ども 12名 大人 11名
手遊び「グーパー」「とんぼり」「バスにのってでかけよう」
絵本「だるまさんの」「だれかな」(荒川)
- 5月24日(火) 第14回 子育て交流会 (2歳児) 天気:雨のちくもり
子ども 14名 大人 11名
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」「アンパンマン」
「竹とんぼ」を作ろう!(牛乳パックとストローを使って)
絵本「のりものえほん」(水谷)
- 5月27日(金) 第15回 子育て交流会 (3歳児) 天気:雨
子ども 13名 大人 7名 学生
手遊び「はじまるよ」「あたま・かた・ひざ ポン」「アンパンマン」
絵本「おやさいとんとん」
ペープサート「カレーライス」
- 5月31日(火) 第16回 子育て交流会 (1歳児) 天気:晴
子ども 19名 大人 18名
集団遊び「大なみ小なみ」
手遊び「りんごがころころ」「アンパンマン」
「竹とんぼ」を作ろう!(牛乳パックとストローを使って)
絵本「ひよこ」(水谷)
- 6月1日(水) 第17回 子育て交流会 (2歳児) 天気:晴
子ども 12名 大人 10名 学生 23名(保育学部2年小嶋ゼミ)
パラシュートを飛ばそう!
手遊び「きんぎょちゃんとめだかちゃん」(学生)
親子遊び「はじまるよ」「とんぼり」「あんたがたどこさ」
絵本「わ」「おんなじおんなじ」(村井)
- 6月3日(金) 第18回 子育て交流会 (3歳児) 天気:晴
子ども 9名 大人 6名
手遊び「ゲーチョキパー」
集団遊び「大なみ小なみ」(水谷・代理)
「お散歩かたつむり」作り(荒川)
- 6月7日(火) 第19回 子育て交流会 (3歳児) 天気:くもり
子ども 15名 大人 10名
「ピョンピョンがえる」を作ろう!(牛乳パックで)
絵本「だるまちゃんとなぐちゃん」(水谷)
- 6月8日(水) 第20回 子育て交流会 (1歳児) 天気:晴
子ども 11名 大人 11名 学生 10名(保育学部2年基村ゼミ)
わらべうた「おすわりやす」「ここはてくび」(お母さんと一緒に)
絵本「バスがきました」「いないいないばああそび」
うた「あめふりくまのこ」「ゆりかごの歌」(村井)

- 6月10日(金) 第21回 子育て交流会(2歳児) 天気:くもり
子ども 19名 大人 15名
手遊び「はじまるよ」「グーチョキパー」「大きくなったら」
「おさんぽかたつむりを作ろう!」(牛乳パックを使って)
絵本「なんのたまご」(荒川)
- 6月14日(火) 第22回 子育て交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 18名 大人 17名
「ピョンピョンがえる」を作ろう!(牛乳パックで)
手遊び「アンパンマン」「りんごがころころ」
絵本「ふっくらパン」
うた「あめふりくまのこ」(水谷)
- 6月15日(水) 第23回 子育て交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 8名 大人 4名 学生 17名(保育学部2年田中ゼミ)
わらべうたでふれあい遊び「おすわりやす」「ここはてくび」
かえるロープ人形「かえるのうた」
絵本「どっちかな?」
わらべうた「さよならあんころもち」(村井)
- 6月17日(金) 第24回 子育て交流会(0歳児) 天気:くもり
子ども 10名 大人 9名
布を使って「上から下から大かぜこい」
指人形「ととけっこー よがあげた」(ひざに乗せてふれあい遊びも)
子どものおもちゃ“入れたり出したり” (上村)
- 6月21日(火) 第25回 子育て交流会(2歳児) 天気:くもり
子ども 19名 大人 17名
作って遊ぼう!「びよんびよんがえる」(牛乳パックを使って)
手遊び「ぐー・ちょき・ぱー」「アンパンマン」
絵本「きんぎょがにげた」(水谷)
- 6月24日(金) 第26回 子育て交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 21名 大人 20名
ふれあい遊び「バスにのってでかけよう」「いっぽんばし」「じどうはんばいき」
作って遊ぼう!「おさんぽかたつむり」(牛乳パックを使って)
絵本「てんてんてん」(荒川)
うた「かたつむり」(高田)
- 6月29日(水) 第27回 子育て交流会(2歳児) 天気:くもり
子ども 18名 大人 16名 学生 20名(保育学部2年藤田ゼミ)
エプロンシアター「たまごがコロロン」
手遊び「いっぽんといっぽんで」(学生による)
わらべうた「おすわりやす」「あんたがたどこさ」
ふれあい遊び「むすんでひらいて」「とんぼり」
絵本「どろんこももちゃん」
わらべうた「さよならあんころもち」(村井)
- 7月5日(火) 第28回 子育て交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 10名 大人 6名
集団遊び「大なみ小なみ」
手遊び「いわしのひらき」「パンやさん」
作って遊ぼう!「パズル」(食品トレイを使って)
絵本「ちょっとだけ」
手遊び「アンパンマン」(水谷)
- 7月6日(水) 第29回 子育て交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 23名 大人 23名 学生 20名(保育科1年原田ゼミ)
ふれあい遊び「おすわりやす」「ここはてくび」「とんぼり」「あんぱんしょくぱん」
絵本「がたんごとんがたんごとんぎぶんぎぶん」
わらべうた「さよならあんころもち」(村井)
-

- 7月8日(金) 第30回 子育て交流会(0歳児) 天気:晴
子ども 9名 大人 8名
わらべうた「ささにたんざく」七夕のうた「あんまんだーぶり」
*夏の気温と水分補給の話
ふれあい遊び「いちり・にり・さんり」「あんまんだーぶり」「つつきましょ」
「ととけっこー よがあげた」(上村)
- 7月12日(火) 第31回 子育て交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 23名 大人 21名
芝生で水遊び(シャワー、じょうろ)
手遊び「パンダうさぎコアラ」「りんごがコロコロ」「アンパンマン」
絵本「ひよこ」(水谷)
- 7月13日(水) 第32回 子育て交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 18名 大人 16名
手遊び「アンパンマン」ふれあい遊び「バスにのってでかけよう」
芝生で水遊び(色水・シャワー・じょうろ)
紙芝居(荒川)
- 7月15日(金) 第33回 子育て交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 13名 大人 10名
芝生で水遊び(色水・シャワー・じょうろ)
絵本「どうすればいいの」
紙芝居「たからさがし」
手遊び「パンやさん」「アンパンマン」(荒川)
- 9月2日(金) 第34回 子育て交流会(1歳児) 天気:くもり時々雨(台風12号接近中)
子ども 12名 大人 12名
集団遊び「大型バスごっこ」
手遊び「にんどころ」
絵本「おっばいっばいのんだ」「くつついた」
うた「げんこつやまのたぬきさん」(荒川)
- 9月6日(火) 第35回 子育て交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 25名 大人 21名
集団遊び「おおきくなれわになれ」
ふれあい遊び「ちゅっちゅこことまれ」「きかんしゃ」
絵本「ねないこだれだ」
手遊び「アンパンマン」(水谷)
- 9月7日(水) 第36回 子育て交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 9名 大人 5名 学生 19名(保育科1年平野ゼミ)
*学生による創作ダンス
ごあいさつあそび「みなさん」「はーい」
手遊び「むすんでひらいて」
わらべうたでふれあい遊び「とんぼり」「なかなかホイ」
絵本「おつきさまこんばんは」「まっかだね」
わらべうた「さよならあんころもち」(村井)
- 9月9日(金) 第37回 子育て交流会(0歳児) 天気:くもり
子ども 5名 大人 4名
わらべうたでふれあい遊び「上から下から大かぜこい」
「かくかくかくれんぼ」「ちんぷんかんぶん」「おじょうずおじょうず」
プラプラ人形で「じゃんじゃんじゃん」
絵本とボールで「お月さま」(上村)
- 9月13日(火) 第38回 子育て交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 22名 大人 22名
作って遊ぼう!「ふーふー運動会」(色画用紙を使って)
集団遊び「まーるくなれわになれ」

*注意事項説明

手遊び「パンダうさぎコアラ」「アンパンマン」「あたま・かた・ひざボン」
絵本「いたいいたいのとんでいけー」（水谷）

- 9月14日(水) 第39回 子育て交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 17名 大人 15名 学生 20名(保育科1年野津ゼミ)
手遊び「アンパンマン」「0と0をあわせると」(学生)
お手玉で「ぎっちょぎっちょこめつけ」 わらべうた「なかなかホイ」
手遊び「あんぱんしょくぱん」
絵本「まるくておいしいよ」(こどものとも0.1.2)
うた「むすんでひらいて」「さよならあんころもち」(村井)
- 9月16日(金) 第40回 子育て交流会(3歳児) 天気:くもり
子ども 19名 大人 14名
集団遊び「むっくりくまさん」
手遊び「ぐー・ちょき・ぱー」「アンパンマン」
絵本「三びきのやぎのがらがらどん」
「いたいいたいのとんでいけー」(荒川)
- 9月20日(火) 第41回 子育て交流会(2歳児) 天気:大雨(台風15号接近中)
子ども 2名 大人 2名
作って遊ぼう!「ふーふー運動会」(色画用紙を使って)
絵本「いたいいたいのとんでいけー」
手遊び「アンパンマン」
- 9月21日(水) 台風15号上陸 暴風警報発令のため休止
- 10月5日(水) 第42回 子育て交流会(2歳児) 天気:雨
子ども 13名 大人 11名
ふれあい遊び「おすわりやす」「ここはてくび」「一り二り三り」「とんぱらり」
絵本「くだものさん」「おててがでたよ」
「さよならあんころもち」(村井)
- 10月7日(金) 第43回 子育て交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 19名 大人 19名
「あいさつ」
絵本と親子遊び「だるまさんの」「だるまさんが」
手遊び「アンパンマン」(荒川)
- 10月12日(水) 第44回 子育て交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 13名 大人 10名
ごあいさつ遊び「みなさん、ハイ」 うた「むすんでひらいて」
絵本「おやゆびさん」「こぐまちゃんどうぶつえん」
からだ遊び「とんぱらり」 わらべうた「いちりにり」手遊びうた「5人の家族」
わらべうた「さよならあんころもち」(村井)
- 10月14日(金) 第45回 子育て交流会(0歳児) 天気:くもり時々雨
子ども 5名 大人 4名
わらべうた「かくかくかくれんぼ」 ふれあい遊び「ほっぺにちゅっ」
「こめつきあわつき」「とうきょうとにほんばし」
大人の楽しみ「一番どり鳴いた」(上村)
- 10月19日(水) 第46回 子育て交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 21名 大人 20名
「大なみ小なみ」「あたま・かた・ひざボン」「一本ばし」「アンパンマン」
「パンダ・うさぎ・コアラ」
絵本「どんぐりどんぐり」(水谷)
- 10月21日(金) 第47回 子育て交流会(3歳児) 天気:くもり
子ども 9名 大人 6名
芝生に出て遊ぼう!「大なみ小なみ」「あぶくたったにえたった」
-

手遊び「アンパンマン」
紙芝居「こぶたのまーち」（水谷）

- 10月25日(水) 第48回 子育て交流会(3歳児) 天気:くもり (幼稚園ホール)
子ども 21名 大人 16名
「まあるくなあれ」「新聞紙ではあ〜」
手遊び「いっぽんばし」「きかんしゃ」(幼稚園の江田先生)
絵本「だるまさんが」「あおくとときいろちゃん」(水谷)
- 10月28日(金) 第49回 子育て交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 24名 大人 22名
手遊び「おいでおいで」「ばんやさん」「アンパンマン」
絵本「あし あし あし」
運動遊び「ケンケン・ピョンピョン」
絵本「ふっくらパン」(荒川)
- 11月1日(火) 第50回 子育て交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 26名 大人 25名
手遊「あたま・かた・ひざボン」「パンダ・うさぎ・コアラ」「アンパンマン」
絵本「くだものぱっくん」
足の裏の発達の話(荒川先生)
芝生で「大なみ小なみ」の後、芝生を歩き回ろう!(荒川・水谷)
- 11月2日(水) 第51回 子育て交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 11名 大人 7名 学生 19名(保育科1年近藤ゼミ)
手遊び「おおきなくりの木の下で」「カレーライス」「どんぐり」(学生による)
手遊び「アンパンマン」
パネルシアター「もりのくまさん」(歌いながら)
大きな絵本「もりのおふろ」
ふれあい遊び「いちりにり」「とんぼらり」「さよならあんころもち」(村井)
- 11月4日(金) 第52回 子育て交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 19名 大人 17名
「はじまるよ」(名前をよんで)「だっこしてぎゅっ」
絵本「どうすればいいのかな」
芝生で「なまえ遊び」「アンパンマン」「いとまきまき」(荒川)
- 11月12日(土) 大学祭 プレイルーム開放 天気:晴
子ども 26名 大人 24名
- 11月13日(日) 大学祭 プレイルーム開放 天気:晴
子ども 11名 大人 10名
- 11月15日(火) 第53回 子育て交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 12名 大人 7名
ふうせんボールを作ろう!(新聞紙と風船で)
「いわしのひらき」(水谷)
- 11月16日(水) 第54回 子育て交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 28名 大人 27名 学生 13名(保育科1年岡林ゼミ)
「ころころたまご」「いっぽんばし」(学生による)
絵本「もりのおふろ」「だるまさん」
「とんぼらり」「いちりにり」「さよならあんころもち」(村井)
- 11月18日(金) 第55回 子育て交流会(0歳児) 天気:くもり
子ども 4名 大人 3名
少なかったので一斉にはせず、遊びの相手をする。
「かくかくかくれんぼ」「つつきましょポコペンだーれ?」(布・人形を使って)(上村)
- 11月22日(火) 第56回 子育て交流会(2歳児) 天気:晴(幼稚園ホール)
子ども 38名 大人 32名

ふうせんボールを作ろう！（新聞紙と風船で）
手遊び「おいでおいでパンダ」「りんごがころころ」（水谷）

11月25日（金）第57回 子育て交流会（3歳児） 天気：晴
子ども 15名 大人 9名
「いっぽんといっぽんで手をたたこう」「アンパンマン」「やきいもじゃんけん」
絵本「さつまのおいも」
なまえ遊び
「やおやのおみせ」（なぞなぞ）（荒川）

11月29日（火）第58回 子育て交流会（1歳児） 天気：くもり
子ども 26名 大人 26名
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」「りんごがころころ」「アンパンマン」
集団遊び「バルーン」
絵本「ひよこ」（水谷）
「目のまどあけろ」（宍戸先生）

11月30日（水）第59回 子育て交流会（2歳児） 天気：晴
子ども 21名 大人 16名 学生 19名（保育科1年鏡ゼミ）
ダンス「あわてんぼうのサンタクロース」（学生による）
名前呼び
絵本「がちゃがちゃどんどん」
「これはなににするの？」（名前と用途がわかる）
手遊び「アンパンマン」（荒川）

12月2日（金）第60回 子育て交流会（0歳児） 天気：雨
子ども 4名 大人 4名
「もちつきべったらもちつきべったん」
膝乗せ「うまはとしとし」 ゆさぶり「ゆすらんかすらん」
*ゆさぶり、回転、上下運動の大切さ（上村）

12月6日（火）第61回 子育て交流会（幼稚園ホールにてクリスマス会） 天気：くもり
子ども 93名 大人 82名
学生 保育学部4年 基村ゼミ 12名 専攻科1年 10名
創作音楽劇、親子遊び（基村ゼミ）
手遊び「あたま・かた・ひざ ポン」
「りんごがころころ」「アンパンマン」（水谷）

12月7日（水）第62回 子育て交流会（3歳児） 天気：くもりのち晴
子ども 9名 大人 5名 学生 19名（保育科1年村松ゼミ）
手遊び「ころころたまご」
パネルシアター「寝てるのだから？」（村松ゼミ）
手遊び「むすんでひらいて」
大きな絵本「ぐりとぐら」
親子遊び「とんぼり」「ここはてくび」
「いちりにり」「さよならあんころもち」（村井）

12月9日（金）第63回 子育て交流会（2歳児） 天気：晴
子ども 9名 大人 7名
親子遊び「バスにのってでかけよう」
クリスマスリースを作ろう！（紙皿を使って）
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」

12月13日（火）第64回 子育て交流会（1歳児） 天気：晴
子ども 27名 大人 26名 学生 11名（専攻科1年）
絵本「クリスマスのおくりもの」
布を使って「北風びゅー」 ふれあい遊び「ぞうきん」
人形劇「三匹のこぶた」（専攻科学生）
芝生で落ち葉遊び
手遊び「アンパンマン」（水谷）

12月14日(水) 第65回 子育て交流会(2歳児) 天気:くもり
 子ども 17名 大人 14名 学生 10名(専攻科2年)
 自己紹介(動物の名前当て)
 大きな絵本「はらぺこあおむし」(歌で)
 新聞紙でキャッチボール 以上(専攻科学生)
 手遊び「アンパンマン」
 絵本「ももんちゃんぎゅっ!」「くまちゃんあそぼうよ」
 「さよならあんころもち」(村井)

12月16日(金) 第66回 子育て交流会(3歳児) 天気:晴
 子ども 7名 大人 4名
 クリスマスリースを作ろう(赤い波紙を使って)
 絵本「クリスマスのわんころ」
 うた「あわてんぼうのサンタクロース」(高田)
 手遊び「アンパンマン」(荒川)

1月11日(水)、1月13日(金)、1月17日(火)、1月18日(水)、1月20日(金)、1月24日(火)、1月27日(金)、
 2月3日(金)、2月7日(火)、2月8日(水)、2月10日(金)、2月14日(火)、2月15日(水)、2月24日(金)、
 2月28日(火)、2月29日(水)、3月2日(金)、3月6日(火)、3月7日(水)、3月9日(金)、3月13日(火)



< 2011年度保育子育て研究所役員体制 >

所長	豊田和子	(保育学部)
主任研究員	岡林恭子	(保育科)
主任研究員	野津 牧	(保育科)
主任研究員	辻岡和代	(保育学部)
主任研究員	今野正良	(保育学部)
事務職員	馬場美津子	(庶務会計課兼務)

保育子育て研究所年報第9号

執筆者	豊田 和子	桜花学園大学保育学部	教授	
	岡林 恭子	名古屋短期大学保育科	教授	
	河崎 道夫	三重大学教育学部	教授	
	嶋守 さやか	桜花学園大学保育学部	准教授	
	小川 絢子	名古屋短期大学保育科	助教	
	小嶋 玲子	桜花学園大学保育学部	教授	
	野津 牧	名古屋短期大学保育科	准教授	
	近藤 直樹・若林 則子・渡邊 道子・石塚 真以・伊藤 茜・川島 恵	いなべひまわり保育園		
	越橋 美波	名古屋短期大学保育科	学生	
	山田 英実	桜花学園大学保育学部	学生	
	辻岡 和代	桜花学園大学保育学部	准教授	(掲載順)
編集	今野 正良	桜花学園大学保育学部	教授	

編集後記

2011年3月11日の東日本大震災は、東北地方沿岸部を中心に津波による甚大な被害をもたらしました。我が母校のある仙台市にも各所に震災の爪痕を残しました。故郷の宮城県角田市にも大きな影響を与えました。2011年の春と夏に我が子と帰省した際には、まさに言葉を失いました。一方でさまざまな方々からの支援と連帯が寄せられたのも事実です。本年報に原稿を寄せていただいた名古屋短期大学と桜花学園大学の学生たちの活動もその貴重な実践例です。学生たち、そして野津先生と岡林先生の活動もぜひ読んでいただきたいと思います。

河崎先生が「子どもにとっての身近なあこがれをともに創出していきたい」という御講演は、胸に迫る思いがしました。名古屋キャンパス保育子育て研究所のさらなる活躍をめざしていきたいと考えています。

いなべひまわり保育園の実践は、2008年4月の創設期から学生たちと学ばせていただけてきました。乳幼児の気持ちを汲み取ろうとしてかかわり合う保育士さんたちの姿が、多くの学びを与えてくださいました。

2012年度も名古屋キャンパスの教職員、学生、卒業生、ボランティアスタッフが力を合わせて地域とともに新たな保育の学びを創造していきたいと願っています（今野）。

保育子育て研究所年報 第9号 (2011年度)

発行者	桜花学園名古屋キャンパス 保育子育て研究所
発行年月日	2012年3月31日
住所	〒470-1193 愛知県豊明市栄町武侍48 桜花学園大学 名古屋短期大学内
電話	0562-97-1306
FAX	0562-98-1162
HP	http://www.hoiku.ohkagakuen-u.ac.jp/koso/home.html
印刷	(株) シイエム・シイ

桜花学園名古屋キャンパス
保育子育て研究所

